550
176
550-176
1200501508228

西鶴全集 第七

武道傳來記

550
176

日本古典全集刊行會板

日本古典全集

西鶴全集　第七　武道傳來記

與謝野寛　編纂
正宗敦夫　校訂
與謝野晶子

550-176

西鶴全集第七解題

一、此卷には、西鶴の小說の中で謂ゆる「武家物」に屬する「諸國敵討（ショコクアダウチ）、武道傳來記（ブダウデンライキ）」を收めた。

一、「武道傳來記」には著者の署名が無い。西鶴は自序の終りに「久方の雲に喜びの舞鶴（マヒヅル）、是れを集めぬ」と書いて、「鶴」の文字に己が名を寓し、讀者をして摸索せしめた。

一、此書は奥附にある如く、貞享（チウキヤウ）四年の初夏に板行せられた。西鶴が四十六歲の時である。

一、「武道傳來記」は八卷卅二章に分れ、毎卷に四章を收めて、その各章は悉く獨立したる敵討物語を成してゐる。「敵討」とは云ふが、武勇譚を主とするもので無く、勿論殺伐なる行爲を誇張し推讃するものでも無く、德川時代の武人の氣質、情誼、道德、境遇等を描寫することに努めてゐる。是れは後人の武勇傳や俠客傳、及び復讐譚と大に選を異にする所である。中に敵を討つ事を斷念したるもの、敵同志が翻然恨を忘れて相親むもの、敵を討ち得ずして却つて返り討に遇へるもの、女子にして敵討を遂げたるもの、其他男色關係なども書かれてゐる。是等の構想は、德川初期より著者と同時代に至る間に發生したる敵討の事實を素材とし、著者の犀利周密なる洞察と、豐麗富贍なる想像とを以て創作せられたのであらう。町人出身の文人にして寫實家であり社會觀察家である西鶴は、武勇一偏の敵討沙汰には大して興味が無かつたらしく、其れよりも敵討の事實の動機たり背景たる、德川武人の憐むべき仕官生活と生存競爭とを描寫し

たのである。武人は戰國に於ても然うであつたが、昇平の世となつては、自家の名譽外聞を傷つけない事に由つて自家の世祿の安全を保持せねばならなかつた。彼等が今日より見て枝葉の問題と思はれる事にも激怒して双傷沙汰に及んだのは、瑣末なる恥辱をさへ忍ぶことが武人の面目に關するのみならず、直ちに就職の資格、仕官の位地を失墜するに至るからであつて、必ずしも一時の短慮躁狂の爲めでは無かつた。餘儀無く短慮躁狂の態を爲さざるを得ないまでに、彼等の境遇が彼等の性情を壓迫して過敏ならしめたのである。敵となる者が然かる如く、敵を討つ者も亦、怯懦の非難を受けて仕官生活の保障を奪はれる事の脅威の爲めに、自ら奮つて敵討を敢てせざるを得なかつたのである。西鶴は「天下の町人」が勃興して黄金と酒色の享樂に飽き、人間性の自由解放を縱（ホシイマ）にする時代の一面に、斯かる窮屈なる武人階級の存在する事實を看過するに堪へなかつた。西鶴が人情世味に對する觀察と同情とは「好色一代女」より引いて、いよいよ深度を加へ來り、此篇を染めたる墨には多くの「人間愛」と「涙」とを藏してゐる。「好色本」に於て「一代女」を傑作とすれば、「武家物」に於て同樣の對稱を成す作品は此の「武道傳來記」であらう。

一、「武道傳來記」の插繪もまた吉田半兵衛の筆である。題簽は西鶴の筆と推定せられる。

一、此書もまた、東京上野圖書館の御厚意に由り、同館所藏の貞享三年初摺板（ショスリバン）原本を筆寫し撮影することを得た。茲に我我の感謝を表して置く。　猶上野圖書館の原本は、曾て柳亭種彦（リウテイイクネヒコ）（一七八三「天明三年」――一八四二「天保十三年」）の愛藏した物であり、「柳亭藏」の印が押されてゐる。

武道傳來記

和朝兵揃の中に、爲朝の鐵の弓、武藏坊が長刀、朝比奈が力瘤、景淸が眼玉、是等は見ぬ世の事。中古武道の忠義、諸國に高名の敵討、其の働き聞き傳へて、筆の林、詞の山、心の海靜かに、御松久方の雲に喜びの舞鶴、是れを集めぬ。

永鶴
壽松

武道傳來記　卷一

諸國仇討

目錄

第一　心底を彈く琵琶の海
　　形も情も同じ美童の事
第二　毒藥は箱入の命
　　人質は夢の內藏の事
第三　嘸嗒〻云ふ俄正月
　　最期は知れて女郎買の事
第四　內儀の利發は替つた姿
　　忙しき中に預け物の事

第一　心底を彈く琵琶の海

武士は人の鑑山、曇らぬ御代は久方の松の春、千鶴萬龜の棲める江州の時津海、風絶えて浪に映ろふ安土の城下は昔に成りぬ。其頃平尾修理と云へる人、天武天皇の末裔にして高家なれば、諸役御免あつて、世を遊樂に其名を埋み、五十五歳の時入道して眼夢と改め、其後は長劔馬上を廢めて禪學に本づき、常の館を離れ、西の方の山陰に、小笹假葺の庵結べば、佛の緣に引かれ、生死目前の湖、是れ則ち弘誓の丸木船、一大事踏み外しては有るべからずと、觀念の南窗に諸釋を集めて、見臺氣を移し、板戸内より締めて、人倫通ひ道無く、それ御姿を見ぬこと百日に餘りて、末末の者是れを歎きぬ。變らずして長屋寂しく、花見し梢も前栽の秋の哀れに匂ひありながら、蘭衰へ、芭蕉も猶夕風に形を失ひ、門に人稀なれば鳥の聲募つて、何時と無く内證は野と成りて、鹿も住むべき風情、此の主人の心ざし、市中の山居是れなるべし。かねて妻女も持たせ給はず、子孫の願ひ無く、心の行末を見立て美童を愛し給へり。是れも妄りに此道に溺れ給はず、筋目正しき浪人の子供に、森坂采女、秋津左京、此の貳人同年にして十六歳、心も形も是れ程變らぬ生れつきは無し。朝暮御目通りを離れず、夜は御枕の左右に竝び、わりなき御情に預かり、采女も左京も卑しからず、互に衆道の義理を恥ぢ交し、旦那一人の御心に兩人若命を惜まず、骨髓に徹して勤めけること色ばかりには非ず。武勇を元として前髪役の意氣地立て澄まし、今四五年も過ぎ行き、世間並に形の變り、

脇をも塞ぎ、前髪取りなば、其節は又自然の御用にも立ちぬべき心底、更に申すにはあらず、二人神文取り交し、固めの言葉も徒に思ひの外なる主人の御發心、生きながら逢はで別るべきか。此程は頻りに御氣を惱ませ給ふを聞けば、一入悲しさ増さり、諸神諸佛を祈り、石山寺の觀音經を讀誦し、多賀大明神に千本の小松を植ゑさせ、千代もと思ふ効無く、次第に御心地傷ませ給へば、今は仰せを背き、戸扃引き破りて驅け入り、御面影拜み奉らんと立ち出でしが、爰は又分別所、然も有らば、結句頼み少なき御心にや障らん、何とぞ今生にて御拜顔すべきことをと、やうやうに思案を廻らし、浦人を招き寄せ、棚無し小舟を借り求めて、二人簑笠に身を隠し、そのまま釣の翁に成りて、琵琶琴ひき連れて、汀づたひに御庵室の後ろに廻り、折節月の秋、中の三日、浪の花の打續き、春は磯と眺め、旅鴈心あらば其聲にして此歎き告げよ、掛浪の玉には濡れぬ四つの袖、絲の音じめに愁歎含みて、いと哀れにぞ聞えし。眼夢入道、轉寢の枕に響き、紙窗を明けて見渡し給ふに、人の心を繋ぎ留めたる舟の中にして、營み暇惜しき身の、其れには優しく、漁夫斯かる者有明移る南江の面白やと、御心自らに進みて、此琴に合はせて唱はせ給へり。「歌臺暖響春光融融、舞殿冷袖風雨淒淒、春秋の靜かに世の替れる有樣、覺むる間も無き夢なり。暫しも是れに氣を移して、江は能く船を浮べ、又能く舟を覆すの道理、行ひの障りなり。明鏡に像の跡無く、虛空の色に染まざる如く」と、車の鳴る時、二人簑笠を脱ぎて、「是れ殿樣、平女、左京が餘りに悲しく存じ、御音信を申し上ぐるなり。年月の御厚恩、そもや忘れ果つべきか。御發心の折からは、猶以て近う召し使はれ、朝に岩漏る雫を結び上げ、夕に御茶湯の通ひを仕うまつり、昔の道を更へて、菩提の道に引き入れさせ給へ。殊更御心も常ならず惱ませ給へば、御命の程も定め難し。今生にして名殘の拜顔を御許し遊ばされ、二人が思ひを晴らさせ給へ。如何なる御氣を背き、斯程まで御惡しみの深きこと、運命に盡き果てける。是れ殿樣、殿樣」と歎くにぞ、眼夢も取り亂させ給ひしが、是れ本色道の迷ひなり、何んぞ此色に大願を破るべき事の道ならずと、猶心底据わり、大方の道理聞き分けでは歸らじ、爰は方便の僞り、諸天も宥し給へと觀念して、「己れら爰に來れる者にあらず。年月我れを負き、前後辨へぬ非道、其數累なつて須彌山にも餘れり。然れども行末此姿の願ひあれば、日頃の情に其れを尤めず、全く對面、正八幡も照覽あれ、七生までの勘當」と、荒けなく仰せければ、二人立ち悚みて、重ねて返す言葉絶えて、目と目見合はせ、涙湯玉を繋ぎ、覺えて過りは無き身にも、御一言に差し當り、仔細を尋ねたればとて、よもや分けては語らせ給はじ、後日に分別あるべしと、歸る浪の打伏して、夢心にて屋敷に入りて、「詮ずる所最後なり、眼夢も次第に弱り行かせ給へば、御死去も程は有らじ。願はくは見奉りて後、心靜かに御供申したきものなれども、かねて殉死の事仕るまじきと再三の仰せを蒙りけれど、是れもまた主命を背くの道理、武士は命を捨つる處を免れては其名を下すなり。昔日、後光嚴院、文和元年二月三日に、細川頼春の家來追腹始めて、今和朝の手本として、其の譽世に高し。唯だ我我は先腹切つて、死出の山路の案内せん」と、思ひ立つ日を定め、一方口の部屋に入り、内より戸ざしを釘付にして、平女、左京が最後、銘銘に腹二文字に引き捨て、其後

の差し向ひ、劍を互に貫き、「只今」と云ふ聲に驚き、各板戸を破り、驅け入りて見れば、魂早や浮世を去つて是非も無き面影、白小袖に紋無しの袴ゆたかに、撫で下ろしたる鬢も亂れず身を固め、二人ながら中眼に開き、笑へる貌ばせ常に變らず。書置の段段至極して、此事眼夢に申し上ぐれば、御誓言も忘れさせ給ひ、やうやう庵室を離れさせ給ふに、御足立たせ給はぬを、人人肩に掛け、館に遷しければ、此の有樣に取り亂させ給ひ、「勘當せしも汝等が命の程を惜みて、さまざま申せしも徒と成り、我に先立つ心底、さりとは武士の子なり。老足なれども此道は追付くべし」と、左京が脇差を取り給ふを、皆皆取り附き、「世の聞えも如何がなり」と無理に止め奉りしに、是れより御心も疲れさせ給ひ、三日も立たぬに御命限りと成り、彼れ此れ歎き重なり、一子も持たせ給はねば、あたら平尾の家は絶え果てける。されば人程心の恐ろしきものは無し。兩人が首尾、後紀にも留るべき事なるに、同じ屋形に勤めたる近習の侍に關屋爲右衛門と云ふ者、武の本意を背き、左京に執心の數通かよはせける。初めの程は戀路を思ひ遣り、密かに道理を合點させ、「主命背く事存じも寄らず」と、以て開きて申し聞かせしに、又もや難儀を云ひ掛けけるに、外にも聞く人の座にて、爲右衛門一分立たぬ程に返事申し切れば、なかなか生きては堪忍ならぬ所を、日頃の大膽とは違ひ、おめおめと其通りに濟ましけるが、其の野心今に殘り、左京相果て、跡形も無き惡名を囀り、國中に此の沙汰させること人倫にはあらず。「此度左京は命を惜み、主人御恨みあれば暇乞ひ捨て他國と云ふを、平女引き留め、申し交せし通り、是非刺し違へて二世の同道と、義理に責められ、痛い腹を切りける」と申し成しぬ。左京草の陰にても然ぞ口惜しかるべし。或時森坂平女が弟求馬と云ふ人の一座にて、爲右衛門、左京事を又噂して、「若道にも各別の違ひあり」と、其座なるに平女事を言葉ある程盡して賞めければ、求馬よくよく聞き屈け、「是れは爲右衛門殿には無用の御褒美、左京、平女何れか相劣るべき心底にあらず。然かも左京は平女に勝れる所ありて、少しも人に後るる若衆にあらず。其上そなたにも傍輩の事、今に成つて由無き流布せらるること天命知らずなり。大勢の中にして露顯の上なれば、重ねて申さぬとは云はせじ。此事左京弟左膳に知らせて、正八幡も御自見あれ、其身免さじ」と云へば、爲右衛門聞きも敢へず、「推參なり」と立ち上がるを、求馬天理を以て討つ太刀早く車に切り放ち、靜かに鞘に收めて立ち出づるを、何れも驚安「敗亡」して、是れを止むる人無し。直ぐに左膳宅に行きて此の概略を語る内に、爲右衛門一子次郎九郎素槍ひつ提げ驅け著けしに、左膳長刀にて亘し合ひぬ。求馬は鬢鏡取り出し、姿を映して、黑髮撫で付けて、居ながら見物をしける。跡より家來走り著く時、門を固め、「軀は已ればらに取らすべし」と云ふ。此勢ひに下下あさましく遁げ歸りぬ。其跡にて左膳、次郎九郎を切り伏せ、止めまで刺しおはせ、今ぞ退き道と、二人一家を連れて、成程急がず丹波路に入りける。「古今の稀者是れぞ」と語り傳へし。

第二　毒藥は箱入の命

昔の人の家の紋、橘山刑部とて、奥州福島にて出頭、此の一人、殿の御心底我物にして、御機嫌宜しけ

れば、榮華の時を得て、武士の冥加に叶ひ、一家中此人に思ひ附くこと、御威光ばかりにあらず、其身更に惡心無く、智仁勇の兼ね備はりし人、今年二十五にして猶行末頼もし。妻女は一家老市川右衛門息女を、殿の御姨君妙松院の娘御分に遊ばされ送り給はり、三年の契り淺からず、男子を平產あり。名を市丸と改め、後喜の祝ひ成しけるに、此母兒枕〔產後〕惱ませられ、さまざま醫術を盡せる効も無く、十八の秋の初め、紅葉も薄き緣散りて、風は無常の世とて、親類歎きの止むこと無し。殊に刑部は愁へに沉み、「斯かる憂き目は我ばかりの袖の海ぞ」と、命も斷ぎかねたる舟の、行く水に數の思ひを成し、「泡沫の、一度に消ゆる身ならば、今の悲しさ有るまじきもの」と、世間向は歎きを止めて內證の愁歎、外より見る目も傷ましく、喪に籠り給ふ內に、晝夜に法華經二度づつ讀誦、殊勝に哀れに、末末の女房どもまで香花の暇無く、奥樣御跡を弔ひ奉りける。やうやう日數經りて、四十九日も過ぎければ、月代など改めて、重陽菊の祝儀に御前に出初めて、變らず大役を勤められ、此程重なる御用ども埒の明くことを喜びける。人は有りて人無し。刑部諸事の取り廻し摸似も成らざる侍なり。如何なる緣の深きにや、今に妻の事忘れ給はねば、おのおの內談して、「せめて御思ひ晴らしにも」と、色盛りの艶女あまた取寄せ、御寢間の上げ下ろしに風情作りて出だしけれども、さらに御心も通はず。あたら姿の徒らに過ぎ行きける。其れより亥子の夜に成りて、此の御家の作法を覺えたる老女、花餅の優美らしく作り成し、上へ上げて下まで祝ひぬ。杯數廻りて後、鄰人藝の物摸似、彈語の淨瑠璃、何の面白き事も無かりけり。義理譽めに夜を更かし、一人一人座敷を立ち、男は旦那ばかりにして、女中は耳の役目に聞きぬれば、道行の中程より白けて、三味線捨てて止めける。其跡は俄かに寂しく成りて、東の方の書院に出で給へば、宵は月を見しに、空、定め無く時雨れて、軒の松無用の嵐を音づれ、瑠璃燈の搖らぐを、「誰れかは外せ」と有りしに、野澤と云へる女、裲襠前して御意に從ひ、此の燈を下ろし立ち歸る面影、何とも無くしめやかに、惡からぬ身振、東育ちの女には稀なるやうに、御心移りて後帶の端を捉へて、「我に云ふこと有り」と、口早に仰せられしを、聞き捨てに逃げ行きけるが、帶はほどけて後に殘り、其身の重ね褄まばらに、あまたの女部屋に驅け込みしは氣疎かりき。女郎預の紫竹と云へる人、氣を通して、「そなたも十九廿に成りて、大方ならぬ初心」と、手を取り、腰を突き出だせば、野澤赤面して、「自らも其れ程の辨へ無きにはあらず。今日は大事の母人樣の命日」と云へば、「さても律義千萬なる人も有るものかな。主命に親の日が構ふものか」と、往生づくめにすれど、「佛は見通し、勿體なきこと」と合點せぬを、もどかしく、小梅と云へる女、お座敷に行きて、「野澤殿の帶を御返し遊ばされませい」と、廣き口を窄めて遠慮も無く近く寄れば、折節好く此女も美くしげに見えて、此帶緣の結びと成つて、ちよろりと人の戀を竊みける。其後は自ら奥に入りて御情つのり、我に成りて、是れを憎まぬ人は無し。されども小梅の女、旦那の御氣に入ること是非無く、樣附けぬばかり主待遇に成りぬ。次第に煩さく思ふ內に、心入れの惡しきこと露はれ、また最前の野澤に移り更らせ給ふを、小梅深く猜めど、さもしからねば獵の戲れの如く、波の瀨枕を交す度毎に、御不便深く成りて、外無く此の女に惱〔泥〕ま

せ給へば、小梅嗔恚の猛火燃え止まずして、神木に釘を打ち、人像を作りて山伏に祈らすれど、元來誠ならねば佛神是れを享け給はず、却つて其身を咎め給ふ。猶執念起つて、野澤が命を失はん惡事を巧み、或時菓子に斑猫の大毒を仕込みて、野澤の方へ贈りけるに、此の山吹餅を獨りは開かずして、女郎仲間を呼び集め、茶事して是れをもてなしけるに、其夜に入りて血を吐くも有り、又は胸を痛ませ、或は腹中燃えて、憂き目を見せて、此の難儀悲しく、彼れ此れ七人の女房達、同じ枕に命終りて、小梅一人生き殘るを穿鑿しけるに、因果をば免れず、其の毒藥の事終に露はれ、「此の科の果す所、牛割にしても慊らず」と、松の木の箱をさして、目口の所に穴を明けて、彼の女を入れ、毒害に遇ひし女房どもの親兄弟を呼び寄せ、恨みを晴らす爲めとて、此箱の蓋より、身に應ゆ〔ふ〕る程の大釘を打たせける。歎く片手に「惡や」と打ちぬる者も有り、「歸らぬ昔」と打たぬも有り、身内に空所も無くして、人の命も強し。九日十日までは確かに息の通ひ、十一日の暮方に終りぬ。死骸は野に埋みて、其の惡名は世に殘れり。此の小梅、生國は武藏の熊谷の者なりしが、弟に九藏とて、渡り奉公して淺草に在りしが、此事聞きて、姉が科の程は外に成して、「兎角讎敵は主人刑部」と思ひ定め、遙遙の陸奥に下り、里の草の屋に身を隱し、旅がけの商人と申し成し、小間物のいろいろを仕込み、笈箱に心覺えの刀を入れ、屋形町に出入り、いつぞの程に刑部殿の下臺所にも自由に參り、心を碎き覗ひぬれども、便るべき首尾無くて程經りけるこそ口惜しけれ。其の秋冬も暮れ過ぎて、明くる年の二月の末に、花畠の菊植ゑ替へらるるとて、中間一人連れられ、萩垣の外に出でられしを

見屆け、「此時打たずば又の時節もあらじ」と、手ばしかく件の刀を取り出だし、忍びて後ろに立廻り、名乘〔告〕も掛けず打つ太刀、夕日に映りて輝く影に驚き避け給へば、素股へ切り付けし間に脇差拔き合はせ打ち附けられしに、鬢先切られながら、叶はじとや、逃げて出でしが、折節市丸殿、御乳の人抱だき參らせ、廣庭に出でしを奪ひ取り、ひつ提げて米藏の内に驅け込み、切なきままに人質を取りて、此の幼なき人に既に憂き目を見せんとす。此の乳人悲しくて驅け入らんとする時、「己れら邊りへ近寄らば、此の世倅を刺し殺す」と胸に劍を差し當てければ、さながら傍へも近づき得ず、遠くより身を控へ手を合して、「自らと取り換へて給はれ」と悶ゆれど、其の道理も聞き分かばこそ、また其儘に殺しもせず、己れ遁るべき所にあらず、天命竭きて待ちける所に、家來の面面何れも進みて驅け入らんとするを、刑部驅け附け給ひ、押し止め、暫く方便を廻らし給ふ中に、家中一番の鐵砲の上手後藤流左衛門が二男森之丞とて、十五歳なりしが、是れを聞くより小筒に鎖玉を仕込み、火鋏きつて驅け寄るを皆皆引き留め、「爰は大事の所」と云へば、「爲損じたらば其れまでの命。手溫き評議此時に待つべきか」と、風通しの窓より目的を定め打ちけるに、劍持ちたる腕首を過たずして打ち落し、「それ」と云ふ聲に、おのおの一同に驅け入り、先づ市丸殿を仔細無く抱だき取り、危き命を助け參らせ、跡にて九藏は切り碎かれ、形は當座に無かりき。此度の手柄、森之丞が働き、國中に於て是沙汰なり。刑部殿喜び淺からず、「さて如何なる事ぞ」と嚴しく吟味し給ふに、彼の者、小梅が弟たること委しく知れて、猶猶惡しみ深かりき。其れより年經りて、市丸殿十四歳の時、國中雙び無き美童、少しは我身ながら若衆自慢なりしに、左の方の鬢の脇に僅かに黑き疵ありて、御髮結はせ給ふ度毎に、是れを隱し奉らんとて、小者が氣を盡しける。姿見に御貌を映させ給ふ毎に、御心掛かりの一つなり。或時乳人に、「是れは」と尋ね給ふに、かの鐵砲の玉のかすり危かりし昔を御物語り申す。「さては森之丞殿の御働きにて、我れ必死の難儀を免れし命の親御樣なれ、一向兄分に賴み奉るべし」と、俄かにいとほしく成りて、衆道契約の狀を作れば、森之丞嬉しさ餘りて念頃する中に、森之丞兄森右衛門、不慮の喧嘩を仕出し、相手三人に切り結び、一人をば矢庭に切り殺し、相手二人に成り、暫し戰ひしが、天運や弱かりけん、二人が爲めに終に討たれてけり。其の殘る相手、留山義太夫、鳥崎勘九郎、兩人其の所より立ち退き逐電して失せけり。森之丞安からず思ひ、兄の敵を討たん爲め、國許を出でけるに、市丸も共に附添ひ、常陸國筑波山の麓の里にして見出だし、市丸助太刀を働きて、首尾好く思ふ敵を打ち留めて、本國に歸宅して悅びの眉を開きけり。「敵打つ人は此の森之丞にあやかりものなり。市丸が心ざし、いと忝し。美形には取り分き摩利尊天も後立て強く守らせ給はん」と、皆人是れを羨みけるも道理ぞかし。猶筑波嶺の働きの後、いよいよ戀ぞ積りける。

第三　嗜哭云ふ俄正月

天正の頃、陸奥若松に五月の末大霰降りて、板屋の軒端は荒れて、東に不破の關屋見せける。其の霰暫し

は消えもやらず、秤に掛くれば八匁五分六分ありと云へり。是れにさへ人は慾心起りて、「是れ程の珊瑚珠あらば摑み取りの世の中なるものを」と大笑ひして人の心も空に成りける。其後鹿島の事觸れや告げ來りけん、「此の六月朔日を正月に成して祝ふべし。さも無くば人間三合に成るべし」と、愚癡の世を量りて神託と威しければ、智あるも死ぬることを好く人は無く、女は子供の身の上を思ひ、餅花に春を咲かせ、千代とも祈る松立て飾り、禮者は帷子を著たるばかり、其外は元日に少しも變ること無し。陰陽師は「事がな、笛吹かん」と神樂姫を拵へ、お初穗袖に餘りて、喜びの舞の拍子見し人山を成しける。爰に岩國善太夫と云へる人の一子善太郎とて、七歳に成りけるが、御乳に小坊主、抱守の者、草履取いかめしく騷き、三千石の威勢を見せて人立の中に遠慮も無く割り入り、其れより先に立つて宮越十左衛門とて百五十石にて筆役の人の二男龜松、下人も無くて唯だ一人神樂を見物しけるに、善太郎小者、首筋に手を掛け突き退けける。若年なれども龜松氣色をかへて、「諸侍を推參なる男め」と云ふ。小者手を拍つて、「袖に繼の當りし帷子を著ても、歷歷の御侍」と笑ふ。龜松脇差に手を掛けしに、未だ九歳なれば小腕を取られ、人ぜりに押し倒され、其内に善太夫小者は屋敷に歸りぬ。龜松兄に十太郎當年十九に成りけるが、常常大人しき若い者、是れを聞き附け、刀おつ取り驅け出でしを、母親抱き止め、「樣子聞き屆けて後何やうにも成るべき事なり。早や此の沙汰あるなれば、善太夫より屆けの使參るべし。然らば堪忍しても引けならず」と制し給へば、進し胸を居ゑ、内通あるかと、其日夜まで相待つに、其義無く、若し又善太夫他行の事もと聞き合はすに、成程宿に在りながら踏み付けたる爲方、「今は分別して善太夫を討つて捨て、直ぐに京の姨の許へ立ち退け」と、手箱を開けて壹歩五十、肌著の襟に縫ひ込み、九重の守袋を掛けさせて、暇乞の杯出だせし時、龜松袖に縋り、「我れ一つに連れさせ給へ」と涙を滴す。「武運盡きて我等討たれなば、成人の後に相手を討つべし。此度は一人の母に孝を竭せ」と云ひ捨て、明方に出でて、善太夫の當番の日を繰りて、柳堤に足場を見合はせ、地藏堂の後ろに暫く待つ所に、善太夫乘馬引かせ、人あまた召し連れ來り、十太郎を見掛けて近寄り、「昨日は小者が何とやら」と云ひも果てぬに、「其の斷り遲し」と拔討にして、早業の首尾殘る處も無し。其れより山傳ひの退き道、他領へ入りて花山院春林寺と云へる眞言寺に驅け込み、仔細を語れば、「さても手柄。其れ程の事は爲かねまじき人と、かねて存ずる處なり。此上は愚僧請け取り、慥かに落ち付き給へ」と、大師堂の天井に上げ置き、寺中を集め、俄かに密經を始め、法事に紛らかし給へば、僧中さへ氣の付く事にはあらず。常だに出家は賴もしきに、況してや十太郎前髮立の時假初ながら好み有れば、斯かる時命に掛けて如在無く、たとひ詮議に逢ふとても、今生後世、息の根の通ふ内は出ださじと、此事思ひ定めて追手を待ち給ふに、爰には心附かず、善太夫一家、跣馬にて驅け集まり、十郎太方へ行くに、表の門をも閉ぢず、母の親一人、藤繩目の鎧を著て、紅の鉢卷、長刀の鞘外して、鞍掛に腰を置きて、一命惜まぬ顏色、古の巴、山吹も斯く有らんと、見し人いさぎよく譽めて、女なれば構はず、十太郎國を立ち退く事を聞き屆けて、おのおの館に歸りて内談評議の處へ、横目役の兩人大平主水、駒谷源右衛門參られ、十

太郎罷り出づるまでは一門殘らず閉門仰せ付けられし。「此の方にも御詮議遂げらるるまでは、寄會遠慮あるべし」と申し渡して歸る。其後十太郎は國の樣子を聞くに、「別儀無く其通り」と云ふ人あれば、母の御事安堵して、春林寺を密かに出で、道中を夜ばかり歩りき、無事に京都に著き、松原通因幡藥師の邊に、外戚の叔母、東本願寺の末の道場に緣付しておはしける、此許に身を隱し、都ながらの花無き里の心地して、夜見る東山、高尾の秋の色も闇の錦と成し、古郷の片便宜に猶氣を惱まし、日數經る中に國許僉議つのつて、「十太郎出ださぬに於いては、一家從兄弟まで切腹」と仰せ渡され、是非も無き折節は憂き秋の初め、十一日に御意あつて、「八月十五日までに捕つて出だすべし。さも無きに於いては、宮越の一類滅亡たるべし」と、免るべきやう無き仰せを承り屆け、何れも内談固め、「斯く有ればとて十太郎は出ださじ。此上は死出の首途に人の山を成し、岩國が屋形を極樂の西門」と定め、おのおの私宅に歸る時、龜松が申しけるは、「此儀はそもそも私の身の上より起りし事、舍兄十太郎の代りに、我等切腹仕るやうに、横目衆へ御申し入れ賴み奉る」と、いさぎよく進み出づれば、此中にても義理に責められ、感涙を催し、暫く臭を打眺め、「兎角は各次第に最期の用意」と有る時、母の云はく、「とても事に、某が願ひあり。十太郎を呼び下し、是れも一所に相果てなば、何か浮世に思ひ殘すこと候まじ。十太郎生き殘り、跡にて恨むべき所も有り、日限は名月まで御待ち給はれ」と、都に刻付の早飛脚を立て、委しき狀を遣はしける。七月二十五日に京著して、姉の御方の御文心もとなしと、開け初むるより泣き出だし、十太郎への狀をば未だ差し出だしかねて、「さても淺ましや、是非無き首尾」と打伏しけれど、十太郎は元より覺悟の身にて、今更驚く事も無く、「御歎きを止めさせ給へ。人を殺して免るべき身にあらず」女心に道理を含め、合點させ參らせ、我れ此度花洛の帝都を見初めの見納めなれば、日積りして五日の隙あり。諸山を眺め廻り、假の世の思出に、案内者を一人召し連れ、方角を分けて五條を夢の浮橋と打渡り、音羽の峰に別るるも、東路の雲行く氣色、風より前に消え散りなん心に成りて、無常は鳥部山に知れての命、三十三間に矢數の武勇を思はれ、河原の狂言綺語も移り變れる慰み、昨日は北山、今日は西山、入日を名殘に四日續き、今一日の遊山に心ざす處は、爰遊女町六條を、見よし野の花の宴と云ふ太夫を、丸屋が座敷へ取寄せ、人の眺めを無理共に貰ひ、酒面白く交して、初會とは思はれず。十太郎より女郎の心深く亂れて、夕暮急ぐ牀の情、是れには僞り去つて、もだもだと成り行く心、首から身を其人の物にして、しやらほどけの黑髮厭はず、枕に近き蠟燭の立ち切る時、夜の明方を惜み、「然りとては、然りとては、更に申すも耻かしけれど、我れ流れを立て初め、六年の日數經る中に、其れに拵へ置く銀が敵の身なれば、貴賤の限りも無く逢ひ見し中に、馴染を戀の種と成し、正しく其の御方の心の通ひ懷姙せし程の男も、今宵初めての君に比べて、富士の煙と長柄の水底程の思はく違ひ、如何なる緣にや、是れ程いとほしらしき御方に逢ひ參らするも不思議の一つ、酒參りて二世までと約束の此男め、大方ならぬ因果」と、心底打明けて語る時、十太郎身には嬉しき事を勇まず、「是れは忝さ餘りて、とかう言葉に述べ難し。然れども存じ寄り有る身なれば、御情も今宵を限り、重ね

てはまた逢ひましての事」と云へば、太夫申し掛かつて赤面、「さても、さても口惜し、此身に誠寡なしと御疑ひも憎からず、近道に證據」と、小指嚙ひ切るを、やうやうに止め、「我等事思召し外なる身にて、都を見しも今晩ばかり、鷄鳴かば東に行きて、八月十四日に相果つる至極」段段語り聞かせ、男泣に前後を忘れ、身にたわいは無かりけり。太夫聞くに猶哀れの増さり、「死なせ給ひて濟む事ならば、所に構ひは候まじ。いざ自らと同じ道に」と、思ひ切つたる氣色を見て、爰は大事と分別を廻らし、「未だ好み無きに然ばいり御志の嬉しさ、神以て忘れ難し。然もあらば宿なる身じまひして、最期は此處に來て明日の事」と契約して、「恐ろしや」と立ち歸り、門から姨に暇の涙、關の清水も濁りて、大津馬に次ぎ替へて、急ぐに程無く生國若松に著きて、檀那寺德泉寺に入りて、大平主水方へ内通して、檢使を待宵の月の臭も變らず、親類にも知らせず切腹の次第、流石弓馬の家の譽れを殘しぬ。其の跡目は別條無く、善太夫家督は善太郎、十太郎跡は其弟龜松に仰せ付けられ、兩家共に筋目ある者なれば、其通りに靜まりぬ。さては流れの都の女、十太郎を思ひに焦れ、十四日の月見るまでは待たずして、身事書置したため、志は萬里に通へ、是れより女の追腹と、男のすなるやうに此の自害の樣、褒めぬ人無く、「後代にも例あるまじ」と聞き傳へて袖を浸せり。其後善太郎、龜松、成人して十七十五歳に成りぬ。「互に意趣含むこと無かれ」と仰せ付けなれども、武勇は其れに遠慮無く、兩方ともに時節を見合はせけるに、人も此の色を見て、出合無きやうに其の中を隔てゐ。或時野寺の觀音に參詣して、善太郎は詣り、龜松は下向、一騎打の細道にして、兩人出合ひけるこそ牛涯の最期なれ。「年來宿祖の仇、思ひの晴らし處爰ぞかし。是れ偏に佛神御引合」と、互の心に受け悦び、苟くも免れず、「末末一人も助太刀無用」と制し、股立取りて羽織を脱ぎ、大振袖の飜るは、花紅葉の色亂れて、さながら化粧軍かと思はれ、下下拳を握り齒を嚙み、銘銘の主人祈るに、負けず劣らず、淺手を覺えず、冬野の薄、眞紅の糸を亂し、火焔を立てて切り結べば、終に二人共に戰ひ疲れ、相擊ちに切り込まれ、切り込みて、浮田の夢とは果てにける。

第四　内儀の利發は替つた姿

御吉例の御謠初、二日未明より紅梅の間へ何れも相詰め申さるべし。十三以下は若松の間へ出座御免、又老人は鳴戸の間にて安座御許さる。法體は小書院にて見物仕らるべし。則ち頭巾御赦免なり。諸役人は夜半の太鼓を聞いて登城あるべし。役者は宵より新長屋まで詰め申すべし。此通り金塚數馬、照德寺外記兩人として申し渡され、それぞれの役儀承り、各退散申されし。既に其時到り、番組は、高砂、田村、三輪、祝言、上代風の能筆作法改めて書き付け、大横目安川權之進指圖に任せて、大廣間の見付なる長押に貼り置きしを、金塚出頭家老にて、諸事出來しだてに物毎仔細らしく吟味するに、無用の事ながら時の權威に恐れて、其通りに從ひぬれば、勝つに乘つて我が儘を振舞ひけるを、人皆是れを疎みぬ。此の番組の貼り所を暫く眺め、「總じて斯樣の物は文字の位、畠紙を見合はせ貼る事なり。番付八寸餘り上がり過ぎたり。

假初の事ながら是れを下ろすべし」と、茶道坊主に申し付けられし時、「是れは安川權之進殿の指圖にて、斯くの通り遊ばし置かるる上は」と申す。「此國に於いて某が言葉を返す者、奇怪なる推參」と、持ちたる扇にて頭を打てば、休林堪忍成り難く小脇差に手懸くるを、數馬ぬからぬ男なれば、即座に拔打にして、敢へなく夢とは成りぬ。此の休林、生國丹州の者なれば、此の家中に於いて親類とても無く、哀れや我が心から斯くは成り行きけると、理に非を付けて取り置きぬ。權之進是れを聞き付け、廣間に來り、數馬を呼び出だし、「只今休林討たれけるは、元某が身の上なり。兎角の僉議に及ばず」と、互に拔き合はせしが、數馬を緣より下に切り落し、手ばしかく止めを刺し、「全く命惜むにあらず、存ずる仔細あり」と聲を掛け立ち退くを、各褒めこそすれ、打ち止むる人無く、裏の御門より驅け拔け、屋形町の野外れにて家來の若黨一人追つ付き、先づ我が草履を脫ぎて旦那に穿かせ、「さて奥樣は何方へ退け參らせん」と云ふ。「妻子は細井金太夫方へ、此の樣子を申して賴み入るべし」と有れば、家來一圓合點せず、「是れは日頃不會なる方へ此事如何が」と申す。「汝が不審尤もなり。是れには思案の有る事なり。早速金太夫に賴むべし。我れは是れより上方へ立ち越す」と云ひ捨てて別れぬ。主人云付に任せ屋敷に歸り、末末の女には此の沙汰をもせず、娘御を內懷に抱だきて、奥樣に婢の著物を打掛けさせ、裏の忌門より連れまして出でしに、人の氣の付くべきこと無し。程無く金太夫殿の館に驅け込み、密かに此の樣子を申し上げしに、金太夫少しも騷ぐ氣色無く、「親子御兩人拘者請取り預り申す上は、心安く思ひ、氣遣ひすること無かれ。其方は急ぎ立ち退くべし」と、折節有り合はせたる路金を取らせ、還されける。さて權之進屋敷へ、數馬より一家一族、寄子の輩まで、追追に驅け付け、門を取り閉み、內に入りて穿鑿するに、中間供部屋には未だ此事知らざりけるにや、木枕に當て莨菪を刻み、或は鹽を舐めて酒を飲み、下臺所には朝飯を燒き、上臺所には女あまたの慰み業にや、早や乾餅を取り散らし、搔餅、霰餅を刻み居しが、奥御前屋敷出を夢にも知らざりき。驚き騷ぎて泣き出だす乳母介錯の人も、「こは何方へ」と身を揉みて一度に泣き出だす。「さては妻子を隱して其身も落ちけり」と、此の有樣に各立ち歸り、段段を言上する時、即ち下知ありて、先づ城下の口口に加番を付けられ、嚴しく人を撿めて往還を許さず。「權之進親類の輩には殘らず家搜しをすべし。若し行方知れずば、土を覆して僉議を遂ぐべし。年立ち歸る祝ひの先より曲事をなしけり」と、上より御立腹淺からざるも道理なり。其日は吉例の儀式も鳴りを止めける。金太夫方には弟金右衛門忍び來り、「此度の儀、常の事にはあらず、彼の人人を手前に深く隱し置かるる段、一つは上を輕しむるの恐れ、又は年頃さばかりの好みも無く、殊に挨拶善からぬ人の妻子を預り匿し給ふ謂れ無し。此儀憚りながら御思案然るべく候」と申せば、金太夫聞き屈け、「それ窮鳥懷に入れば獵師も殺さずと云へり。武士の意氣道理を立つるものは、世間の見る目と各別なり。權之進と自分が日頃不會なることは、少しも遺恨の仔細にあらず。先年關ケ原の陣旅に置きし時、彼れが親安川權藏、我らが先祖隼人と同じ組下なりしが、互に戰功を勵み、高名互角の感狀あり、兩輩共に千石づつ所知下し置かれ、役儀等しく大横目に仰せつけさせられ、安川流、細井流とて、

槍に一流づつの譽を顯はし、武勇を競ひ、自ら白眼み合ひて家名を挑みしばかり、共に主君の忠功を勤めし。彼れ此節我が心底を見定め、是非隱し遂ぐべき者と頼み掛け、我に預けし女子、たとひ一命に換へても爰は出さぬ至極なり。いよいよ常住體にもてなし、少しも色を見らるべからず」と、堅く示し合はせ、さて內室には初めを語り、「よくよく劬りて匿し參らせ給へ」と云ひ含め給へば、女性も心頼もしく、「人に情を知らるる事、斯かる時なるべし。疎そかに成らじ」と、自ら御茶の通ひまでなし參らせ、「何事も御心に任せ給へ」と、いと懇ろにもてなし給へば、奥御前嬉しさ限り無く、「此の御心入れ、何時の世に御恩送り奉るべき便りも無し。徒らに身の成り行くこと一入口惜しくこそ候へ」と、袖の柵、安川を流し、女性ながら互の禮儀、流石優しく深かりけり。されば此度の悤劇止む事無く、不日の間に此の屋形町をも井の底まで捜すべしとの風聞す。「若し吟味役の方方に見出だされては詮無し。先づ我身は中通りの女分に成るべし。渡らせ給ふ御前を此の館の奥に成し參らせ、首尾よく憂目を救はせ給へ」と、女性の智慧賢く、いみじき謀を勸められしかば、金太夫喜び、「然もあらば、其方此の屋敷におはしては、其の謀心もとなき事あり。暫く親の許へ歸り給へ」と內談して、風俗を使役の女に作り、眞紅の網袋に葉付の蜜柑を入れ、長文箱を持ち添へ、奇特頭巾を被り、小者も連れず只一人屋敷を出で、初めて玉鉾の陸地を踏み、別儀無く御里の屋形へ入らせ給ふ。金太夫安堵し給ひ、權之進奥に何事も難儀を救ひ參らせん爲め、主命に換へて謀事を運らし奉るなり。今より暫らくの程、詞を改め、我が妻子の如く、幼なき息女には實の親の如く云ひ

教へ、あひしらひ給へば、此娘いと賢くも、「今一人の髭の有る父樣は何處へ行かせ給ふ」と尋ねられしに、「それは、伯父樣なるぞ、我が父樣は是れぞ」と、金太夫殿の御膝の上へ渡す時、門外に人の聲どよめき、「人撿め」と斷り申す。役人大勢騙け入りて見るに、いづくに權之進が妻子らしき者を匿し置ける風情も無し。金太夫、權之進は日頃白眼み合ひて不會なること各存じければ、大方あらましに吟味して立ち歸る。虎の尾、鰐の口を逃れ、危ふかりし所なり。九郎判官殿、辨慶が爲めに强力と成り、富樫が關路に怪しめられ、大塔護良親王の般若の箱に御身を縮め、按察法印が難を免れ給ひしも、今の思ひに餘も過ぎじ。其れより二十日ばかりも過ぎて、樣子を見合はせ、わざと雨風騷がしき夜半に忍ばせ、弟金右衛門を付けて、權之進隱家、吉野の下市と聞えければ、送り屆けける武士の獺猛心ぞ頼もしき。妻子の對面、其の悅び幾そばくぞや、譬へて云はん方も無し。此度細井殿淺からぬ懇情、弓矢の本懷、書中に籠め、禮儀を正し、金右衛門は國本姫路に歸りぬ。世に浪人と成り敵持つ身の安からぬこと、未だ男盛りの花櫻、一片の太刀風に今にも吹いば散るべきと、朝暮の心油斷無く年月を送りける武勇の程こそ勇ましけれ。金塚數馬が一子勝之丞、後見三人同道して、權之進を討たん爲め諸國を廻る時、茶堂休林が世倅六十郎、丹後の宮津に在りしが、數馬に父を討たせ、其の喧恚止む事無く、勝之丞を討つべき所存起りて播州に下りける。連れたる供の者は本國姫路の者なり。家中の人をも見知り、案內も覺えたり、頼もしく附き添ひしが、勝之丞が運の盡きにや、山崎越に上り、瀨川と云ふ里の出茶屋に腰掛けて、手には煙管筒を持ちながら、旅疲れにや、つらつら居睡

り、正體無き所へ、其れとは知らず六十郎行き合ひたり。小者袖を引きて、「念願の勝之丞はあれ候」と小語く。聞きも敢へず刀を拔き、「休林が一子六十郎、親の敵そ、覺えたか」と名乘〔告〕り掛けて擊つ太刀に、勝之丞左の肩先を斫られ、拔き合はする間に疊み掛けて本望遂げ、止めを刺してしまふ所へ、跡より三人追つ付き、又斬り結び、暫しが程二人と三人と一命惜しまず鬪みしに、終に六十郎も討たれ、小者も空しく成りぬ。三人方にも二人討たれ、やうやう一人甲斐無き命生き殘り、行方知れず成りにき。其後權之進事は武の本意至極の僉議に相濟みて、三度歸參して安川の家榮えけり。此時細井金太夫働きも世に顯はれ、當家稀なる者二人と其名を揚げて、今の世までも語り傳へぬ。

武道傳來記　卷二

諸國敵討

目錄

第一　思入れ吹く女尺八
　落鞠に色見初むる事
第二　見ぬ人貝に宵の無分別
　能野に夢の面影出づる事
第三　身袋破る落書の團扇
　水浴びせのじやじや馬作る事
第四　命取らるる人魚の海
　忠孝知るる矢の根の事

第一　思入れ吹く女尺八

安藝の廣島へ京より枯木内匠と云へる鞠の上手下りて、彼方此方へ指南して、一家中に蹴鞠の柳麿かせ、風無き暮を急ぎて沓音のせざる屋形無し。總じて慰む業も、國の流行物に心の移り色に泥みぬ。爰に福島安靜とて殿に筋目ある人なりしが、無紋にて歡樂に暮し給ひ、殊さら鞠好にて、其友を集め、七夕の興行ありしに、其中に鳥川葉右衛門弟村之助と云ふ人今年十八、角前髪ながら美道の花の香殘りぬ。漸う暮も詰まりて、名殘の高足横切れして、藪垣を打越えて鄰の花畠に落ちける。村之助走り出で、笹の葉分けて覗けば、鞠は唐萩の枝に留まりて、其れより東の池の溜水の清げに、棚橋の掛かる所に、鄰屋敷の息女と見えて、絞羅の白きに紅の裏を付け、檜扇の散らし形大振袖の湯帷に、紫絲の組帶しどけなく結びて、亂れ髪の中程を金の紙の平髻に締め寄せ、房付團扇に梶の葉見えしは、今日織女の歌を手向ならんと思ふに、案の如く澤水に浮けて立ち歸らるる面影、天人の生寫かと心も空に成り、前後構はず詞を掛け、「慮外ながら、あの鞠に御手添へられて、此方へ返し給はれ」と云へば、草分衣に露も厭はず、鞠を手に觸れて聲の通ふ所へ差し出だし給へる手を締めて、互に面を見合はせけるこそ戀の初めなれ。其内に末の女のあまた來れば、村之助是非無く立ち歸り、裝束捨て、各より跡に殘り、又竹垣を見れば、彼の娘も殿珍らしく戀を含み、重ねて花園に立ち出でしに、理無く物云ひ交して、「筆にて心を通はすまでも無く、忍びて行かば」

と云へば、「其れを否とは云はぬ女」と、男に約束深く、闇に成る夜を待ちて裏道より高塀を越え、身を捨てて通へば、女も偽り無く、猿戸の鍵を盗み出だし、人知れず我が寢間に引き入れ、二人が命を掛けて二世まで變るな、變らじと、互に小指を喰ひ切り、其血を一つに搾り出だし、女は男の肌著に誓紙を書けば、男は女の下著に書き交して、後には戀の詞も盡きて、逢ふ度に物は云はず、涙に更けて別れを惜み、次第につのるは此道の習ひぞかし。情の日數重なるを、天鵞絨の枕より外に知る者も無かりしに、思ひの種と成りて、雪中の花に見ながら青梅もがなと無い物好きをして、腹體をかしげに成りぬ。此の息女の親は藤澤甚太夫とて物頭なりしが、廻り番にて御江戸を勤め、歸宅の折節遠州濱松に立ち寄り、同苗甚左衛門二男甚平、十九歳に成りて、然かも骨柄逞ましく、殊に大力なれば行末頼もしく、甥ながら子に貰ひて、娘の小督に妻せ、追つ付け隱居の願ひを嬉しく、同道して本國に歸り、奥に初めを語りければ、悦び限りも無く、養子の御訴訟協ひて後、祝言の事ども取り急ぎしに、小督曾て勇まずして母親に歎きけるは、「仰せを背くは不幸の第一なれども、思へば假の宿りの夢と極め、佛の道の有り難く、後の世を願ふなれば、一生夫妻の語らひ捨てて、身を絞無しの衣に成し、如何なる山にも分け登り、修行に思ひ入りければ、甚平樣へは外より呼び迎へさせ給へ」と、思ひ寄らざる事ども、母人驚き給ひ、内證にし色色意見積れども、如何な如何な承引せず。今は料簡盡きて、とやかく此の沙汰愼むに露はれ、甚平も少しは口惜しく、恨みを含む折から、村之助が忍び姿を見付け、濱松より召し連れたる小者と心を合はせ、木陰に待ち伏せして、歸る所を何の仔

細も無く打つて捨て、さて穿鑿に成る時、小督是れまでと思ひ定め、長刀振つて出づるを、乳女抱き留めて、「敵は重ねて討つ品あり。先づは屋形を退き給へ」と、かひがひしくも手を取りて、どさくさ紛れに裏門より驅け拔け、行き方知れず成りぬ。村之助密通隱れ無く、武命の盡きと蔑せられ、甚右衛門は面目にて遠慮、甚平は立ち退きける。小督は姥が働きにて廣島を逃れ、播州明石の里に知るべ有りて、女の道も日數經て此所に立ち越え、賤の屋の住まひして、手掛けぬ經營も見慣れて、縮布を織り習ひ、今日に送りぬ。月も早や累なりて、取揚婆の寐覺驚かせ、產湯沸かして待つ時、守刀を身に添へて、「諸神も憐み給ひ、男子を喜ばせ、父村之助敵甚平を討たせ給へ。若しも女子ならば、立處を去らず腹かき切つて果つべし」と、此の一念の通じ、初音強く男子を設け、願ひのままの帶締めて、大事に育て上げ、名を村丸と、髮置、袴著、引き延ばすやうに祈りしに、程無く九歲より須磨寺に遣はし、手習の時過ぎて、若木の櫻色深く、若衆の蕾と僧俗に眺められ、十三の春にぞ成れる。今は昔を語り聞かせ、「敵を討ちに出づべき時節」と、父村之助最期の有樣をあらまし話しも果てぬに、「その甚平が生國濱松に立ち越え、首を土產に追つ付け歸りて、めでたく御目に掛からん」と、身拵へして立ち行くを、二人縋りて抱き留め、「我我一所に立ち行き、討つべき日頃の大願なり。かねて心掛けたるしるし」とて、女ながら尺八を吹き習ひ、鎖の肌著に隱脇差油斷に仕込み、髮散切に深編笠、其のまま男の扮裝と成り、明石の借宿を忍び道、浪の音、松の嵐、子を思ふ夜の鶴の巢籠と云ふを、三人の連吹、鳴く音も自ら哀れに物悲しく、息遣ひは千年を祝ひ、鐵拐が峰に別れ、夢の浮橋、生田の里、布引川など渡りて、西國街道を淀より東路の逢坂山越えて、勢田の長旅に身を勞し氣を凝らし、石山寺に參詣して、紫式部が源氏の間を長崎の道者開帳し給ふを結緣に拜みて、「古は斯かる女も有り一世」と、女の身には殊更に感じて、心靜かに下向するに、年の程四十ばかりの侍、下人一人召し連れられ、旅裝束輕く、矢立の筆を早め、里人に爰の名所を聞書しておはしけるが、村丸が面影を見給ひ、「さてもの眼ざし、鬢の縮みたる所、腰の付、其のまま生寫し」と跡より私語き給ひしが、下人が聲して、「村之助樣の幽靈なるべし」と云ふにぞ、名も懷かしと立ち留まり、良見合はせても言葉を掛けかね、「此の湖の八景より、國鼎眉の目よりは嚴島の景色面白や、懷かしや」と乳女に耳雜談すれば、彼の男近寄り、「おのおのは廣島の衆か」と問はれたるに、まだ身を隱し、「播磨の者」と云へば、「正しく安藝の詞付あり。此の少人は若しも鳥川葉右衛門殿の御親類にてましまさぬか」と問はれて、返事しかねて涙ぐめば、此の男もしをしをと語らぬ先に歎き、「我れは大谷勘內とて、村之助兄弟分の者なり。不慮に是れを討たせ、其の相手を遠州まで尋ね、心のままに討ち取り、孝養にせんと遙遙行きしかひ無く、其者今程は吉野の山里に在所を聞き出だし、只今立ち行く」と語り給へば、人人勘內に取り付き、「その村之助が一子村丸」と、心底始めを語れば、皆皆一度に泣き出し歎き、「爰にして盡きぬ事なり。さあさあ大和に越えて甚平を討つての上の事ぞ」と、其れより吉野に分け入り、確かに見出だし、勘內後見をして、村丸に願ひの儘に討たせ、始終の首尾殘る所無く、無事に此里を立ち退きけると、昔を今に語り傳へぬ。

第二　見ぬ人白に宵の無分別

玄春後家とて肥後の城下に名を得たる女の針立あり。夫一流の上手なりしに、一子相傳の屋繼も無くて相果つる時、大事を女に傳へたり。其れより後夫を求めず、剃髪して妙春と改めて、療治に暇無く、殊さら奥方の病中に重寶なる者とて、屋形町心易く出入仕る。或時善連寺外記と云へる人の妹に、お種とて十八まで緣遠く、部屋住まひの氣盡し心地惱ませ、胸の痞への養生に、妙春に針を打たせられしに、次第に瞼氣を喜ばせられ、其後は朝暮御見舞申し入れ、外よりは御懇意に預り、折折の衣類まで召し下ろし賜はり、其身は飢ゑず寒からずして世を渡りぬ。又同じ家中に福崎軍平と云へる人、御使番を勤め、仁體優れて武藝に達し、今年二十六歳なるが、未だ妻女も無かりき。かねての願ひに容儀好く、器用形氣を人に尋ねられしに、妙春是れへも此程よの御出入を申し、世間話の次いでに、「緣付頃の息女は有らずや」と尋ねられしに、折に幸ひ、彼の外記殿の御妹君の御事、世に又も無き美女のやうに萬づを宜しく取り合はせを申すにぞ、見ぬ人を焦れ、其の息女を我らに賜はりなば、如何にもして申し請けたき由を語り給べば、妙春、「此儀わたくし御膽煎りて首尾させ申すべし」と、手に取るやうに談合、外記殿へ參りて仲人口を出だし、御内證へ善く善く申し通じ、此の婚禮を調へ、しるしの賴みを運ばせ、その霜月の十一日、婿取の吉日とて、外記殿には送り用意、軍平殿には迎へ拵へ、妙春は先乘物にて美美しく、大座敷に騷き、一代一度の花を飾り、銚子加への千代の初め、軍兵も心嬉しく其の面影を見しに、思ふに格別の相違ありて、姿ばかり尋常にて、横臭に幅廣く、額上がりて髪少なく、然かも脣厚く、鼻低う、附き附きの花に見比べてさへ、さりとは思はしからず。軍平腹立腕を居ゑかねて、妙春を呼び立て、「世の晝盜人とは己れが事なり。女にあらずば生けては歸さじ。なれども命を助くる代りに、あれを其儘今宵の中に外記方へ戻せ」と、思案も無く無分別に申せば、妙春挾箱の蓋を開けて金子貳百兩取り出だして、「右に御契約は申さねども、彼方の御手前宜しき故に、此の小判を送らるるなり。今の世の中は斯うした事が勝手づく、女房が好いとて御身體〔代〕の便りには成りませぬ、御爲めの惡しき事は致さぬ」と、嚴めしく見せければ、軍平堪りかねて、妙春に繩を掛けて乘物に押込み、長持、手道具殘らず外記門外に積ませければ、お種は世に口惜しく思ひ詰め、宿には歸らず、軍平方にて自害して果てにける。外記堪忍ならず、早馬にて騙け付くれば、軍平方には覺悟して大門開きて待ち受け、外記馬より下りて玄關前に走り上がるを、兩方より長道具にて挾み立て、心任せに働かせず。やうやう若黨二人切り伏せ、四五人にも手を負せ、奥へ切り入る所を、石倉尉右衛門と云へる浪人、軍平に掛かり人にて在りしが、後ろより十文字にて突き付け、終に外記は討たれける。近所の屋形立ち騷ぎたる中に、手前早に立ち退きざまに妙春も討つて捨て、一家行き方知らず、空屋敷に成りける。其の折節、外記弟八九郎と云へる者、熊野山一見の同道ありて參詣せし留守の中なり。山は雪に埋み、大木小松に見成し、枝折の薄も葉隱れの道知れず、岩根傳ひに行く末は、鳥の聲無く、風荒く、氷を碎きて息を次き、身を凝らし

て行く中に、和田林八と云ふ者足を痛ませ、心ばかりは進みて腑甲斐無く見えければ、八九郎立ち寄り、「日頃口程にも無き男、今から其の如く腰拔けて、猶行く先の峰は如何にして越ゆべきや」と手を拍つて笑ひ、「此度の參詣も汝思ひ立つ故に連れ立ちたる甲斐ぞ無き。小者にあれまで肩に懸かれ、其れよりは我らが抱きてなりとも越ゆべきを」と、林八に力を附くべき爲めに言葉荒しければ、此者是れを無念に思ひ、「足は立たずとも其方に勝る強き所を覺えたり、八幡免さじ」と、刀拔きかざして討つて掛かれば、八九郎も是非を爰に極め、切先より火を出だし、鎬削りて危き時、枯野より外記常に變りたる姿の現れ出で、其の中に飛び入り、「是れは當座の言葉咎め。我は福島軍平に討たれ、浮世を去つての亡靈なり。敵討たすべき者は八九郎なれば、大事の命悲しく、爰に二たび見ゆるなり。此の意趣止まずば、軍平を討つての後、互の思ひを成し給へ、是非に賴む」と云ふ聲の下より、消えて形は無かりけり。兩人眼前に驚き、暫し途方に暮れけるが、八九郎涙に沈みて、「運命の盡きか」と是れを歎く。林八諫めて、「今は返らぬ事なり。天を分け、地を反して軍平を討ち給へ、助太刀は某」と、八九郎に力を添へ、本國に歸れば、外記夢の告げに違はねば、八九郎、林八、直ぐに肥後を立ち出で、何處を定めず尋ねける。斯くて二年餘りも心を盡し尋ね巡り、信州戸隱山の社僧に內緣ありて、此れを賴みにして其の山中に住みける由聞き出だし、遣瀨無く心の燃ゆる信濃なる其山に忍び行き、密かに樣子を聞くに、軍平、道傳と名を替へ、世を遁れたる墨衣、佛も無き草庵を結び、東の山原に默然として年月を送るは、更に佛心にはあらず、臆病風に引き籠り、世上を恐れての山居ぞかし。八九郎、林八、笹戸を踏み破りて驅け入り、「軍平今月今日最期の覺悟」と名乘り掛けしに、昔の勇力出でず、手を合はせ降參して、「今は此身に成りて、外記殿の御跡を弔ひければ、命を助け給へ」と云ふ。八九郎庵を見廻し、「汝心中に僞りあり。用心の枕槍、形は墨染、一心は以前に變らじ。如何に逃るべき。さあ立ち上がれ」と責め掛くれば、恟はじと槍を取る手を討ち落せば、かひがひしくも討ち落されし手を左の手に持ち、林八が助太刀を討ち落し、林八を切り伏せる所を、八九郎飛び掛かり切り倒し、止めを刺し、林八が死骸に取り付き歎くに甲斐無く、今は早や髻切つて發心し、津の國中山寺の邊に身を隱し、外記林八兩人の後の世を弔ひけると、古の名は朽ちずして、今に石塔のみ殘れり。

第三　身體破る落書の團扇

人の風俗今ぞ髮頭、眉山の姿も見好げに成りぬ。昔阿波國德島に奧田戸右衞門と云へる人、都の北野に久しく浪人して居られしが、此の家中に好き親類ありて、身體取持たれて、町打の鐵砲を申し立てに三百石下し賜はり、明所ありて屋敷まで仰せ付けさせられ、首尾殘る所無く相濟む事、武藝の厚き故なり。此人當年十六の娘一人を、月にも花にも京育ちにして、美形田舍には目馴れず、見ぬ人まで聞き傳へて戀ひ忍びぬ。當當戸右衞門心底には、如何なる方にても有れ、見立てて末子を賣ひ、娘に娶せ、奧田の名跡を嗣がせたき念願なれば、外より婚禮の內證あれども取りあへず、養子を望みしに、彼方此方より此家に入緣の望

み數多なり。其中に篠原文助と云ふ人、緣ありて、諸井賴母と云へる人肝煎られて、極月二十六日に文助、戸右衞門方へ入りて、祝言の事初めめでたく、其年も暮れて、明くる正月三日の事なるに、若き者集まりて、「いざ文助に水掛祝ひ」と云ひ出づれば、各進みて「無用」と云ふ人一人も無し。血氣の男手分して、其の拵への程も無く、金箔置きの手桶五十、銀箔の柄杓五十本、衣裝づくしの笠鉾十二本、落書の大團扇に竹馬壹疋、籠張の立烏帽子、門口に持ち掛けさせ、「祝ひましての御事」と、急度使を立てける。文助聞き屆けて、「御返事は此れより」と其者を歸して、暫く分別する中に、家中是沙汰にて見物立ち重なり、作物の風流を、どつと笑うて果しける。老中の耳に立ち、「此儀は先年御法度仰せ渡されしに、今又掟を背く者穿擊すべし」。大横目兩役人に申し渡され、吟味をするに、若手一人も組せざるは無し。「兎角は其れなりけりに濟ませ」と、其の道具を取り置かせ、水も浪風も無く、阿波の鳴戸は治まりぬ。されども文助堪忍せず、團扇の書付を見しに、鶯圓樣の筆の歩み正しく、是れは千塚林兵衞が手跡に疑ひ無し。「外の人だに心外なるに、此の林兵衞は我らと從弟なるに、さりとは惡き爲方」と、腹立止む事無くて、其夜屋形に尋ね、仔細は云はず討ち捨てて直ぐに立ち退きける。「團扇の落書せしは林兵衞にはあらず、杉森新藏と云へる人の書きしに、文助心の急く儘に逸まりける」と、ぱつと沙汰をしけるに、新藏、「さこは我が筆ゆゑ林兵衞は討たれぬ。此上は文助を討つて林兵衞に手向けん」と、何處を定め無く尋ね出でしが、船中より腹中を惱ませ、色色養生の甲斐も無く、やうやう大坂に著きて五七日の後、他國の土と成りける。思へば惜き命ぞかし。さて林兵衞一子林太郎とて、其頃二歳に成りしが、女房生國は備後の福山の人なるが、此子を連れて親里に歸りぬ。「浮世に武士の妻女程定め無きものは無し」と、見し人是れを歎きし。然かも繼母なれば、何に就けても思はしからず、殊更此の腹異りの妹三人まで有りて煩く、隨分如在無く名人を捌けども、心に掛かる言葉も耳に入れば、本の母人の事のみ思ひ出だし、身の悲しきに付けて、つれあひ林兵衞の面影を現にも忘れはやらず、「惡や其の文助めを、林太郎成人して討たせ給へ」と、諸神に大願を掛けて、心の劍を削り、利道の一念骨に通りて、此の勢ひ「千尺の岩屋に籠り、七重の鐵門を構へたりとも安穩には置かじ」と、備後を忍び出で、林太郎を抱き守りて、夜霞汐風を厭はず、磯傳ひ行くに、備前國瀨戸の曙に旅の姿を恥ぢて、唐琴の泊り定めず、牛窗の濱里に網引の長九郎と云ふ者あり、是れ世を渡る奉公せし時、母人不便を加へられ、季を重ねて使はれしが、今は古里の營みしける。以前の好みに此男を竊かに尋ねしに、優しくも昔の御恩を忘れず、「是れは」と涙を流し、樣子語るに、哀れを催し、「此度の憂き事、せめては是れにて晴らさせ給へ」と、其れに連れし女も懇ろにもてなし、蘆火焚くなど、蛇の酢あへ、飛魚の丸燒、有るに任せて此人を隱まへ、世間へは女房の姪あしらひに年月送りて、林太郎も十一歳に成りて、母嬉しさ限り無く、「又二年も過ぎば諸國を尋ぬべし」と、明暮人がましく育て給へども、浦邊の業を見習ひ、鹽にて馬刀を取り、貝拾ふなど、姿から心まで賤しく成りぬ。猶末末を思はれ、讀書の道知る爲めに、緣を求めて津の國金龍寺に上し置かれけるに、流石筋目を顯はし、外の兒より大人しく、十四に成れる春の花開き掛かれる若衆の

盛り、和尚も惱み深し。此の麓の里に伊勢寺と云ふ所あり。是れは昔の歌人の伊勢が古里にして、草深き山陰ながら面白き處に、篠原文助、兼田自休と名を替へ、散切にして身を隱し、林兵衛討つての此方爰に住み成し、或年の正月三日に樒枝ながら手折りて小者に持たせ、其身は十德に朱鞘の大脇差一つにて、此の御寺に詣で、和尚に對面して世の無常を語り出だし、「今日の亡者、戒名も無く千塚氏の何がし、十三年忌に相當るなり。拙者爲めには從弟づからなるが、不慮に相果てける、御弔ひ遊ばされ給はれ」と涙をこぼす。折節林太郎薄茶を運びて、此の物語を聞き澄まし、小脇差を拔きて飛び掛かるを、自休早足利かして、其手を取つて引き伏せければ、和尚を初め各立ち騷ぎ、「是れは如何なる事やらん」と穿議をしけるに、自休は少しも驚かず、何れも鎭めて、「是れには樣子御入り候ことなり。汝は林兵衛が倅子なるべし。林兵衛最期の時分二歲にて有りしが、其れより十三年過ぎぬれば今年十四歲なるべし。かねて存じけるにも、十五にならば定めて我を覘ふべし。其節は此方より名乘り出で、心任せに討たるべきと、諸神掛けて覺悟せしに、今此處に居合せ、某に出合ふこと、其方武運に協ふなり。最前申し上げしは此者の親が儀なり。林兵衛草の陰にて然ぞ嬉しからん。さあ本望を遂げよ」とて、林太郎が劍を持ち添へ、我が腹に刺し通し、目前の夢とは成りぬ。林太郎止めを刺して、親の敵を討つことを悅び、其首を器物に入れ、御寺に御暇を乞ひ捨て、又備前國に下り、母人に御目に掛け、年來の思ひを此時晴らし給ひぬ。此の沙汰世に隱れ無く、阿波に殘りし文助後家是れを聞き付け、牛窗に忍び來て、林兵衛後家の假宿に名を知らせて切り込み、「夫の敵討」と勇みける。「心得たり」と林太郎切つて出づるを、母親引き止め、「互に女の勝負、構へて手を指すこと無かれ」と、兩人暫し戰ひ、薄手數數の働き、文助女房の太刀を打ち落し、きつと引き伏せ、命を取らずして其の斷り申すは、「如何に女なればとて道理を聞き分け給へ。夫討たれての恨みを云はば、自らこそ此方へ申すべけれ。もと林兵衛殿を文助殿討つて退き給ふを、林太郎が親の敵討てばとて、我らを其の恨みは不覺なり。文助殿過まり給ふ心ざし露はれ、此度討たれ給ふ首尾、流石武士の正道なりて討つも討たるも前生よりの因果、今以て何か互に恨みは無し。斯く手に入れけれども、然りとは、然りとは、我は格別の心中、自らを殺し給ふが本意ならば、思ひの儘にし給へ」と、心の劍を捨てて、至極を段段云ひ給へば、文助後家涙に沉み、「さても恥かしき御心底、只今膽に銘じ、義理に責められ、身の淺ましき思ひ立ち、眞つ平御許し給はれ」と、其儘自害と見えしを、是非に止め給ひ、「其れ程の思召し入れならば、我我と一所に形を變へさせられ、文助殿の御跡を弔ひ給へ。夢は覺むる間もある幻の世なり」と勸めしに、猶有り難き御心ざし、嬉しさ袖に餘りて、涙自ら手向の水と成りて、二人の女、姿其儘に髮を切りて、「此所も障り有り」とて、其れより播州の書寫坂本に立ち越え、心の淸む好き山陰を見立て、草葺の庵を結び、薄を枝折の道知るべに分け入りしより里に出でず、常念佛の鉦の音、殊勝さ次第に增さり、外無く後世の一大事忘れ給はず、行ひ澄ましておはします。林太郎も髮剃つて道林と法名し、里里廻りて托鉢し、二人の比丘尼を勞り、朝に枯木の枝を拾ひ、夕に谷の下水を掬び上げ、煙短き身を固めて、一生無言の行者と成り、每

日長三寸の觀世音を刻み、三年千體成就して、さまざま供養を成し、二人の御跡を弔ひける。

第四　命取らるる人魚の海

奥の海には目慣れぬ怪魚の上がること其の例多し。後深草院寶治元年三月二十日に、津輕の大浦といふ處へ人魚初めて流れ寄り、其の形は、首紅の鷄冠ありて、面は美女の如し。四足瑠璃を延べて、鱗に金色の光、身に香り深く、聲は雲雀笛の靜かなる音せしと、世の例に語り傳へり。爰に松前の浦浦の奉行役人に中堂金内と云ふ人、里里の仕置して廻りし時、鮭川と云へる海にして夕暮に及び、横渡しの小舟に乘りて、汀八丁ばかりを離れし時、白波俄かに立ち騷ぎ、五色の水玉數散りて、浪二つに分かりて、人魚目前に現はれ出でしに、舟人驚き、何れも氣を失ひける。金内荷物に差し置きたる半弓をおっ取り、是れ大事と放ち掛けしに、手應へして其魚忽ち沉みける。其れより高浪靜かに成りて、仔細無く陸に上がり、本國松前に歸宅して、村里の仕置の段段老中まで申し入れ、次いでに旅物語の中にも、鮭川の渡りにして人魚射止めたる事、ありの儘申せば、何れも手を打つて、「是れは例少なき手柄なり。明朝御機嫌を見合はせ、此儀御披露申し上げん」と云ひ合はされし時、其座に肯崎百右衛門と云へる、御留守番組して惡人なれば、今年四十一まで未だ夫妻も無く、世を面白からず渡りぬ。御家久しき者、殊に親百之丞御用に立ちぬれば、先知を下し置かれ、日頃我儘申すも人皆恕し置きぬ。金内此度人魚の事を僞りのやうに申し成し、「總じて確かに見ぬ事は、御前の御耳に立てぬが善し。鳥に羽あり、魚に鰭あり。それそれに其身賢く、自由に成らぬ例には、拙者が泉水に金魚あり、僅か四五間の淺水を樂しみとするに、此程雀の小弓にて二百筋ばかりも射掛けしに是れにさへ當らぬもの、兎角生物には油斷が成らぬ。世に化物無し、不思議無し。猿の面は赤し、犬には足が四本に限る」と、撿校の下座に相勤めしを、物語の相手にして無用の高聲、大横目野出武藏聞きかねて、百右衛門に差し向ひ、「貴殿廣き世界を三百石の屋敷の中に見らるる故なり。山海萬里の中に異風なる生類の有るまじき事にあらず。古代にも人王十七代仁德天皇の御時、飛騨に一身兩面の人出づる。天武天皇の御宇に、丹波の山所より十二角の牛出づる。文武天皇の御時、慶雲四年六月十五日に長八丈、横一丈二尺、一頭三面の鬼、異國より來る。斯かる事ども有るなれば、此度の大魚何か疑ふべきものにあらず」と、分別良にて申しければ、百右衛門顏色變りて、「金内殿、とても御手柄次いでに其の人魚御持參なれば雙び無き首尾」と、言葉止むこと無し。皆皆外の事に紛らかし、泊番衆に入り更り、屋形に歸りぬ。世間の人心なれば、「百右衛門惡しき」と沙汰するも有り、又、「金内何事か申すも知れず」と笑ふも有り。金内聞き捨てには成り難く、百右衛門と討ち果さんと思ひしが、一然れば我れいよいよ胡亂なる事を申せしと、跡にて人の嘲弄も口惜し」と是非無き命を長らへ、彼の人魚の體を僉議して、「武運盡きずば是れを一家中に見せて、其後百右衛門めを安穩には置かじ」と密かに屋敷を出で、鮭川に行きて、獵師あまたに金銀を取らせ、俄かに大網を引かせけるに、其魚更に見えざる事を歎きて、水神を祈りける驗も無く、明暮に浦浦を眺め

歩りきて、磯に寄る藻を掻き探し、岸に流れ木を其れかと心を盡し、日數を重ね、是れ思ひの種と成りて、次第に胸迫り、荒けなき岩に腰懸けながら、入日を西の方と伏し拜み、惜しき命掛け浪の泡の如くに消えぬ。浦人の知らせ來て、屋敷に歎く者は十六に成りぬる娘より外は無し。此の母親も過ぎし年の時雨降る頃、定め無き浮世の別れせしに、又もや父に斯かる憂きこと、袖は其儘海と成して、「せめて其の御死貞なりとも見て、後世の御供申すべし」と思ひ定めて驅け出づるに、何れの女か跡に續くは無かりき。金内寢間の上げ下ろしせし女に、鞠と云へる者二十一に成りしが、年月の情を忘れず、やうやう一人御跡を慕ひ、野も内と成し、浪を枕の宿りもせず、女の歩み捗取らず、三日と云ふ暮方に、父の最期の浦に著きて、縋りて歎くに甲斐無し。天を祈り地に伏し、樣樣身を悶え、賤さへ笑ふも恥ぢずして、「今は是れまで」と、金内死骸を二人の女抱きて海に飛び込む處へ、横目の野田武藏、上意にて驅け著け、此の有樣に驚き、先づ引き止め、「如何に女なればとて、親に敵の有るを知らずや」と云ふ。二人の女合點をせず、「金内は病死」と申す。「其の病死は百右衛門が言葉より」と、初めを語れば、娘涙を流し、「其の百右衛門は自らを緣組頻りに申し掛けしに、金内請け給はぬ恨みにや、是れ武士たる心入に有らず。然らば百右衛門を討つべし」と、二たび古郷に歸るを、武藏、道中を守護し、御前を宜しく申し成し、其後手前に扶養み置きし增田治平と云へる浪人に後見頼み、遊山の歸るさを付け込み、名乘り掛けて右の手を討ち落し、左にて拔き合はすを、娘長刀にして切り込み、倒るる。原本たるるト誤刻セリ」處を鞠飛び掛かり、心もとを刺し通し、思ひの儘に本意達し、屋形の門を閉ぢて御意を待ち請け、女ながら「切腹申すべし」と、覺悟極むるこそ流石武士の娘なれ。翌日御僉議の時分、各日頃に惡みあるなれば、老中諸役人口を揃へて惡しく言上申し、其家滅亡させける。金内娘には伊村作右衛門末子作之助を入緣仰せ付けられ、中堂の名跡を繼がせ下され、妾の鞠事は、女と申し、下下には優しく思召し、歩士目付戸井市左衛門と云ふ者に下され、有り難き仕合ぞかし。其れより五十日程過ぎて、北浦春日明神の磯より夜中に注進申し上げ、「目慣れぬ魚」と、最前の人魚差し上げけるに、隱れ無き金内が矢の根、皆皆感じて、亡き後にて侍の名を揚げける。

武道傳來記　卷三

諸國敵討

目錄

第一　人差指が三百石が物
　小道具賣に替姿の事
第二　按摩取らする化物屋敷
　打てど手の無い小皺の事
第三　大蛇も世に在る人が見た例
　蕈は當り眼の事
第四　初茸狩は戀草の種
　義理の包物心の解くる事

第一　人差指が三百石が物

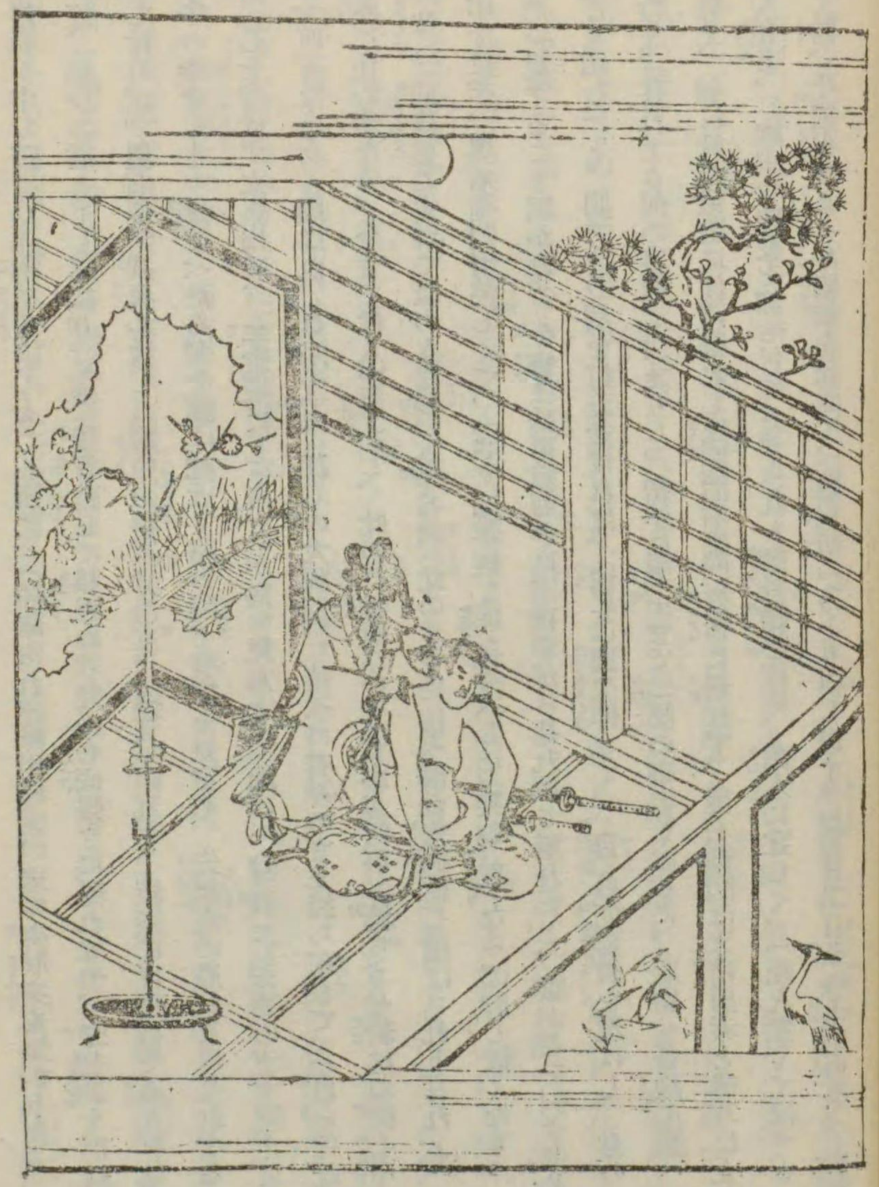
菖蒲の節句は幟兜の光を飾り、屋形町は殊さら美美しく、中居、茶の間の女の手業に、粽の小笹は戀の山、出羽國庄内に、昔日德岡伊織とて、中古御家に濟みて七十三歳まで堅固に相勤めしが、其れまで御用に立つ程の御奉公も無く、外様の番所に替らぬ役目を承り、初知行三百石、今に立身無く、馬一疋、若黨三人、世竝に抱へ、身に奢り無く、輕薄云はず、一子も無く、養子もせず、我れ一代の覺悟、律義千萬に物堅き昔作りの男なり。五日の未明より家中殘らず大書院に相詰め、大殿、唐獅子の間に御安座遊ばされ、近習の諸役人嚴かしく列座して、一人一人召し出ださせられ、目見え受けさせられ、御手づから御菓子を賜はる事御作法なり。伊織まかり出で、首尾よく頂戴仕る時、右の人差指の無かりしを御覽遊ばし、「其方が指は」と御意遊ばされし時、後へ退りて、「若い時の過失」とばかり申し上ぐる。折節御前に豐田隼人と云ふ大目付在り合せ、「伊織指の儀は、古主相州様にまかり在りし時、同じ家中鳥本權左衞門と申す者の留守を考へ、夜盗あまた忍び入り、財寶を奪ひ取り、其れのみか、其の老母を刺し殺し、裏道を立ち退く節、伊織野末を通り合はせけるに、權左衞門若黨追っ掛け、其れ盗人、頼みますと聲を掛くる。伊織二人捕へ、兩脇に挾み、其の男を待つ中に、身の切なき儘に指を喰ひ切れども放さず、仔細聞き屆けて繩を掛け、權左衞門屋形に渡し、此時の働き伊織十八の年」と申し上ぐれば、「其頃若年にして善くも仕りける」と、即座

に三百石の御加増下し賜はり、面目世の聞え、彼れ是れ有り難く、老後の思出此時なり。「次第に行歩も不自由なれば、是非に養子」と、懇ろなる各勸めければ、「兎も角も」と人人に打任せ置きしに、同じ組仲間龜石仁左衛門末子仁七郎、今年十六、滿足に生れつき、伊織子にして恥かしからねば、是れを取り持ち、内證相濟み、御前へ御訴訟申すまでの折節、山吹の色深く岸の坊と云へる眞言寺の花盛りに、若盛りの人酒に暮し、覺束なくも藤村佐太右衛門と云ふ男、人の話を外に成して、「先づ新しき事は伊織養子に仁七郎行くに極まれり。此の若衆も念者に指切つて取らせければ、又三百石御加増取るべし。十本切れば三千石が物、食は人に哺められても、知行に成る指を切り給はんか」と大笑ひして、然かも下戸の口から人の身の上を嘲りしは、武士に淺ましき心底なり。仁七郎が念友駒谷李左衛門が耳に入りて、是れ堪忍ならず。折から病後にて足の踏み所も覺えざりしが、堅固の時を待ちかね、仁七郎にも知らせず、佐太右衛門屋敷に狀を付けて、風松と云ふ野原に待ちける。今は引かれぬ所にて、弟佐太九郎と心を合せ、李左衛門に渡り合ひ、そもそもより助太刀、後ろには下人を四五人廻し置きぬ。李左衛門隨分働きぬれども、病上がりにして氣勢無く、初太刀は勝を得たれども、相手大勢なれば終に討たれて哀れや。其れより佐太右衛門は國遠して、丹後の宮津に重縁あつて身を隱しぬ。仁七郎聞き付け、北國に尋ね行き、まだ踏み初めの磯道、天の橋立の里に忍び、敵知るまでの手立に、京よりの小道具賣と成つて、小者に負箱、目貫、小柄の品品持たせて、其身は一つ脇差に編笠被き、近付求めて見合はせ廻りしに、若衆頃と思ひを懸け、無理に戯れられて、商物を小者が云ふ通りに直切らず に買はるるも、下心ありて可笑し。身に望みある故に、さまざまの難儀に遇ふも、「是れ皆李左衛門殿の御爲めなれば、何事も口惜しからず」と、氣を盡して、やうやう佐太右衛門が在所を聞き出だし、心靜かに討ちぬべき事を悦び、此の三月二十七日祥月命日に相當れば、是非に念願晴さんと思ひ極めし中に、宮津の家中に内海丹右衛門と云ふ者あり。中將李の友として、朝暮參會せしが、佐太右衛門無用の助言云ひつのりて、丹右衛門と口論に成る。兩方共に怒りて、人の曖〔扱〕も聞かずして、既に其夜野墓に出合ひ討ち果すの由、其の内證を小者が聞き出だしければ、然りとは悲しく、「若しも佐太右衛門其者に討たれなば、年月の大願徒に成り行く事の無念なり」と、身拵へするまでも無く、刀おつ取り出でて行く。暮れての道の朧月、歸鴈遥かに聲つづき、澤田の蛙雨を乞ひ、岸に角組む蘆の繁く、踏み越し足を痛ませ、心玉飛ばせて行くは、少年の塚のみ立竹の哀れに眺め、丸葉柳の陰にして息を次ぎしに、所へ内海丹右衛門、下人あまた召し連れ、果し眼にて來る。「是れならん」と立ち寄れば、丹右衛門、「何者か」と荒けなく咎めける。仁七郎禮儀正しく詞を述べ、段段初めを語り、「某兄の敵なれば、佐太右衛門を我に討たせて賜はるべし。御自分の御事は申しても當座の儀なり。御手に掛けられ討ち給はば、殘念後の世までの思ひの種」此事御聞き分け遊ばされ、御許し賜はれ」と手を下げて頼みしに、さりとは道理を辨へぬ武士にて、「其段存じも寄らぬ事。此男が相手取りにする者を、此時に及んで斷り申すは、慮外なる丁稚め」と、憎さげに申せば、仁七郎堪りかね、「己れ侍かと思ひ、色色言葉を盡せし。此上は八幡免さじ」

と討つて掛かれば、丹右衞門當惑して、「其義ならば相待つべし」と云ふ。「今は其の返事遲し、死出の山に待てよ」と、飛び掛かつて首を落し、家來を追つ散らして、石塔の手向水を掬び口に灌ぐ所へ、佐太右衞門白衣に鉢卷、下人に長刀を持たせ、山の動くが如く爰に來るを、仁七郎名乘り掛けて討つて出で、暫く鎬を削り切り結びしが、仁七郎運命强く、此れも中腰を切り下げ、弱る處を疊み掛けて切り立て、首尾止め刺す時、此の働きに驚き、召使の者跡無く成りぬ。其後氣を鎭めて、佐太右衞門、丹右衞門が二つの首を長刀にて小者に擔がせ、本國の家苞にして立ち歸りける。

第二　按摩取らする化物屋敷

今の世は人素直に成りて信心深く、神國の風俗顯はれ、惡魔を拂ひ、松に音無く、海に浪立たずして、豐後の府内靜かなる舟著とは成れり。以前此の所に化物屋敷とて、同心町の末に歷歷の屋形に人住まずして荒れ渡り、柏の秋に成りて紅葉の盛り枝に見ながら人も手折らず、萩薄自らに亂れ、唐鳥道を閉ぢて狐狸の遊山所と成り、松に宿り烏も恐れて、百年も此内を見た人も無く語り傳へり。其の折節新參の侍に梶田奥右衞門とて、軍法者、當分三百石御合力に下し置かれ、御國へ相勤め、町人の屋敷を借りて、未だ妻子も無くて暮しぬ。御家に有りたき侍なれば、年寄中も懇意にして、宜しき空屋敷もがな、奥右衞門に申し請けて、爰に落ち著かせたき内談あれども、幸ひの所も無し。或時化物屋敷の事を奥右衞門承り屆け、



此の屋敷を申し請けたき御訴訟申し上ぐる所に、「仔細あれば無用」と、老中御取次も無かりき。再三言上申せば、願ひの通り下し賜はり、急に屋普請して移りぬ。此の心底強きに恐れてや、五七日も別儀無く住み濟ましければ、奥右衞門武勇沙汰して國中の譽め者なり。或夜時雨れて、板屋に目覺めて邊りを見れば、八角の牛の形せしもの劔並べたる羽を攪げ枕近く寄る時、有樣を見定め、先年人の恐れしは是れなるべしと、双物に心を付けず立ち出で、手捕へにして己れが形を見んと、此の一心通じてや其のまま消えて跡無し。其後十四五なる女と顯はれ、貞宗の刀、孫六の大脚差、拵への有りのまま持ち來りて、「自らは此の御屋敷の片陰に住む者なり。今までは人を騙かし、此の打物奪ひ取りしが、何事も怖ぢさせ給はぬ御心中、又例無き御侍、向後惡心去つて世の人に禍を致さじ、此のままに住み慣れ穴御借し遊ばされ下されよ」と、尻聲短く申すにぞ、奥右衞門可笑しくて、「さては年經し狸なるべし。其の理ならば許し置くなり。いよいよ人に形を見すること無かれ。今宵は殊更寂しきに、夜すがら是れにて語れ」と、厭がるを引き留め、「無心なれども賴む」と、明方まで肩を打たせければ、後には狸欠伸して、自ら面影眞を現はし、身の毛立てて逃げ行く。其れより何の事無く治まりし。密かに老中まで二腰の事申しけるに、取寄せ各撿め給へば、慥かに見覺え、前に此の屋敷に住み馴れし風間治右衞門差替に紛れず、奥右衞門は天晴勇者と御耳に立ち、同心三十人預り、國中吟味役を仰せ付けさせられし御目鏡違はず、萬人に宜しく、「此人無くては」と一家中思ひ付く時、生國但馬より早飛脚を仕立て、遠親類の方より申し越す。「當月二日丑の上刻の事、御同名奥之進殿不慮の喧嘩、相手は戸塚宇左衞門、即座に討つて立ち退く。風聞仕るは方人數多の由、其者分明ならず。宇左衞門は四國へ退きたるやうに沙汰あり。其許御心底察し奉る」の由、奥まで讃むに遑無く、直ぐに御前に出で、段段敵討ちたき願ひ、御承引遊ばされ、「尤も兄の義なれば堪忍なるまじ。首尾好く討つて追つ付け歸參の時分は、先知一倍の御加增」と、有り難き御上意を受け、翌日豐後を立ち、先づ伊豫州に取り乘つて松山に上がりぬ。此の所に母人の妹緣に付き、榎本才兵衞と申す人娵婿なれば、此許に忍び居て土佐にも行き、讃岐にも越し、さまざま身を窶し、敵の在所を尋ねしに、深く身を隱して知れ難く、二年餘り心を盡せし甲斐ぞ無く、空しき年月を爰にて送る、無念なり。奥右衞門武藝何れ疎かも無し。中にも軍者なれば、此の國逗留の中密かに所望して、城取の大事各傳受すること、是れ武道の第一なり。其の弟子の中に大津兵之介と云へる美少人、今年十七、心ざし剛くして優しく、人の思ひを掛けし若衆なるが、何時の程にか奥右衞門と深く成りて、此世の外まで申し合はせて、心中殘さず互に打解けし上に、敵討つ仔細を語りければ、兵之介横手を打ち、「是れには不思議御仕合あり。其の戸塚宇左衞門は私同苗越前に在りし時の古傍輩の由にて、親仁存生の時分、兩度まで尋ね越し、其の面を見覺えければ、穿鑿すべき便り」と喜ぶ事の賴もし。奥右衞門猶力を得たり。又或時、同國今治に居る由告げ知らす者ありて、近日立ち越す折節、奥右衞門散散腹中を痛ませ、賴み少なき程惱みしを、「思へば惜しき命なり」と、兵之介晝夜枕を離れず、大方に養生を爲立て、心に諸願を掛けぬれば、先づ禮參りに浦邊の八幡宮へ參詣の道にて、宇左衞門忍駕籠に身を縮

め、兩方に逞しき若黨召し連れて、濱より小船に乘り移るを見付けて、「是れは天の與へなるに、奥右衞門ましまさぬ事の殘念なり」と、身を悶えても甲斐無し。「此れよりまた何處へか立ち退くべし。此の時節に討たずば又いつ廻り合ふべし」と、前後を見れば人も無く、取り急ぎて宇左衞門舟に乘るを、「我れ奥右衞門の弟なり。何時までか免るべし、餘さじ」と討つて掛かれば、宇左衞門下人進むを切り放てば、是れに驚き皆皆退きける。其内に宇左衞門拔き合せ、「奥右衞門が弟は心得難し。然れども向ふ者嫌はず」と、互に手を盡し切り結ぶ。暫く戰ひ、兩人茲に一命惜しまず踏ん込みて、相擊に兵之介、宇左衞門が左腕討ち落せば、宇左衞門、兵之介が左の手首切り落す。兩方に引き退き息繼ぎの中に、宇左衞門家來舟に抱き載せ、岸を離れて押し出だす。「互に此身に成りて何とて命を惜むぞ。返せ、返せ」と云ふ聲ばかり殘りて、舟は沖遥かに成りて是非も無き仕合、此儘腹かき切らんとせしが、「此段奥右衞門般に語りて後切腹せん」と、長らへて嬉しからぬ身を關はり、切り落したる宇左衞門が腕に我手を拾ひ集め、密かに私宅に歸り、其のまま此の物語と思へども、折から奥右衞門病中なれば、先づ思案をするに、「此事聞かせらるるからは、よもや其のまま置かれまじ。氣色に構はず驅け出で、萬事仕損じありては復らじ。本復の時まで相待ちて、此事を語るべし」と、甲斐無き命を繋ぎ、世間へ病中と申し成し、外科の上手諸口玄庵を内證にて頼み、神文の上にて養生して疵も大方癒りぬ。一門限つて人に會はず、深く取り籠りて在りしに、奥右衞門氣色好く、今日初立の杖に縋りて兵之介屋敷に見舞ひければ、奥へ通して只二人、此程積る事のみ語るも聞くも涙、假初に申し交せし事ながら、念友の深き意氣地、女の契りとは格別なることぞかし。互の憂き晴らしに杯交して後、奥右衞門扇拍子にして曲舞を謠ひ、兵之介に鼓所望、片手の無いこと此時迷惑して、餘の慰みに紛らかしけるに、謠猶能めずして、「常に好きの皷なれば是非」と望む。「左は虚手が傷む」とて、外科の玄庵に持たせて、二人して打つ皷は鳴り惡しく、是れも興覺めて、又居相撲と云ふ程に、兵之介進み、「我が繼の關取、誰にても片手投げ」と、割り膝にして掛かる時、奥右衞門抱き付きて、左の手の無きことを見出だし、「是れは」と驚き、「如何なる事ぞ」と氣を取り亂す時、二つの腕を取り出だし、宇左衞門に出合ひての首尾、有りの儘に語りければ、奥右衞門涙に沉み、暫し氣を取り失ひけるを、やうやうに本性に成し、「大事の身の敵を討たぬ中に、其の心入れ弱し」と叱れば、「如何にも如何にも宇左衞門めを討ち取つての後に分別あり」と驅け出でしを、袖に縋りて引き留めて、かねて助太刀の望み、殊さら此度の心掛かり、彼れ是れ以て跡には殘らぬ所存と覺悟して、右の段段一つ書にして大殿樣へ御訴訟申し上げしに、意氣道理を聞し召し分けられ、御暇下し給はり、「首尾好く歸宅をすべし。一代無役、先知六百石相違是れ無し」と、有り難き御意請けて、其れより奥右衞門同道して中國に越して、知るべを求めて穿鑿するに、但馬國入佐山の麓に久松落月院と云へる眞言寺に好みありて、是れに身を隱し、疵養生して無事に成り、忍びて近在を歩りく由を聞き定め、急ぎ但馬に立ち越え、落月院の一里離れし淺田村に假寢して、密かに樣子を見しに、兩門共に嚴しく人を咎むる由は、いよいよ是れに在りしに極まれりと、毎日道筋立ち隱れ、逢ふ事を願ひしに、

或日宇左衞門は寺掛かりの浪人に、日下源五郎と云へる者同道して、頃しも初雪の朝、追鳥狩の道具を持たせ、爰に來るこそ仕合なれ。奥右衞門飛び出づるを、兵之介引き留め、「宇左衞門片手無き者を其方の其手に掛けらるるも大人げ無し。爰は私に賜はれ」と走り寄り、「奥右衞門討たせらるる汝なれども、何時ぞやの遺恨あれば、命を我ら申し請けて討つ事なり。免れぬ所、さあ太刀を合はせ」と聲を掛くる。流石宇左衞門速業者、拔き合はせ、一命極めて華やかなり。宇左衞門下人、浪人の源五郎横合より討つて掛かるを、奥右衞門隔たり、卷くり立てて切り拂へば、五人ながら手を負ひ、此の切先に驚き、散り散りに逃げ行く。兵之介は宇左衞門を切り伏せて、「是れ申し、止めは此方様に刺し給へ」と云ふ。奥右衞門打笑ひ、「神妙なる御働き」と、宇左衞門が首討つて、めでたく豐後に歸り、二度其名を揚げて、兵之介を伊豫國へ送り屆け、是れ御前の御機嫌好く、衆道の情、武道の譽、人の鑑、世談と成つて、猶其後は兄弟の因を止めず、國里は萬里に隔てつれども、互に心を通はせける。是れ武士の本意、斯く有らまほしき事なり。

第三　大蛇も世に在る人が見た例

行く春の櫻鯛、堺の浦に限らざりけり。豫州宇和島と云ふ所に手繰の網を下ろさせ、女交りに今や引くらん。五端帆の舟二艘を出島の宿の縁の前まで吊り揚げさせ、潮を湛へて數の魚を放ち、是れぞ正眞の沖鱠、入日を金柑に見成し、浪の浮藻を水鉢に作り、此の景色は下手な仙人より增しに眺めの長じて、小船に棹さし、杯流しの一曲を興じて歌ふ處に、俄かに海上震動して白浪舟を搖り上げ、水より少し下に五丈ばかりの龍うねり廻るを、見る者膽を消し、船頭を荒けなく呵りて、「こんな所へ乘せて來るものか。夕の夢見惡しきに、來まいと云うたを、女どもが其れでは約束の義理が缺けると云うて、此様な恐い目をさせる」と泣き出だすと、著物を皆脫ぎて大小に括り付け、犢鼻褌まで放して泳ぎ支度をする。また傍らより、「さても殘り多い事は、瓢簞を持つて來れば、まざまざと水を飲んでは死なぬものを」と悔む。「何も心に掛かるものは無けれども、祝言してから十日にも成らぬ女房が、晩から寂しからう」と、涙ながら我が屋敷の方を眺め遣り、「とても此方どもは水心は知らぬ」と、手を懷に入れて舷に寄り掛かつて念佛くり返し、「彼の觀音の力を念ぜば、淺き所を得ん」と讀み出だすも有り。船頭を呼べば、「ゑ御免されましよ、目が舞ひまして」と船底に息も立てず。其中に石田彈左衞門舳先に立ち上がりて、大見槍を上段に構へ、大音揚げ、「正體如何なる者ぞ。此の治まれる時津波太平の御代に、怪しき姿あつばれ僻者なるべし」と、海上を睨み付けたる有様のゆゆしき。不思議や大蛇、淡路が島の方へ行くと見えて、景色靜かに浪治まり、皆皆夢の覺めたる心地して、又石の汀に漕ぎ戻し、辛き命を我が物にして上がりぬ。其後城下に是沙汰ある時、彈左衞門手柄美美しく話すに付けて、成川專藏、木村土左衞門が臆病の事、云はずして露はれしかども、誰れ遮つて評判する者も無かりき。されども若き衆の惡口に、臆病なる事を、夕の夢見、十日に成らぬ祝言と流行詞に爲なしける。まだ此の沙汰しかと聞かぬ男の由來を尋ねられし。其夜は五月雨降りすさみたる徒然のしめやか

なるに、小谷孫九郎、久米田新平、松川太郎八、亭主は井田素左衞門なりしに、此男成川專藏子息瀧之助と理無く云ひ交したる中にて、今宵は來るべしと、宵より手紙に告げ越しければ、何れもの長座、氣の毒の所へ、早や瀧之助密かに玄關まで音づれたるに、親專藏舟遊山の時不首尾の種種、ふと耳に入り、はつと思ひ、暫し佇みて聞き屈くれば、親仁、侍の一分も立たず、腰拔の取沙汰、座中大笑ひなれば、是れ堪忍ならぬ所、「よしよし、是れまで」と、降り續く雨にそぼ濡れて、座を立つを待ち受け、物の見事に討ち果さんと思ひながら、いやいや、此の事を云ひ募りて斯うなる時は、いよいよ親仁の卑氣〔引け〕、恥の上の恥辱、此處は分別所なり。却て不孝の科を免れず。堪忍ならぬ所なれども、胸を擦り齒を食ひしばり、所詮今の物語は久米田新平、相手に不足無しと、無念ながら宿に歸り、其後素左衞門新平に逢へども色に出ださず、時を過ごしぬ。其頃また太田鬼卜と云ふ浪人、丹石流の兵法の師をして、一家中弟子と成り、右の者共一所に集まり稽古するに、戸入の請太刀、折節新平に當りたる時、瀧之助幸ひの所と打太刀に出て、續けて二三本したるに、「其れでは止る」、「止らぬ」と穿鑿爲出しけるに、新平大人げ無く急いで、「竹刀と云うては疵が付かぬに由つて其の證據知れず。牛若輩なる口より云はれぬ事を云はんより、精を出せばつい知れる事、瓜の蔓に茄子は生らず」と呟くを、瀧之助猶聞かめ巧みなれば、「異な譬へを承る。殊に竹刀では證據の知れぬとは、眞劍では拘者え致すまいと思すか、弓矢八幡免し申さず、能く覺え給へ」と云ひ捨てて歸り、最前の意趣を是れに巧み更へたる心底、武士の子程と〔衍カ〕あり。其日の八つ時分に新平方へ狀を付け、今晩榛原にて仕合致すべき由云ひ遣りて、日の暮るるを松が根に腰を掛けて覺悟を極めける。其頃新平が念比の弟分に宮坂辨四郎此事を聞きて、只獨り爰に來るを、五月闇の文目知らず、新平と心得、「瀧之助なり」と言葉を掛けーに、辨四郎わざと言葉を交さず、新平に代りて切り結び、互に數ヶ所手を負ひて、暫し佇む所へ新平來りて、「瀧之助は何方に」と云ふに驚き、「さては人違ひか」と思ふ內に、「辨四郎助太刀に參りたり」と云ひ果てず又切つて掛かるを、飛び違へて擊つ太刀に、辨四郎が首後ろに落つると、すかさず新平拔き合はせける所へ、素左衞門また瀧之助が助太刀に來りて見れば、擊ち逢ふ度毎に鎬より出づる火は螢の如く飛び亂れ、最前より瀧之助あまた手負ひ疲れ、足も堪り得ぬを急に叩き付けられ、木の根に躓き、「南無三寶」と轉びながら受け留めて、危き所を、「素左衞門なるは」と勢を付け、新平と渡し合ひて、二打三打擊つと思ひしが、素左衞門切り倒され、「無念」と云ふ聲を最期に殘しぬ。瀧之助は辨四郎が死骸を枕にして息を吐きたるに、此の音を聞きて力を落し、「口惜しくも爰にて兩人ともに討たるるこそ本意無けれ、何とぞして新平を手に掛け、本懷を達すべく」思へども、五體續かず手を負ひて、「早や太刀打協ふまじ」と思案廻らし小聲に成つて、「南無阿彌、南無阿彌」と二三遍唱へ、「誰か有る、早く止めを刺せ」と云ふ聲に、新平氣を寬げ、「さては爲濟ましたり」と立ち寄るを、寢ながら横に拂へば高股切り落し、僵るる所を起き直りて首を打ち、「先づ本望達したり」と、嬉しきばかりにて次第に弱り果て、新平が軀に腰を掛け、差添腹に當てながら切るまでは力無く、何ぞと問ひし白玉の榛が原の露と消えけり。

第四　初茸狩は戀草の種

作州津山の古き城下に、沼菅藏人子息半之丞、美少雙無く、春は限り短き櫻を欺き、秋は月の滿つるを虧くると、見た人泥まぬは無し。此の所は海遠く、久米の皿山と聞えし麓に初茸數生ひて、草分衣露に濕ち、諸士是れに狩して勤めの暇を慰み、折柄の徒然をも宥めぬ。半之丞も今日は露の絶間がちに尾花吹く嵐靜かなるに、若黨纔か召し連れ、潸然に立ち出で、編笠を被き、姿自慢の色香を含み、嶺の紅葉一枝手折らせ、溪に知るべの草の庵に立ち寄り、暫く休らひけるに、同家中大道孫之進に扶養はれて、國の守を望みし竹倉伴藏、是れも茸狩に片山團右衞門と云ふ男に誘はれて出でしが、最前より半之丞を見て戀ひ沉み、跡を慕ひて同じ庵に便りながら、卒爾に詞を掛くべき便宜も無く佇む所に、半之丞常常詩歌に心を寄せ、此の庵の僧と楓林の月と云ふ題の心を章句に二三返、吟聲の艶なるを聞くに思ひの彌增しけるが、伴藏もかねて此道を好ける優男にて、「斯樣の推量は高き卑しき隔てぬ習ひ、疎忽ながら」と、即座の對句に數の思ひを籠めて綴れば、「さてさて忝き御心ざし、どなたは存ぜず」と頂き給ふを調子に、竹緣に捩ぢ上がりて名乘り合ひけれども、露はにしては心の淺み酌まるるも耻かしく、好い程に挨拶して歸り、其の翌日堪りかねて半之丞方へ見舞ひ、折を伺ひ心底を語れば、「思召し千萬忝し。然りながら我ら如き者にさへ、構ひ申す者あると申せば事可笑しく、されども其れ程の御深切餘り過分に存ずる上、せめては」と玉の巵の底意無く見えしを、伴藏附き上がりして、「御念比の御方はどなた」と問へば、「是れは異な事御尋ねに預り近頃迷惑致す。私是れ程の心ざしに其の御詞は御自分樣には似合ひませぬ。如何程仰せられても此段は申さず」と、念者を庇護はるの心ざし面に現はれて、強く云ひ切るに力無く、「承り掛かるからは承らねば置かず。また存じたる者に聞きません」と歸り、難無く聞き出だしける。其男は本町二丁目能登屋藤内とて、名を得し町六方の隱れ無く、心立の結構なる御侍は、是れが旗下に御機嫌取る程の器量、勿論身袋宜しきには構はず、心底の澁き男、町人にはしをらしきと思ふ折から、御姿を見初め、一命を御返事無き先に參らせたるより可愛がらせられ、此の三年の念比ぞかし。又此の伴藏は生國加州の人なりしが、是れも水野某の流れを汲むの武道暦きなりしが、尋ね行きて藤内を門外に呼び出だし、頭から刀の反を返し、「町人には腰が高し、下に居れ」と、唯だ一呑に眼を見出だし睨め付けたる氣色、藤内先づぎよつとして、「我れに是れ程に物云ふ者無し。如何樣公儀の權威も有りや」と、三指に成つて伺ひぬるに、伴藏刀に手を掛けながら、「聞けば已れめは、忝くも沼菅殿の御總領を勿體なくも兄弟分とする事、是れを麈利支天も憎しと思召さん。なれども彼れは形を見せ給はず。我れ今弓矢八幡大菩薩の神勅に任せて此處に來る。殊に今日半之丞樣の御姿を拜み奉り、御流れを頂き、向後より恐らく桓武帝の末孫竹倉伴藏平正澄御後見を仕る。只今八月二十八日より、其方彼の御門外にもから矚を運ぶこと堅く停止す。推參千萬、言語道斷、びくともせば首と胴との後朝、さあ只今返事は、返事は」大道に兩劍を横へ、白晝の往來止まつて見物す。さしもの藤内、此の勢

ひに胸轟き、雷の落ち掛かる心地して慄ひ慄ひ、「如何やうとも御存分に遊ばし、私一命お助け頼み奉りまする」と、涙を浮べけるに、不便増さりて伴藏は宿に歸りぬ。是れ程に名を得し男達も、さすが長袖の理無く、胸の焔は鹽釜の恨みは、半之丞彼の男と杯までせし事思へば堪忍ならぬ所、世の思はく、人の嘲り、生きて甲斐無く、直に屋敷に駈け込みて半之丞に逢ひて、段段云ひも果てず、藤内脇差切り付くるを、ひらりと退き、「然りとては其れには樣子あり、先づ心を鎭めて物を聞き給へ」と、止むるをも聞き入れず、直打に擊つ太刀に、半之丞右の肩先を過まり、此の騷ぎに家老、家の子ども走り出で、駈け隔たり、藤内を微塵に斬り碎き、「半之丞深手に見えさせ給ふ」と、各肩に掛けて内に入り、「藤内事は慮外者ゆゑ討ち捨てに致したる」と奉行所へ斷り、死骸は弟藤八に下さるるにて濟みぬ。半之丞さまでの手とは思はざりし難儀、九月十二三日の頃より驗氣を得て、「つらつら藤内仕方餘りに短氣にて仕損じ給ふ時、我れ此手を負はずは、家來の手に掛けてやみやみと殺させはせまじもの、悔みて甲斐無き事ながら、去年の明日の夜は、竊かにお主の部屋に伴はれ、自ら東の窗を開け、南面の簾を卷きて、しめやかに語り慰み、二人が中に交す枕は、傾く月の桂ならでは知るもの無く、籬の菊の滴りを受けては、不老不死の藥を求めても、契り久しからん事を誓ひしに、思ひの外の憂き別れ、其の詞も早や夢に成りたるよな。此の懷かしき心の中をば露も知り給はず、はかなく消え給ふ時、さぞ某を恨みと思しけん。さうでは無い心底を、とても恊はぬ浮世に、竹倉伴藏が憎き仕業ゆゑ、まざまざ斯う死なし、死なば俱にと云へる人を先に立てたる始末、是れは如何なる因果廻り來て今の悲しみ、思へば兄分藤内殿の敵は伴藏なるもの、南無三寶後れたり、免さぬ、免さぬ」と、未だ疵の半も平癒せざるに駈け出でては絶え入り、狂ひ出でては伏し轉び、現無き風情、親父藏人を初めて、次ぎ次ぎの者までも興覺めながら推し鎭めぬ。此の下心を知れる程の者は、殊更哀れに袖を紋りける。爰に藤内弟藤八、今年十六に成れるが、兄やみやみと討たれたるを無念に思ひ詰め、「所詮敵は半之丞、年來の心底翻へしたる侍畜生、今は駈け込んで一太刀恨みん。今宵は忍び入らんとは思へども、仕損じては却つて恥を重ぬる。兎角時節を窺ひて」と、是れも常常死支度して時を移し、其年の十月十九日の夜半に、「沼菅半之丞御見舞」と云ふ。「さてこそ望む所」と身拵へして、尋常に討ち果さんと、先づ座敷に通し逢ふより早く半之丞涙を流し、「こなたに御目に掛かるも面目無し。今まで命長らへし事は、是れを其方へ渡したく思ひし故」と、下著の片袖を引き千切りて包みたる物を投げ出だして、前に伏すと見えしを、引き起せば、早や懷の中にて鎧通を心もとに刺し込みながら息絶えぬ。さて包みたる物を開くれば竹倉伴藏が首なり。「是れは」と切り目を見るに血引かず、何方にてか洗ひて落著きたる爲方、藤八憫れ果て、「何事も前世の業なるべきを、是れ程いさぎよき心底知らずして、今まで半之丞を恨みたる、由無や。是れを種として二人の佛果を祈らんには」と出家しぬ。

武道傳來記　巻四

諸國敵討

目錄

第一　太夫格子に立つ名の男
形は埋めど武士は朽ちざる事
第二　誰が捨子の仕合
腰本の久米情に身の果つる事
第三　無分別は見越の木登
敵も一度主人に語れぬ事
第四　踊の中の似せ姿
舌の劔に命を取る事

太夫格子に立つ名の男

吸付莨の煙、富士を夜見る女郎町、安部川の騒ぎ、三島屋が格子の前に立ち重なり、聞き耳を駿河なる時花太夫、相模、吉野が連れ歌、替りさんさの節も色に移りて、人皆悩み〔泥み〕深く、身袋破れ菅笠と唄ひしも古き昔とは成りぬ。戀は闇こそ有興しけれ。出家も頭巾の山深く、茶問屋の客も女珍らしく、旅人も一夜ぎりの慰みに浮れ、かざし扇をするも有り、編笠を人も咎めず、斯かる悪所は互に堪忍するこそ善けれ。折節同じ屋敷を忍びの友、青柳十藏、榎坂専左衛門、此の両人供をも連れず、竊かに浮世狂ひに亂れ歩りき、宵に飲み過ごしたる醉ひの機嫌に正氣を忘れ、無用の口論をして日比の好みを顧みず、刀抜き合せて切り結びしが、十藏首尾好く専左衛門を討つて捨て、取り廻し好く立ち退き、屋敷に歸り、沙汰無しにして世上を聞き合はせける。専左衛門弟専兵衛、其夜の明方に聞き付け、其の所に行きて、さまざま穿鑿すれども、遊女町の者、相手は知らぬ掘まり、辻番托言れて効無く、先づ死骸を取り置きて其後屋形に立ち歸り、無念重なり身を悶えて、討手分明ならねば是非無し。然かも掟を背き、夜中に屋敷を立ち出で、其上所悪しき身の果て、彼れ是れ御立腹遊ばされければ、御長屋に堪りかね、大横目衆内證申し立ち退きしが、専左衛門女房の歎き、殊に七歳に成る専太郎、此の二人専兵衛介抱して、清見寺の近里に知るべ有りて、俄住居の假枕、夢さへ匹偶の事面影に立ち添ひ、寢覺に専太郎が、「父様は」と尋ねし時、猶又心も亂れて、世に長らへ

て物思ひ、「身をあだ浪に沉めん」と、蓑戸開くれば浦寂しく、三保の松風吹き續き、月冴えわたる小舟に漁人の呼び聲、女の聲、子を思うての蘆火焚く、賤しき身にさへ心ざし殊勝に、清見寺の鐘も耳に響き、昔も此里の母人、子を尋ね行き、近江なる三井の古寺の事どもを思ひ出だして一しほ袖をしぼり、「我れ相果てなば然ぞ專太郎が歎くべし。女の心のはかなや。夜を日に繼ぎて成人させ、是非に敵を討たせでは」と覺悟し更へて身固め、愁へを胸に含ませ、面は鬼に見せて、其後更に歎かず。專太郎が獨り遊びの傀儡坊、竹馬を捨てさせ、女房ながら打太刀して兵法を勵ませける。專兵衞は安倍川の邊に忍び行きて、喧嘩の次第、世の噂を聞けども、いよいよ相手は知れざりき。此事無念なれども是非無く、色色思案廻らし、かねて挨拶悪しき人もやと吟味せしに、其の思ひ當りし事も無し。分別盡き果て、世間の人に逢ふも恥かしく、脇道に差し掛かり、傾城町より野を分けて、川邊寶臺院の前を過ぎて狐が崎に暮れ掛かりしに、冬野の草枕して乞食四五人集まりて、「生あれば食あり、是れを代成して仲間の酒手せん」と、黑き羽織を一つ、袖を返して、「是れを今仕立てさせば小判貳兩にては出來まじ。長も二尺七寸あり、善い買手あらば捨てても三十五匁、五人に七匁割」と算用する聲聞きて立ち寄れば、專兵衞勢ひに恐れて、咎めぬ先に聲を慄はし、「是れは此程女郎町の喧嘩の夜拾ひました」と申すにぞ、取り上げて紋所を見しに、丸に水車、是れぞ青柳十藏が定紋なり。さては敵知れての嬉しく、「此の羽織を落せし人は何方へ行くぞ」と尋ねしに、「其れは存ぜず。人立ち騒ぐ中にて拾ひました」と、申すに僞りはあらじ。「此の羽織我れにくれよ」とて、有り合はせたる金子を取らせ、此の紋所を證據に十藏を覘ひける。此の沙汰屋敷に聞えて、十藏妻子も無き者なれば立ち退き、行方知れず成りて、專兵衞猶悔みて、「己れと知れぬ中こそなれ。天を分け地を探し、此の本望遂くべし」と一筋に思ひ定め、十藏生國出羽の山形の者なれば、爰に立ち越え、一年餘りも覘ひしに、未だ故郷へは歸らぬに極まり、又駿河に戻りて空しき年月送る中に、賴みし宿の主人一子に娌を迎へけるに、草深き所なれば祝言の作法も辨へ無く、專太郎母人に尋ねける。此人都育ちにして萬事心得給へば、銚子の取り廻し、末末の女に教へられし容儀、昔の姿殘りて美くしき生付なり。專兵衞は眞那板に掛かり、結び昆布など拵へしが、其夜から出來心にて兄娌を思ひ初め、武士の義理をも顧みず、寢間に忍びて言葉數數盡し、人の聞え、世の思はくをも構はねば、一生の迷惑爰に極まり、涙袂に餘り、「然りとは天命背き、道ならぬ御事、思ひも寄らぬ御調謔、如何に女なればとて、專左衞門殿に離れ、後夫を求むる心底にあらず」と、道理至極の斷り、專兵衞更に聞き分けずして、猶猶無理を進み、夜著の下臥しする時、今は是非を一つに思ひ定め、肌刀を拔きて專兵衞が脇腹を刺し通し、其の刀にて胸を貫き、惜しや二十四の春の夜の夢とは成りぬ。亭主悅びの中に斯かる難儀に遇ひ、此人の親類も無き軀を取り置きて、思ひも寄らぬ無常を見し事ぞかし。其後專太郎九歲に成れば、大人しく、伯父專兵衞を恨み、母を悲み、「長らへて詮無し」と、命を捨つるを、抱き止め、「武士の子として知れたる親の敵を討たずして、今空しく成り給はば、草の陰なる父母、然ぞ口惜しかるべし」と、さまざま申すを聞き分け、「此上ながら賴む」と涙をこぼすを見て、心なき野人まで憐

みを掛けぬは無し。其れより世上知る爲めとて、清見寺の膏藥に遺はし、藤の丸屋の見世に置きしに、美少なれば旅人の目に立ち、直ぐに通るは無かりし。年の浪沖津に重ね、十三歳に成りて、「當年は父專左衞門七年なれば、敵十藏が行方を搜し出だし、首を佛前に手向けん」と、何れもに暇乞ひて、思ひ立ち行く心入れ、「流石侍の子なり」とて、各涙に暮れける。召し連れし一人は、親專左衞門に使はれし吉藏と云へる小者なるが、昔の御恩に尋ね出で、此時の後見するこそ賴もしけれ。十藏面も此者見知れば、是れを賴みに先づ東路に下りける。此事十藏傳へ聞きて、若年の氣を盡し、我を討つべき所存、專左衞門子なり。つらつら世の有樣を觀ずるに、兎角は夢に極まれり。我れ專左衞門を討つて後、其のまま切腹すべきこそ武道なれ。さもしき心底起りて世を忍び、人の誹りを請けぬる事も由無し。我が方より名乘り出でて仔細無く討たれて、專太郎が本望を遂げさすべし」と、遙遙の國里を急ぎ、清見潟に尋ね上れば、專太郎は東國に行くと聞きて、歸れば北國に廻り、西國巡れば南海に行き、一年に餘り逢はざる事を歎氣し無く、「我が生國出羽の羽黑山の麓寺觀音院にて待つべし」と、興津川に札を立て置き、其身は東に下りけるが、何時と無く疝氣に惱み、さまざま養生するに賴み少なく、世の限りと見えし時、觀音院を深く賴み、「我事常常申す如く、人に命を預りし身なれば、今と成りて病死、さりとは武勇の本意にあらず。然りと云へども、時節の命なれば是非無し。死去の後、形を此のまま土中に築き込め、專太郎尋ね來らば、たとひ白骨と成るとも、二たび我を掘り出だし、敵を討たせ給へ」と、確かなる詞殘して終に空しく成りぬ。十藏遺言の通り其の軀を取り置きける。專太郎は諸國巡り來て、沖津の札を見るより、出羽の羽黑に立ち越え、觀音院に名乘り入りしに、住僧初めを語り給へば、專太郎驚き、「折角爰に下りし甲斐も無く、敵を手に掛けざる事の殘念なり。されど十藏殿心底疑ふまじきは、清見寺まで尋ね出でられし所、男なり。此上の願ひ、其の死骸を見ずしては浮世に心の殘れり。其れ見せ給へ」と申せば、法師おつ取り鍬して塚のしるしを掘り除け、形を見せけるに、早や百日餘りも過ぎけれども、在りし姿の然のみ變らず、生ある人の眠れる如くなり。走り寄りて聲を掛け、「榎坂專左衞門が世倅專太郎なるが、親の敵の軀なれば討つ」と云へば、十藏死骸眼を開き、笑ひ良して首差し伸ばす。此の心通を見て猶いさぎよく、指したる刀脇差を見れば、双引にして目釘竹を外し置き、專太郎に手向ひせず討たるる覺悟の心入れ、例無き男なり。「此後恨みは無し」と元の如くに埋みて、其跡念頃に弔ひ、「今は世界に望み無し」と卽座に髻切つて、觀音院を師と賴み、出家堅固に勤めける。惜しや盛りを待つ花の帽子、身は墨染の櫻散る世語。

誰が捨子の仕合

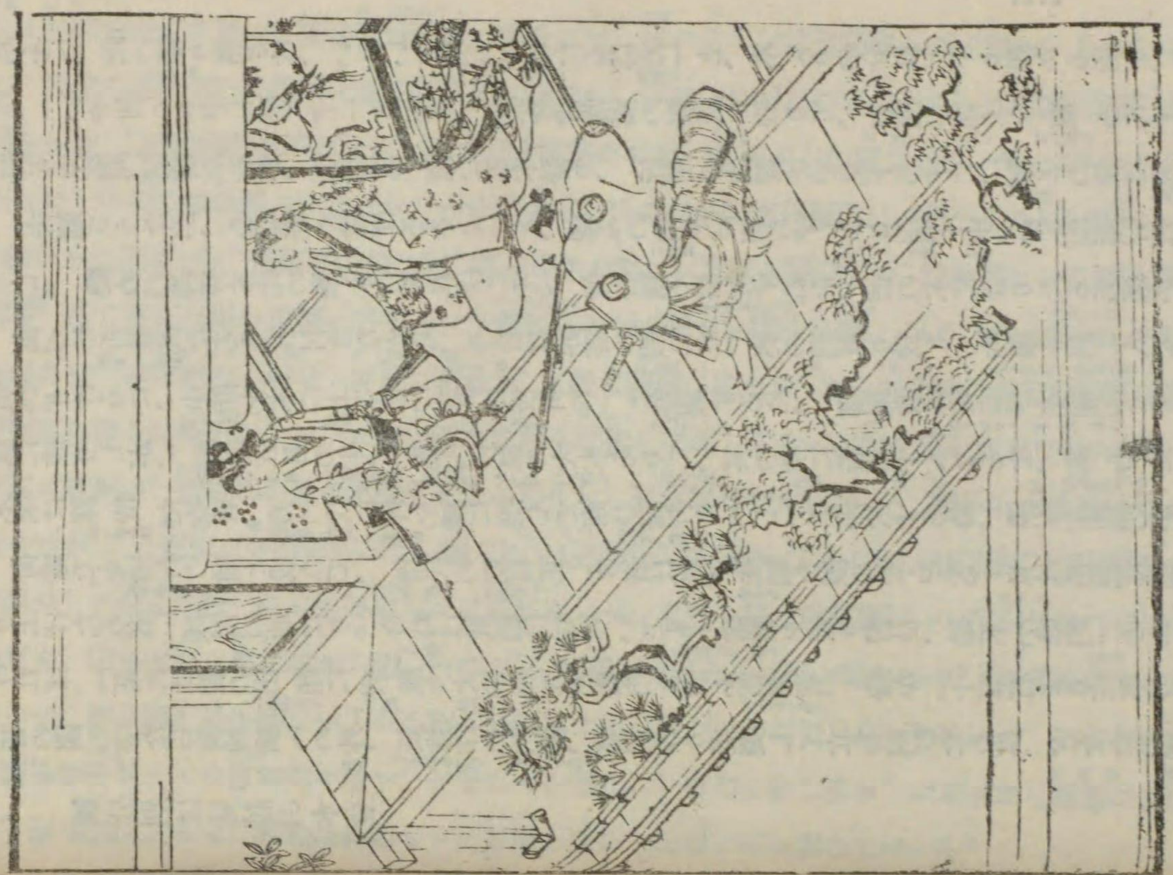
心の海を横渡しに、昔島原の舟著に、辻岡角彌とて、浦の吟味役人して在りしが、御奉公疎略して明暮奢りを極め、京より美女を取り寄せ、其上他國よりの緣組を堅く御法度を背き、泉州堺の手前宜しき町人の娘を呼び迎へ、樣樣我がまま重なりしを、家老中密かに數度意見加へられしに、一圓承引致さず。女を幾人、

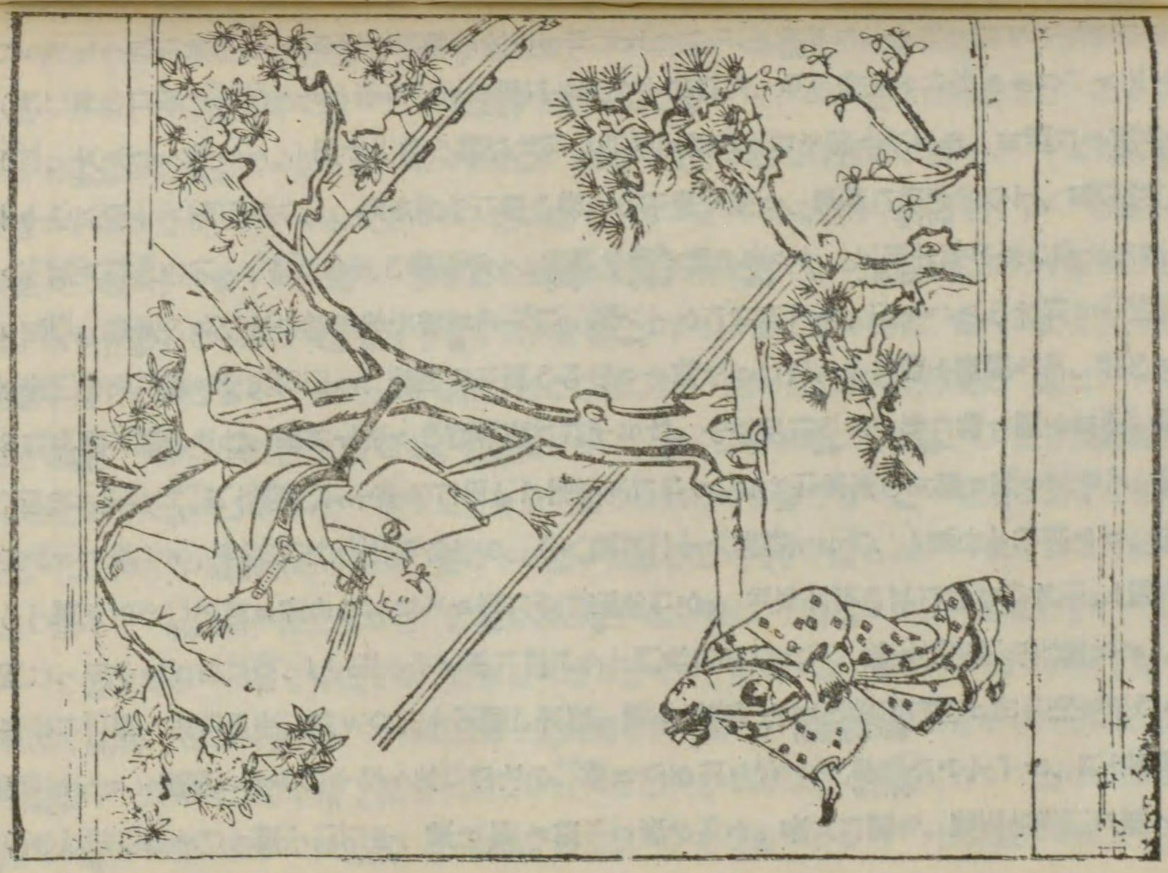
か手打にせし事、其外十二ヶ條の悪事、横目役より言上申せば、御僉議極まり、柏崎茂右衛門、矢切團平、此の二人に仰せ付けさせられ、角彌討つべき御科の御書付下し賜はり、兩人上意請けて角彌濱屋敷に案内無しに入りて、「仰せ渡さるる段段聞き給へ」と、茂右衛門書付讀み仕舞へど、團平後れて不首尾の時、茂右衛門拔討に、仔細無く角彌を止めまで刺して立ち退く時、團平言葉荒く、「最前申し合はせて圖を取り、其方は箇條書を讀む役、此方討つ役に極めしに、無用の出來し立て、八幡堪忍ならず」と眼色變へて詰め掛くる。茂右衛門少しも騒がず、「此儀二人承れば、何れか前後の論に及ばず、是れ兩人の働きなり。角彌首尾好く討ち取るこそ仕合なれ。御前の御機嫌なるべし。急ぎ給へ」と、首、羽織に包みて立ち退く所を、後ろより茂右衛門を切り付けしに、「卑怯者」と拔き合はせ、團平に討ち掛ける太刀先下がりて終に討たれにける。死骸、角彌が働きのやうに取り直し、立ち退く所へ、歩士横目千本勝五左衛門騙け付けしに、我が手柄のやうに次第を語りけるに、物に馴れざる男にて、死人改めもせずして、團平口上の通りを、我れ見たやうに申し上ぐれば、團平一人の働きに成り、即座に百石の御加増下され、武士の面目、世の聞え、彼れ是れ宜しく、家榮えける。茂右衛門妻は知らぬ事とて最期を悲しみ、「日頃は人に後れ給はぬ御所存なりしが、武運盡きぬれば是非も無き世の中に、殘りて住むも由無し」と、二十一にて髮を下ろし、山居の身なり。夫の爲めの香花、今は心も開けて、出家堅固に勤めけるにも、明暮夫の事のみ忘れ難し。茂右衛門一子も無ければ其家絶えて、諸道具は其兄茂左衛門方に取り除け、後家比丘尼には是れより扶養を遣はしける。定め無きは世の成り、つらきは人の心ざし。團平其後は世間の善きままに何時と無く奢りて、人皆是れを憎みし。殊更家來に情を掛けず、一人一人恨み申すぞ因果なり。或時若黨の九市郎と申す者、紙細工云ひ付けられ、枕屏風を張り立てけるに、「仕立悪しき」とてさんざん「無調法」と言葉荒けなく蹴立てられしを、主人なから氣色常に替れば、長屋に追ひ込み置かれて憂き目に逢ひける。各詫言すれども聞き入れ給はず、近近に成敗極まれり。同じ屋敷に召し使はれて腰元の久米と云ふ女、何時の日か九市郎と云ひ交はして、二世の語ら成して、末末一つの願ひ、年の明け行く事を待つ中に、此の難儀悲しく、雨の夜人靜まりて後、九市郎追ひ籠められし長屋の窓に立ち忍び、互の憂きを語り盡し、「我が命を取らるる程の事にはあらず、然りとは酷き爲方なり。此の怨念外へは行くまじ。其方も斯く成り行く身の程然ぞ不便に思はるべし。何事も主命なれば是非も無し。されども身に過まり無くて死すること後の世までの迷ひなり。且那に此の恨みを成して此家失ふ事こそ有れ、日外の上意打、柏崎茂右衛門殿手に掛けて角彌殿を討たれしに、主人後れて首尾悪しき故に、茂右衛門殿を角彌殿討たれし處を切り伏せたるやうに御前へ披露申されしが、眞は茂右衛門殿を且那騙し討ちにして、世には手柄觸れける。是れ畜生なれば、此事茂右衛門殿兄茂左衛門殿に告げ知らせて、主人團平を亡い者にせば、我れ相果てても思ひは殘らじ」と涙をこぼす。とやかく歎く中に、夜も明けわたれば、別れの後、九市郎を引き出だし、慮外者の斷り立つて手打に成りける。腰元の久米は屋敷を拔け出で、茂左衛門殿に騙け込み、此の段段を語り、舌喰ひ切り、夢よりはかなく消えける。此のこと一家中の沙汰と成

り、自ら天命免るる所無く、團平非道顯はれ掛かれば、堪りかねて其夜屋敷を立ち退き、いよいよ惡人に極まれば、其時の横目役千本勝五左衞門儀不念に極まり、切腹是非も無き仕合なり。其後茂左衞門家老中まで御訴訟申すは、「茂右衞門事弟ながら、是れは格別儀なれば、敵討ちたき願ひ」申し上ぐれども、「世の御仕置立たねば、子方の者僉議して討たせ」との仰せ出だされなり。茂左衞門にも娘ばかりにて男子を持たねば、差し當つて分別及ばず、御暇申し請けて、浪人の身と成りて諸國を尋ね巡り、二年過ぎての秋の頃、江州志賀、唐崎、此の兩里に在る由聞き出だして、逢坂山を立ち越えて關寺の邊にして、未だ誕生日も過ぎまじき捨子を拾ひて、名を茂吉と改め、乳姥に抱かせ、大津の屋形に行きて、此の世倅親の敵討の御帳に記るし、其れより在所を確かに見出だして、八月十四日時節を待宵の月見、所の人を誘ひ團平濱邊に出でしを、名乘り掛けて討ち濟まし、姥抱きながら茂吉に止めを刺させ、天晴働き殘る所無し。團平が首器物に入れさせ、本國に歸りさまに、茂吉に金子拾兩付けて藪の下の若莨切の許へ養子に取らせ、茂左衞門は肥前國に歸り、團平討ち取り、上方の首尾、所の御奉行よりの添狀差し上ぐれば、殿の御機嫌宜しく、先知に二百石の御加增下し賜はり、母衣大將に御役替まで成し下され、武勇此時國中に其名を揚げける。「茂吉事筋目は如何なる者なりとも、茂左衞門が才覺にて一たび茂右衞門が一子に爲立てければ、急ぎ呼び下し、茂右衞門名跡を相違無く續がせ申せ」との御意有り難く、大津に人を遣はし、茂吉を呼び寄せ、九月九日の御禮日に御目見え濟まし、家の悦びを重ね、菊醉ひを勸めて千秋樂を謳ひ、柏崎の名を祝ひけるとぞ。

無分別は見越の木登

「肥後の昔の國の守なる御城構への外、新造作の門櫓、長屋作り美美しく立ち竝びたるは、どなたの御屋敷」と尋ねければ、「是れは彼の出頭に暇無き大壁源五左衞門と云ふ新參者、纔か二十五石より三年の中に二千石取り上げたる者の拜領の地なり。今時は武道は知らいでも十露盤を置き習ひ、始末〔儉約〕の二字を名乘れば、何處でも知行の種と成りて、譜代の筋目正しき者は必ず先知を減少せらる。世は色色に變りて、今より末末は諸侍たる者、刀の代に秤を腰に差して商ひ流行るべし」と沙汰する時、源五左衞門が一子小八郎三歳に成りしが、折節五月の半、築山に楓の大木ありて、其の梢に若葉千入なるを、童心に急に欲しきと煩かりけるに、中間を木に上らせ、「其の枝折れ」と差圖するに、鄰屋敷は安森戸左衞門とて家久しき侍、萬づに折目高なる生れ付きながら、今日は非番の暇にて、奥の間取り放して內儀と只二人しめやかに物語りし。勤めの苦勞も此の樂しみあればこそ。何心無く假枕するを、彼の木に登りたる男遙かに是れを眺め、「夫婦さうなが、心地好く遊ばるるよ」と、望みの梢をば切らずして見廻す中、戸左衞門見付けて、「あれは源五左衞門屋敷なるが、無作法千萬なる木登り、近所の內證まで見下ろすに、斷りの使は來るか」と云へば、「いや何とも申し來らず」と云ふ。「其身常常殿の權威を假りて、古座の諸士を蔑ろにするさへ憎しと思ふに、此の斷り無きは、いよいよ踏み付けたる爲方」と、木より半分ほど下り掛かる所を、鐵砲二





つ玉込めて狙ひ澄まして撃てば正中、氣も魂も抜けて落ちける。是れに驚き、源五左衞門に斯くと云へば、「勿論此方より一應斷り無きは不念と云ひながら、餘りなる仕こなし、堪忍ならず」と、戸左衞門方へ行きて、事分け二言と云はぬ先に拔き合はせて撃つ太刀、源五左衞門が長刀鴨居に切り付け引きかぬるを、車に拂ひ倒し、止めまで刺して、「今退く」と奥に知らせて門外に出づれば、源五左衞門が若黨ども、「さては」と切つて掛かるを二人切り伏せ、其れより直に立ち退きける。此事大守の耳に達しければ、「國の爲めに拔羣忠功ありし者」と、知行は召し上げながら、小八郎に二十人扶持下され、「思召す仔細あり、母に養育致せ」の由仰せ下され、戸左衞門は子無きに由つて家絶えにけり。されば家家の世盛り限りありて、源五左衞門屋敷今は身體に持ちかね、御物上がりの岩井惣八に下され、小八郎は外なる郭に移り變る世や。此母も往時源五左衞門と忍び難きを忍び出で、當國には露のゆかりも無かりしが、今は頼み猶絶えて、此の八九年の間の憂き思ひ、後家の身ながら幼稚者を撫育て上げ、成人するに付けても、過ぎし人のおはさば如何程か悦び給はん。其れに引き代へ、まだ行末の覺束なく、何時か敵を討ち果せて、二度大壁の家の榮えを見まほしく、今は早や小八郎十五歳に成れば、或夜密かに始め終りの仔細を語り、殿様に御暇乞ひて、思ひ立つべき由含めけるに、大人しく頷きて、「我れ三歳の時なれば、今まで空しく日を送りたるを、世間にも後れたりと後指さされし事の口惜し。とても事に四五年前にも知らせ給はば、此の御恨みは有るまじ」と云ふにぞ、老母もいさぎよく思はれて、老中瀨良内藏之介まで申し上ぐれば、「何時にても討ち得たらん時には、本知相違無く下さるべき」由仰せ出だされ、「殊に本望達するまでは、路金入用次第に御用人の其役增見勘六方まで申し越すべき」との御事有り難く、首尾殘る所無く宿に歸り、二月十四日に首途祝ひ、母の心遣ひとして、先年源五左衞門討たれし時、供したる草履取、自然の時の目代に其儘抱へ置きて、くれぐれ頼みて、主從二人同じ十五日に立ち出づるを見送るまで涙を押へかねしが、「親他國者たるに由つて、當所に緣類兄弟とても助太刀後見する者一人も無く、定め無き旅路を幼稚き者の獨り行く、武士の道こそ覺束なけれ。めでたく討ち果せて母が心を慰めよ」とて、此の詞を暇乞にして立ち別れぬる哀れ、袖より外に問ふ者も無し。願ひは鶴が崎の八幡に祈り、思ひは鐘が淵に沉む心地して、憂きを戸渡る舟に漂ひ、陸に彳ずみ、山陽四國殘らず巡り、源五左衞門十三年忌を早美作誕生寺にて竊かに志を施し、其れより津の國難波の大湊を尋ね、五畿内を彼方此方に彷徨ひ、明くれば春日山霞立ち初むる今朝に成りぬ。遙かに故郷の空を眺め遣れば、山上に山あつて幾重重なる旅衣、歸るべき程も白雲の往く方のみ馴かしく、「世の哀れは我れ一人」と御社伏し拜みて、人泊むる宿に歸れば、門松の氣色に千代を歌ひ、「幾久しく」と屠蘇酌み交すに付けても、我身の上の春を思ひ、古郷の老母の事、如何におはしけんと、是れも氣に掛かり、彼れも胸に迫りながら、旅の假寢の初夢、現にもあらず、老母遙遙の國里尋ね來り給ひて、「此の年月の久しき事を指折れば、一年纔かに餘る、袖の涙は西の海、浪の立居にも其方の行末のみ胸に迫りて馴かしく、此の思ひならば、諸共に連れ立ちて本望を達せんものを、甲斐無く跡に殘りて今の憂さつらさ、草の露とも消ゆべき命なれど

も、せめて一度の音信を聞きたく、十三年の弔ひまでは待ちしが、其れにも便りの傳無く、淨雲寺の同じ苔の下にもとは思ひ極めながら、一日一日と暮して、告げわたる鳥と同じく鳴き明し、今は姿を變へて彼の人の後世いよいよ祈るばかりなり。唯だとにかく焦れ死なぬ中に、今一たび覺めての對面を願ふ心を力にする命も知れず、恨めしき浮世の中の習ひ」と、しをしをと枕に佇み給ふと思へば、曉の鐘に俤消えて寢覺悲しく、召し連れし小者を引き起して夢の物語、聞かぬ先より涙を流し、「私のまざまざと見しも是れに違ふ事無し。御袋樣の御歎き御尤もに存ずるに付けても、運の强き敵の行方」と互に男泣き、「如何程思へばとて、此のままにて國元へは歸り難し。是れより東海道に掛かるべし」と云へば、僕勸めて、「見掛けたる敵にはあらず、一先づ忍びて御歸り有り、御袋樣に御對面なされ、其上にて又何方へなりとも御出で然るべし」と云ふにぞ、一には孝の道筋、豐後まで行けば、「知邊の本賀猶右衞門方からなりとも云ひ遣はし、本望は遂げざれども、我我息災の樣子ばかりなりとも知らすべし」と、其れより引返して又西國に赴き、小倉より徒步行く道の傍らなる休茶屋に、老母疲れたる體にて腰掛に息らひ給ふに驚き、「是れは如何なる事」と、「先だつて敵の在所今に知れざれども、斯樣斯樣の夢見より、先づ御目に掛からんと存じ、僕の宅平に勸められ、甲斐無き歸國ながら」と云へば、老母も國元に中中有るにも有らずして、尋ね出でたる來し方の憂き思ひを語り、諸共に本意遂ぐべき願ひ。然らば又北陸道へ心ざし、主從三人に成りて行く程に、今は江州に立ちたる鏡山の里に著きぬ。「爰にて思ひ出だせば、親源五左衞門殿生國は此國打原とやら云ふ里より、幼稚くて城下に出で勤め給ひしに、十六歳にて爰をも立ち退き給ふと、長き夜徒然に語られしが、耳に留まりぬ。若し大壁のゆかり有らば訪ひて見まくほしき」と打越え、密かに聞けば、「澤山に輕き奉公人に大壁源五左衞門何十年以前當國去つての後、今までの首尾語らるれば、六平横手を打ちて、「其れは我が爲めに現在の兄なり。此上は敵の在所根を掘りて葉を斷つべし」と、是れも御暇申して打連れて行くに、美濃國關が原にて俄かに時雨して、晴間を待つ中に隙取り日を暮し、難儀なる所へ、追剝數十人むらがり來りて、四人を中に取り籠めて是非無く切り結びけるに、身は長旅に疲れたるに足場惡しく、されども小八郎が手に廻る程の者薙ぎ倒し追ひ散らし、立ち歸りて見て有れば、六平、宅平、老母、早や切り伏せられ給ひたると見えて、念佛幽かにして息絶えければ、「南無三寶」と空しき骸に取り付きて、呼べど歸らぬ玉の緒の、さても是非無き次第。「賴み切つたる者どもも、今は野末の葉より外に弔はず、思ひも寄らぬ事に獨り殘り給ひし母まで双に掛け、年來の敵は討たずして、いや增しに憂き目を重ぬる事、是れ程侍冥加にも盡きぬるものか。よしよし、是れまで」と、既に自害と見えしが、又心を取り直し、「兩親の中の敵、せめて一人を孝養にせざること腑甲斐無し」と、我れと宥めし心の中、生ける心は無しに、三人の亡き骸片里の庵に賴みて埋み、名をば埋まぬ武夫の甲斐甲斐しく、其の所を無念ながら立ち退き、同じ國の府に著きて、暫しは爰に留まり、世の有樣を窺はん爲め、さまざま手立を以て、其府の籏大將白峰村右衞門と云ふ男に半季定めの僕と成りて、或時村右衞門が若黨と共に長屋住居の木枕を

並べ、四方山の雑談の次いでに、「御手前の生國は何處」と尋ねける詞を聞けば、正し我國の者なり。何と返事すべしと工夫廻らし、若し又其の由縁も知らずと思ひ、わざと、「肥後の者」と答ふれば、此の男は戸左衞門國より召し連れたる一人の草履取上がりなれば、同國なる事を聞き咎め、「どなたの御屋敷に居られた」と云ひしに、「安森戸左衞門に奉公したり」と云ふを聞きて、彼の男、さては安堵したり。善い加減に謔つく者と思ひ濟まし、先づ敵の末にても無し、されども旦那の名を聞き覺えて、今は家の絶えたる事を知らず、謔つくが憎しと思ひ、「其れは其方の覺え違ひなるべし。其の戸左衞門殿は十四五年以前に肥後を立ち退かれ、跡は餘の侍衆の御座る筈なり。此方が善く覺えて居るに大きな謔つき」と冷笑ひけるに、是れは面白き事を云ふと覺えて、「何と人を僞り者とは迷惑致す。して其の戸左衞門殿實正國には御座らぬ證據ありや。其の證據無くては我れ僞り者に成りて一分立たず、堪忍ならず」と、寢て居たるを起き返り、脇差取り廻せば、此の男臆病者にて、「如何にも證據を出だすべし。然りながら誓文立て給はねば言はぬ事」と云ふに、「なる程立つべし」と云へば、「其の戸左衞門殿は即ち今の旦那なりしが、鄰の源五左衞門殿を討つて退かれし時、我獨り供して丁度今歳で十五年國へ戻らぬ、是れが證據ぢや。も堪忍し給へ」と云ふを聞きて、是れ天の與へ、優曇花の開くを待ち得たる心地して、今は騙け込みて討つべき、忍びてや討たんと、樣樣分別頻りなるを、色に包み、其夜の明くるを待ちかねて、朝日に我が古里の氏神を拜み奉り、「此度本望を遂げさせ給へ」と祈りける所に、村右衞門登城の支度して出づるを、「源五左衞門が一子小八郎」と名乘り掛けると、村右衞門受け止めけれども、念力に擊つ太刀、即座に討ちおほせ、「今は是れまで」と嬉し涙をこぼす處に、村右衞門若黨六七人拔き連れて、互に手を負ひながら戰ふ音に驚き、近所に大目附役の稱村與助騙け著けしに、早や最前村右衞門樣子を語りし者も切り伏せられ、過半疵を蒙り、立ちしろぐ所を、「是れは如何なる仔細」と問ふに、一樣に口を揃へ、「主を殺す惡人」と云ふに、小八郎は、「親の敵なり」と、詞戰ひにも鳴りは鎖まらざりけるを、與助、「暫し」と兩方へ引分けて樣子を聞けば、「敵に紛ひ無し」と段段話しければ、其頃の大守小久島民部殿に申し上げしに、「然らば彼の者の國へ使者を立つべし。其れより中は小八郎を與助に御預け」にて、谷森右衞門使者に仰せ付けられ、筑紫に下りぬ。知れぬは人間の命、源五左衞門に不便加へられし殿は、過ぎし九月十九日に日腫と云ふ病にて逝去なされ、未だ百ヶ日も立たぬ所へ、大壁小八郎事段段書付を以て奉行所まで申し來る由、家老瀬良内藏之介へ伺ふに及ばず、御代替りて大壁の家は今まで立つても潰すべき旨、内内若殿の御内意なれば、たとひ最屓に存ずる者ありても取り上げる者一人も無し。殊に源五左衞門出頭するに任せて、前後に眼見えず權威己がままに振舞ひしに付きて、意趣含むの族、使者に立ち向ひて、「當家の扶持人にあらず」と云ひて、大儀とも云ふ禮儀さへ云ふに及ばず歸しければ、使者美濃に立ち歸り、此段委細に申せば、敵と云ふ證據無きに由つて、主を殺す科に定まり、哀れや年來の憂き難儀、母までに後れながら、本望は遂げたれども、賤しき者の手に掛かりて果てしを語り傳へて哀れなり。

踊の中の似せ姿

松坂越えて伊勢國、日和打續き、隈無き月に、終夜の大踊餘念無く眺めし時、常は古文眞寶に構へし男も、釣髯に樣は變へながら其れと知られて可笑し。其處の御内儀も浮され、鄰の娌御に假衣裳、振袖に品附けて昔に返る化粧から、「娘は殊さら振好し、姿好し」と褒めらるるを嬉しがる心は淺間山、胸は煙の種、斯かりし程に東横町より無紋の提灯數見えて、眞先に金の烏帽子を被りたる男、唐團扇を荷擔げ、後は同じ紫の絹縮に紅裏、廣袖にして、筋天鵞絨の流行結び、鮫鞘の大小一樣に、六人深編笠の目に立ちて、外の扮裝は氣壓されぬ。彼の金の烏帽子殿、音頭取り始むるより、面白やと太神も御影向、末社の喧騷此處なりと、月の入る方も歎かしき時、此の踊俄かに崩れて以ての外の騷動、「是れは何事ぞと思ふ中に、早や北南の門を締めて、「此の町内へ入り給ふ人、仔細ありて腰の物を檢めまする」と、所の宿老たる者牀几に腰を掛け、各名を聞けば、「私は魚屋町の五郎右衞門世倅」、「私は柳町の誰れ彼れ」と、脇差差し出して一人一人通り、さて彼の六人組の風流男呼び出せども、出かねて編笠も脱がず、「樣子は知らねど怪しく咎めらるる者は彼等ならん」と沙汰して、無理に引き出だせば、男にはあらず、何れも色ある女の姿、「扮したり、作りたり」と騷騷しき中にも可笑しく、面はゆげなる艶なして、差し俯きて物云はず。「よしよし、女の爲す業にあらず、今は是れまでなり」と、若き男を呼び出だし、「是れ程に致しても何れを疑ふべき者

無し、先づは切られ損。されども自づと露はるる事も有るものなり。御本社の見通し、其時を待ち給へ」と、皆皆戻り足に見れば、西側の軒の下に斬り倒されし男、是れ故の穿鑿ならんと思ひ合はせける。此の討たれし男は當國夷町の邊に烏羽田勘助とて、隱れ無き銀貸しの浪人、弟助八と一所に來りて、少しの間の事なり。其後色色手立を以て此の敵を尋ぬるに知れざりけり。爰に勝浦孫之丞とて手跡の名高く、同所の町はづれに、鄰國の大名より小扶持を下し置かれしに、未だ定まる妻女無く、獨り寢覺の寂しきに、此夏より妾を尋ねけるに、二皮目なれば屑厚く、姿すらりとすれば鼻低きく、漸うと裏町に年頃まで思ふ儘なるが有りて、是れを寵愛して、吉野を目前に眺め、更科の月も日も明けず可愛がられけるに、其の明けの年の春より、行く先は知らねど毎夜宿には寢ずして、寂しき留守ばかり、女の身にして迷惑、恐ろしくて夢も結ばず。「さても人の心は是れ程にも變るものか。去年までは、一生もはや女房は持つまじ、城下へ出て知行にも成る時は、我れを本妻に直してと、嬉しき言葉の數數も徒に成り、增す花に思ひ替へられ、面白き事も無し」と、或時孫之丞に段段口說けば、氣色變り立腹して、散散に打擲し、「己れ思ふ仔細無くば打殺しても飽かず」と、無興しながら又立ち出でけるに、此の女心の淺く瞋恚に身を焦し、所詮此の意趣如何程云ひて我が力に及ばず、一大事を白狀して腹立ちを止めんと思ひ極め、孫之丞留守に密かに立ち出でて、勘助の弟勘八所に行きて、忍びて呼び出だし、「私は勝浦孫之丞と申す者に召し使はれの女にて、寵愛深く思はれしを、常常惡氣廻され、本町の小兵衞と云ふ小間物賣と密通したると燻べられしに、私何心も無く、

七月十六日より養父入に親里に歸りし時、近所の幼友達に催され、男裝束の物好きして、大橋町にて踊ると聞かれたる由にて、道無き事も有りやと、跡から付けて廻されし時、勘介樣の御妾、小兵衞が風俗に似たるを見損ひて、闇打にして足早に退かれし跡にて、穿鑿ありしかども、知れざるを幸ひに、忍ぶ體もせず暮さるる其上、私の主ながら非道數數ゆゑ、注進の爲め申し參りぬ。今晩御忍び有りて討ち給へ、寢間の樣子は斯樣斯樣」と委しく敎ふれば、勘八横手を拍つて、「さてさて、過分至極。先づ是れは」と金子拾兩取り出だし、「討ち果せての上はまた御禮申さん」と、喜びて歸し、其夜の夜半に忍び入れば、折節孫之丞留守にて、彼の女一人燈火微かに光りながら、寂しき餘りに夜著引被き、高鼾して前後知らず臥し居たるを、勘八、孫之丞と心得て、走り掛かつて胴切にして、今は本望遂げたりと首を見れば、「是れは仕損じたり」と驚く所に、孫之丞歸るを、敵は其れかと段段述ぶれば、今は免れぬ所と渡し合ひて、是れをも首尾よく討ち果せ、始め終り奉行所へ斷り申し上げければ、敵なれば勘八は別儀無し。彼の女は主の訴人の科人なれば、獄門に掛けて恥を晒されける。

武道傳來記　卷五

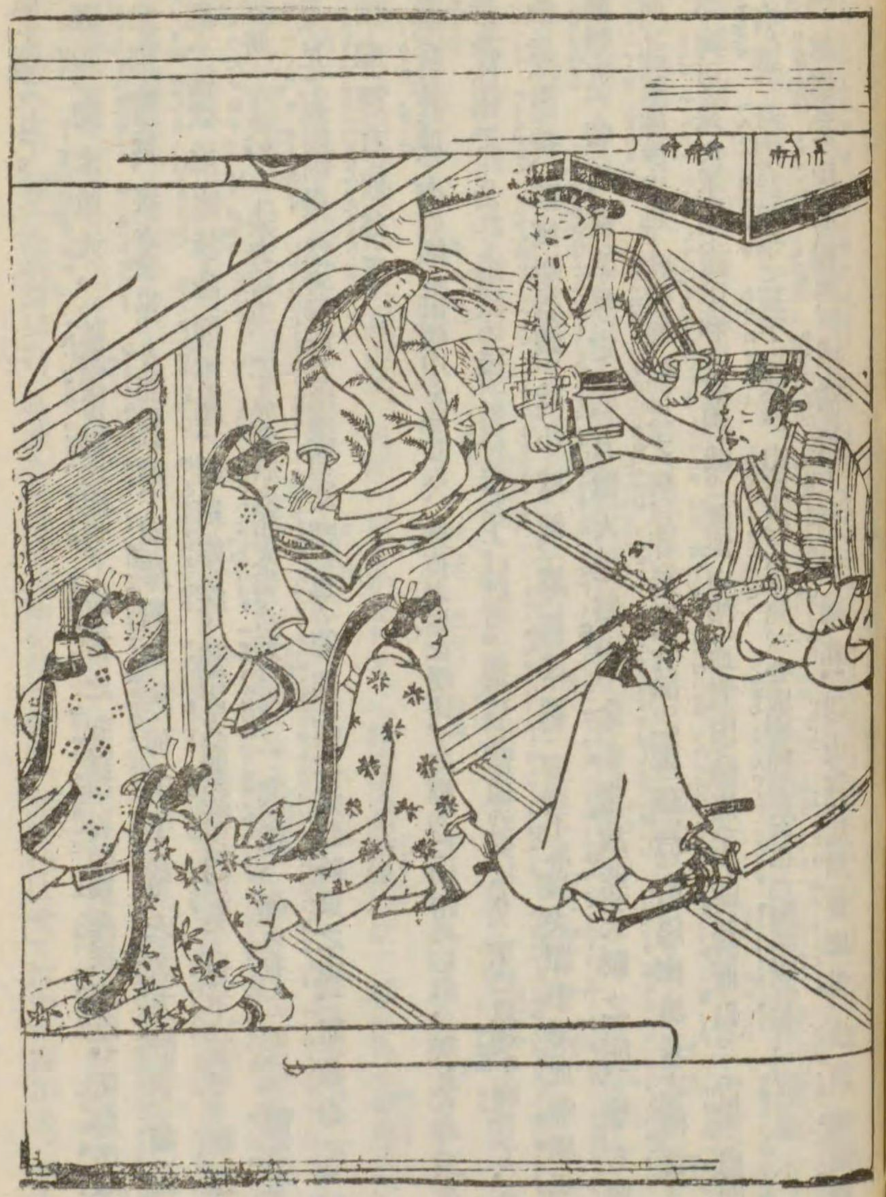
諸國敵討

目錄

第一　枕に殘る藥違ひ
　法師昔に歸る月代の事
第二　吟味は奥縞の袴
　意氣地を書置にする事
第三　不斷の心懸の早馬
　歎きの中に島臺出だす事
第四　火燵も歩りく四足
　鉢敲け我が國聲の事

第一　枕に残る藥違ひ

後柏原院大永の頃、大和の武家方より都の高家の御方へ御息女を送らせ給ひけるに、御年十五の春を過ぎて秋を重ね、月に明し花に暮し、其家の風なれば歌道一入に心を寄せ、琵琶、琴の翫び、酒婬の種と成りて、枕二つの俤次第に窶れさせ給ひ、久しく御冠も召し給はず、御髪自らに亂れて、殿振有りしに替り、色見る梢も落葉して、風は無常の早使、衰眼眠る山の土とは成らせられての歎き、各に勝りて此の姫君の御理せめて、永離の御愁歎、外より見る目も痛まし。世に有る例なれば是非無く歸らせ給ふに、故郷は錦の紅葉萎れて、龍田の山も雪に見ながら、白無垢の袖に袂に御目の時雨れ掛かる憂き身ぞと、御心も亂れて、黒髪の後れ先だち給ひし御人の爲めなれば、出家姿と成りて南都の法華寺に入つて、佛の道心ざし給ひし中に、何時の頃より心地惱ませ給ひ、美くしき御形の青覺めて胸痛ませ、口中荒けて夜を寢させ給はねば、日日に頼み少なく、是れを大殿樣御歎き深かりき。諸家中神を祈り、此度の助命を願ひ奉りぬ。御手前醫者、樣樣にし奉りし驗も無く、都の名醫の内談せし時、出頭家老坪岡藏人、町醫者原川玄芳を同道して罷り出で、遠慮無く御病室に入り、御脈を候はせて、其後廣間に坐して、「御姫樣御病體玄芳見立に至極の所あり。彼れに種方付致させ、何れも吟味の上御藥調合さすべし」と、日頃目掛振を爰に出だし、耆婆扁鵲が再來の如くもてはやしければ、時の權威に恐れ、皆皆御尤も良に詞を返す人も無かりし時、愚暗



の玄芳硯を鳴らして、

筆談云、脈來數大、此陰虛火動之症也。按古之聖賢指レ火而爲二諸疾之原一。所二以然者、火妄動則燎レ物、疾之象也。人能修レ道、而清順則病何由生哉。夫若二人鮮レ世、接レ物觸レ事之間、情欲之火無二時而不レ起。起則得レ疾。其指レ火而諸疾之爲レ原、豈不レ宜乎。經曰、一水不レ勝二二火一。一水者腎也、二火者君火相火也。五行各一二其性一、唯火有レ二而已。陽常有レ餘、陰常不足之理昭晰也。然者參芪甘溫藥所二深禁一也。速非二投於滋陰降火之劑一、難レ救命矣。如緩レ治、則噬臍有何益乎。

爰に國家老森尾兵庫、御姫樣の御病中を悲しみ、晝夜老足を運び、夫婦共に相詰めしが、京よりの浪人醫者横川周益を伴ひ出で、是れも御脈の後、書付差し上げける。是れぞ醫道の交はり、互に意魂を磨きて、時に、再談云、愚按、診脈無二定體一。或小或緩、或沉或數、變動不レ常。夫脈不常血氣虛也。譬二之虛僞人一。朝更夕改無二定體一。且數大之脈來、全不常故非二火動之症一。唯考脈症屬レ虛、而氣虛爲レ重也。此金極似レ火之病、非二參芪甘溫之輩一難レ治。曰陽生陰長之格言、今此時也、何可レ畏二於不偏不倚中和之君藥一哉。蓋痰中帶レ血者由二脾傷一不レ能レ裹レ血也。舌生二白胎一者、胃中有レ寒、丹田有レ熱也。夜不レ寐者、由二子盜二母一氣、心虛而神不安也。胸痛噯氣者、氣虛不レ能二健運一。故鬱二於中一而噯氣、或滯二於上一則爲二胸痛一。以上之諸症無レ疑虛也。故以補氣藥爲主。加二用安心滋補消食之劑一、則諸症自退矣。且不レ知二元則害承迺制之旨一、誤爲二陰虛火動而一、用二寒涼降火之藥一則聾啞、喉痛、上喘、下泄之變症增劇、扁術亦可レ難レ起乎。

玄芳、周益、兩人の配劑、御手前の醫者仲間にして詳かに吟味を遂ぐるに、周益種方付一一理に徹し、何れも是れに同心なれども、坪岡藏人身に替へて取り持ちぬれば、誰か詮議の爲手も無く、玄芳藥に極まり、二三日上げ奉りしに、是れより以ての外に御眼色變らせ給ひ、日毎に窶れさせられ、周益見立に一つも違はず、七日過ぎての曙に死去遊ばされ、上より末末の歎き止むこと無し。御死骸は御遺言に任せ、當麻寺に送りて松の煙と成して、年頃召し使はれ女郎中、御恩の程忘れず、十七人立ち並び下髮惜しからず切り捨て、皆墨染の袖に替り、飛鳥川の水を手向け、夏花に籠山の梢を求め、世に無き姫君の跡弔ひ參らせ、常念佛に暮しぬ。定め難きは人の身の上、世間の口やかましく、「此度玄芳藥違ひにて頼みある御命失ひける」と、誰れ云ふとも無く此の沙汰募りて、程無く御耳に立ち、原川玄芳所を拂ふべき由仰せられ、俄かに妻子召し連れ、河州國分の里に立ち退きける。藏人是れを腹立して、仕置者に差し向ひ、「此の所に醫師の住宅御法度ならば、横川周益も追ひ立て給へ」と、御意をも請けず、我が家來を遣はし、無體に家内を仕舞はせける。周益御無理とは存じながら、殿樣よりの仰せは背き難く、是れも同國三輪の里に立ち退き、不自由住ひの草葺に其身を隱しぬ。此事森尾兵庫聞き付け、其里に人を遣はし、周益を信貴に呼び歸し、急度吟味に掛かり給へば、藏人惡事露はれ、是非を構はず兵庫を待ち伏せ、面を合はせて打つて掛かる。老人なれ

ども烈しき左の肩に初太切請けながら、拔打に藏人切り伏せ、止め刺し掛かる所へ、弟坪岡虎七騙け付け、後ろより下人を拂ひ、管槍を差し延べ、脇腹を貫き、又突き掛かるを、兵庫潮頸より二尺ばかり切り落し、飛び掛かる心は有れども、深手に弱り、持ちたる刀を投げ付け給へば、虎七が肩を越えて若黨が太腹に立ちて卽座に命を果しぬ。是れを見て兵庫打笑ひ、脇差拔きて腹かき破りけるまで虎七怯れて、漸うに首打つて、此場より直ぐに立ち退き、豐藥寺の末寺榎葉井坊に忍びぬ。兵庫屋形には驚き、家久しき中野武太夫其の所に騙け行き、退き道を詮議すれども、奈良越の山道あまたなれば、先立ち歸りて思案を廻らしけるに、兵庫名跡を繼ぐ人は、十八の年世を恨み給ふ仔細ありて、森尾宮內と云へる姿を替へて、紫野大德寺にて清藏主と呼ばれ、禪學修行してまして、其の弟宮松とて、未だ七歲なれば、敵討〔に脫カ〕出づる暇下し給はず、武太夫無念ながら此子の生長を待ちける。此の樣子を清藏主傳へ聞き。信貴の古里に立ち歸り、老母に、「御勘當を御宥し」と願ひ、父の事ども申し出だして、互に涙の止むこと無く沉み入りしが、清藏主、母の御杯を戴く時、黑衣を脫ぎ捨て、乞ひ請けて慰斗肴を喰ひ初め、其儘心を還俗して、又名を改めて暫男と呼ばして、羽織に刀、脇差、頭巾、編笠に面を隱し、人知れず屋敷を出で、此の所毘沙門天に參詣し、當時は昔楠正成を申子の靈地、武士の尊む所なり。「我れ此度の大願は、敵を手の下に討たせ給へ」と、心中深く祈り、其れより大和順禮して虎七が在所を尋ねけるに、折節春の山、鶯の關を越え行くに、里人の尖り拐に鷄句好もしく、佛臭き買物、御花足、線香、氷蒟蒻、一つにからげたる干鮭をかしく、「腥き寺ぞ」と笑ひけるに、跡より色めきたる女の、此男に追つ付きて、「さりとは山道初めて難儀、且那に逢ふが嬉しければこそ、遙遙の所を行け」と、身は汗水に成りて脫ぎ掛けしたる面影、振袖の上に脇塞ぎの著物、如何樣僻者ぞかし。見る程里びたる風情無く、髮の結ひ振、信貴の城下に流行る縮付島田のふき鬢、不思議に思ひ寄り、猶心を留めけるに、荷物の中に弓の弦二掛見えしは、如何にしても合點行かず。彼の男を招き、「己れは正しく寺に召し使ひ者なるに、似合はざる女の道づれ、殊更佛具に武道具、是れ只事にあらず。某は斯樣の事を見出だして國の捉の役人なるぞ、有りの儘に申せ」と威しければ、此男差し當つて迷惑し、全く住持の大黑には非ず、信貴の御侍衆坪岡虎七殿の御妾なり。榎葉井坊の門前におはしけるが、御屋敷へ御狀遣はされ、竊かに連れまして參るなり。是れに少しも僞りあらば初瀨の觀音樣の罰あたらん」と、心のまま申して埒を明けける。暫男聞き澄まして、此者どもに先だつて豐藥寺に急ぎ、其里の屋に騙け入り、折から虎七運命盡きて、うたた寢の枕に立ち寄り、夢覺まさせて名乘り掛け、願ひの儘に切り伏せ、首級古里の母の御目に掛けて、「是れまで」と、又昔の衣を掛け、出家の身とぞ成りける。

第二　吟味は奧縞の袴

昔日誰が乘り初めて壹岐の島、夕波騷ぐ村千鳥に夢も結ばず、絲鹿梅之助とて、斯かる鄙にも又有るものか、俤の花、浦風の劇しきをも厭ひて、深く語らひける男は、村芝與十郎と云へる舟改め、身體は輕けれ

ども水主船頭に崇められながら餘情に生れ付き、「無念や其の昔は筑前にて五百石、筋目も人に劣らず」と、常に是れを悔みけるは、此の若衆の親父糸瓶内藏は國の奉行職なれば、なまなか戀の習ひとて兄分と云ふ恨めしく、世間の思はくも快からず。されども此道の隔て無く、忝きこと嬉しき事に一命を抛ちて年月を送りぬ。爰に國の守なる若殿、或時梅之助を唯だ一目御覽ありて、頻りに召し出ださるべき由仰せ下されたるを、内藏忝く御請け申し上げて歸り、「此段梅之助に心得べき」と云ふに、何の色無く返事して、其夜すがらも與十郎と語るにも此事を話さず、心に是れを思ひ煩ひしは、若し是非召し出だされ、御傍近く御用承る時には、與十郎手前の道を缺く事の恨めしく、分別し極めて、其の明の日より病氣と云ひ成して部屋より外に出でず。親父是れを氣の毒に樣樣と慰むるに驗無く、別して若殿の御前如何がと、御機嫌の次いでを以て、世倅病氣の由申し上ぐるに、「御氣色變りて座を立たせ給ひ、其後近習勤めし十倉新六に御雜談あり。「梅之助今に本復せずや」と問はれしに、新六内内梅之助に執心深く、文遣はしければ、其の返事に自身來りて、「念比分あり」との言ひわけなりしかども、「云ひ掛かりたる一言無下には」と申せし時、「其れ程の御心底忘れ置かず」と云ふに絆されぬ。其後勝島の入江に小舟泛べ、其友には村芝與十郎を伴はれて魚釣りし風情心得ず。又過ぎし月見る宵、浪都に三味線引かせ、與十郎と夜更くるまで私宅に語りながら、「浪都は返しぬる跡は心憎し」と語り、是れより氣を付くるに、いよいよ念比に隱れ無く、其れとは無しに遺恨に差し挾み、折を以て參るべしと思ふに、是れを幸ひにして段段申し上げ、「此度の病氣も虚病に疑ひ無し。とかく與十郎生きて罷り在る中は、大殿の御意にても御奉公致す心底にあらず」と、意趣ある下心より悉に言上すれば、「然らば方便を以て與十郎を成敗すべし。然りながら大殿の者なれば一旦貰ひての上」と、家老白濱刑部まで、村芝與十郎利口者たるに由り、若殿御召使ひなされたき由仰せ遣はさるるに、「是れ程の者御耳に達するまでも無し。如何樣とも御用承るべし」と、與十郎を呼び寄せ、仰せ渡しを申し付けたるに、有り難く直に若殿へ御目見え、即座に切米十石の御加增、殊に女中部屋の下横目役仰せ付けられ、首尾殘る處無く、外聞かたがた面目身に餘り宿に歸りぬ。其後鈴の間の番に上がるに、相役三人づつ詰めしは田上磯右衞門、柏義左衞門、村芝與十郎なりしが、何時も三人の内二人は臥して、一人づつは一時交代に寢ずの番、與十郎に當りて勤めしに、元より此の役目を仰せ付けられたるは、何ぞ無調法を爲出させ、其れを次いでに成敗すべしと巧みたれども、此男萬づ律義に勤め越度無く、古座の者にまさり奉公するに付けて、少しも見落されざるを、右の新六、若殿の御心底を察し、時の權を假つて、己が姨野澤女中頭を勤めしを幸ひに、「隨分與十郎越度に成るべき事を巧み給はるべし」と云ひしに、野澤心易く賴まれ、晝夜是れを心掛けたる時、夜半の頃與十郎袴を脱ぎて後架に行きけるを、窃かに是れを盜みて足早に奥に入り、妻戸堅く締めぬ。與十郎歸りて見るに袴無し。相番は前後知らず寐入りて音無く、不思議に思ひて通路の扉を見れども嚴しく鎖し、いよいよ工夫に落ちず、終夜是れを思案するに、行方合點ゆかず。然りとは奇妙千萬と思ひながら、相番の者に穿鑿しても、とても知るべき事にあらず、なまなか下拵なる事を尋ねて未審し

と、夜明けても是れを語らずして、番より下る時に磯右衞門此體を見て、「御手前の袴は」と云へば、「昨夜より見えざれども、事やかましく詮議するに及ばず。大儀なれども新しく拵へるばかり」と云へば、義左衞門聞きて、「其れは先づ勝手づくの事。此處は御城内の番所なるに、盗人來るべき道にあらず、また唯だ見えずと云うたばかりにして於いても濟まぬ事なり。磯右何と、なかなか合點が參らず」、とやかく沙汰する時、女中頭野澤奥より走り出で、「夜前當番の衆一人も歸らるる事無用。仔細は大目附津川重五左衞門殿御出でなされてからの穿鑿」と云ひ捨てて奥に入りぬ。「さてこそお見やれ、是れは紛ひ無き怪事なり」と、行方氣遣ひして居ると、早や櫻の間に呼び出だされ、野澤口書を以ての詮議、「夜前九つの時計過ぎて、南女中部屋の方に怪しき男の面影見えたる由、西の深〔寢カ〕殿なる方より告げ來り、一一是れを正すに別儀無きゆゑ、如何なる者か目に掛かりたると、其れなりけりに濟ます所に、今朝ほのぼのなる時梅の庭の忍びがへしに、奥島〔縞〕にかた色の裏付きたる袴打掛かりて有りしままに、今に是れ有り。全く外より來るべきにあらず。先づ當番の者を檢むべき由なり。何れも袴に別儀無きか」と云はれし時、磯右衞門まかり出で、「是れに相詰めし與十郎今朝白衣なるを改むる所に、夜中より見えざる由申したる」と云ふ時、與十郎這ひ出で、「正しく是れは狐狸の仕業と存ずるは、暫しの間の儀に、誰とも形の見え申さざれば力無き仕合。御料簡を以て御詮議頼み奉る。拙者若し不義の心あつて忍び入る程の事に、是れを落して來るべき物にあらず。私一分に致して露程も覺え無き御事」と、云ひも果てぬに、「然らば其の見えたる時急度穿鑿せずして、磯右衞門咎むるまでは隱したるや。此の云ひ分け如何にしても晴れず。但しやかましく煩しとて改めざるとは、公儀に向つては云はれざる私にして、自ら其方越度極まりぬ。其れ二人の者に預くる」と、座を立ちさまに、「此上は南部屋にも不義の相手あるべし。是れを糺明すべし」と云ひ捨てて、若殿へ申し上ぐるに、「かねての巧み」と悦び給ひ、二言と云はず縊首打たれて、定め無きかな、村芝與十郎葉末の露と消えぬ。「其のまま梅之助に只今登城すべし。暫しの内叶はざる御用あり。若し病中と云はば乘物にて迎へ來るべし」と、歩行六尺數十人、御手醫者坂川玄春、御使者には今の御物甲斐品之丞を遣はされけるに、内藏是れは冥加無き仕合と、早早梅之助を送り、さて御前にまかり出でたるに、今まで御前にまかり出でざる御不足數數ありて、「其れも樣子を聞けば憎からず。然るに由つて與十郎事不義の科に托言けて今朝成敗したれば、此上は最早障る事は有るまじ、身に奉公すべし」と仰せらるる半より、はつと思ひながら、色に出ださず、「是れは御意とも覺えず。與十郎と拙者儀さらさら左樣の事にあらず。斯樣なる儀は、御側に佞人ありて、跡形も無き讒言申し上げたるものにて御座あるべし」と、云ふ言葉の下より新六まかり出でて、「何と、御側の佞人とは誰を指すぞ。其上其方與十郎と念比の事は國中に隱れ無きに由つて某申し上げたり。生若輩なる口より云はれざる過言、一つには御前をも憚らぬ、其れを佞人と云ふ」と、色を變へて詞戰ひするを、若殿、兩人を御宥めあつて、「其れはともかくも、梅之助、身が近習へ詰むれば別儀無し。向後互に意趣を含むこと無かれ」と奥に入らせ給ひけるに、梅之助直ぐに宿に歸り、さても是非無き次第、是れ

新六が爲せる所、與十郎露も知らせ給はず、やみやみと成られたる事の悲しきに、涙に暮れながら文細細と書き置き、其の夕暮立ち出でて新六が歸るさを待ち掛けたるに、菱蔓の紋提灯、「是れ新六」と詞を掛け、拔き合はせて擊つ。一太刀に切り伏せ、若黨二人も遁さず切り倒し、槍持小者を追つ散らし、「今は是れまで」と、新六が死骸に腰を掛け、心靜かに切腹し、自ら首かき落して消えぬ。此の太刀音に近所に驚き驅け寄るに、早や兩方事切れて一通の書簡あり。披き見るに、「およそ此の一道に於いては高き賤しき隔て無く、たとへば一天の王子も草露の牧笛を鳴らし給ひて、御思ひを晴れさせ給ひき。況んや其の下つ方は申すも疎かなれども、戀慕に捨つる命は風塵より輕く、屍を霜刃に刻まるるとも、一たび交す侍の一言をや。爰に此の戀知らずありて、漫りに忠信の者を無實の科に詐りて殺害す。よしや存命して人皮畜の世界に遊んで契り絶え絶えならんより、邪魔の關を踏み破つて永き黄泉の旅枕、重ぬる衾は是れぞ鴛鴦の劔を以て、最愛しと思ふ兄分の敵を討つて、憂き世の夢を覺すものなり」と、見る者感涙の雨、盛りなる梅のあたら落花の名殘を惜まぬ人無く、今に語り傳へて聞くさへ哀れなり。

第三　不斷心懸の早馬

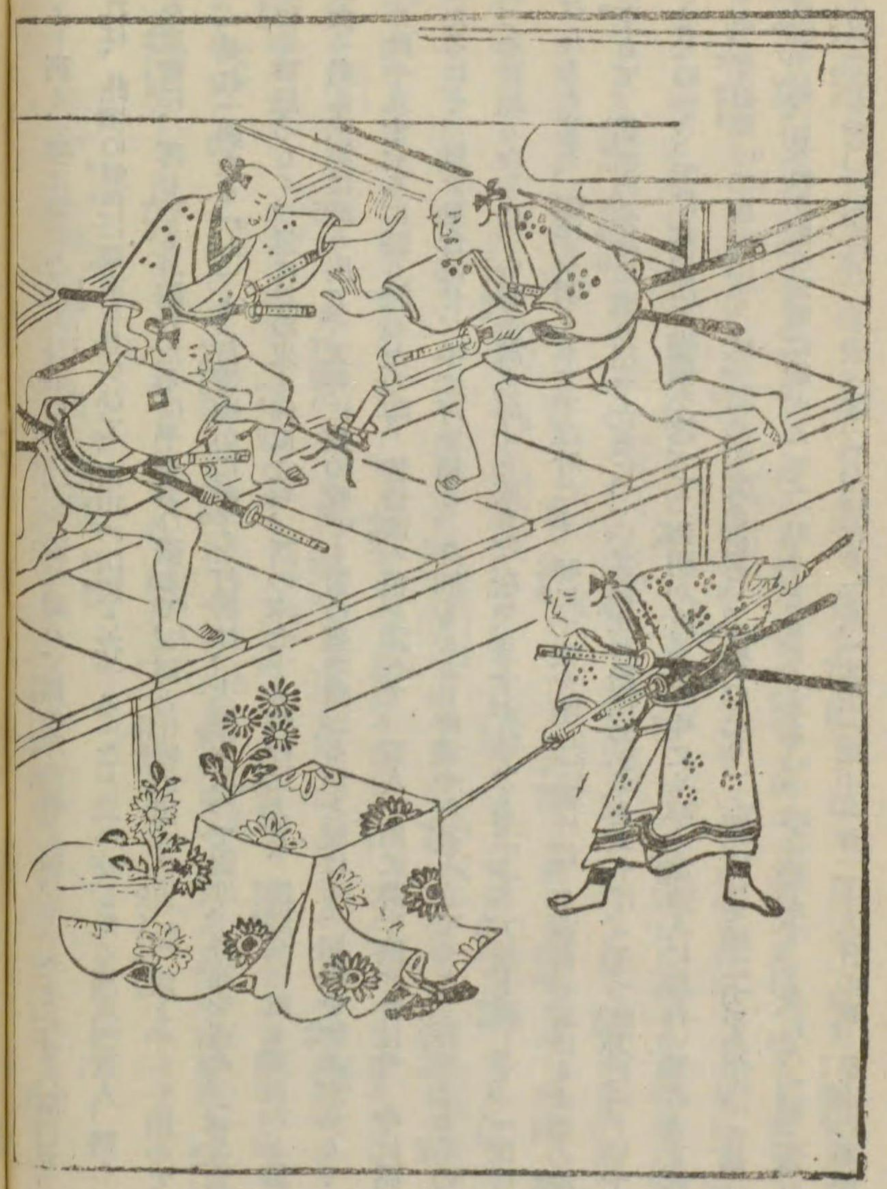
男は當流、諸禮は昔の物堅きこそ善けれ。和朝の風俗は島國の果てまでも萬事替らず。其の時津波靜かに、佐渡の國主に召し使はれし、大組頭に棒井民部、御用の事ありて召されしに、早馬に乘りて番町筋の四辻廻る時、綱島判右衞門と云ふ人に行き逢へば、民部詞を掛けて、「判右衞門殿御許されませい。鐙を外しました」と云ひ捨てて通りける。此の斷りを判右衞門聞き屆けぬこそ是非無けれ。屋敷に歸り、暫し思案して、兎角は堪忍成り難しと分別極め、一門中を呼び集めて次第を語りける。何れも内談して、さまざま申す中にも、老人役に久木勘右衞門申されしは、「民部程の侍が、よもや詞も掛けずに乘打すべき故無し。貴殿耳に入らざる事もあるべし。民部三千石、其方は三百石、祿の輕きを見下す心底にあらねば、ここは分別所」と申されき。判右衞門一通り委細に承り屆け、「尤も民部禮儀あつたにもせよ、此方の聞かぬからは是非も無き仕合なり。此上は堪忍ならぬ」に治定して、親類も同心の後、右の段段書中にしたため、民部方へ道はしける。民部其の使に返狀いさぎよく申し越しぬ。「鐙を外し謙退の辭を正しく掛け申しつれども、今更此の斷りは申さぬなり。明晩長林院の松原へ出合ひ、太刀先の御所存、其意を得候。明日酉の下刻に立ち向ひ、面談の時は移さじ」と書き送りける。此事自然と沙汰して、横目役津田求馬聞き屆け、御前へ申し上ぐれば、「兩方共に武士の義を立つる處至極なり。民部鐙外し禮儀を正しながら、此時に及び其の斷りを構はず、一命を捨つる志、是れ神妙の至りなり。また判右衞門心底、民部の詞を聞かぬにして、我れ一人の堪忍にて濟む所を、身を捨て申し入るる事、是れ又道理に歸したり。もと意趣無き儀なれば、自今以後兩人共に遺恨さしはさむこと無かれ」と、大殿扱はせ給へば、上意有り難く御請け申し、別條無く屋形に歸りて、民部妻子を召し連れ、其夜立ち退き、渡せる船を急ぎ、佐渡國を離れ、越後の寺泊と云ふ浦邊に著き

ぬ。斯かる折節、跡より福井丹後、安德寺勘太夫、伴平女、此の三人小早船浪を潛らせて程無く追つ付き、「御暇も乞ひ請けずして國遠致さるるの段、以ての外の御立腹。先づ先づ歸宅申され其上の願ひ」と申し渡しければ、民部少しも驚く氣色無く、剃髮したる首を見せ、「此の仕合なれば外に主取仕り勤むる望みに有らねば、如何な如何な上意にても此身後へは歸らじ。是れより武州淺草の邊に住宅仕る仔細あり」と申し離れて、此の一言に取り付く島も無く、船は佐渡に戻りて、御前宜しく申し上げ、先づ其分に濟みける。其れより民部は東武に行きて、淺草の寺町近くに借座敷して、門柱に榛井民部と筆太に張札して、菱垣の假なる風情、軒は雨洩りて月凄く、壁は蔦のみ、嵐の吹き込み、身を厭はず、世を構はず、心のままに一日を暮し、遊興有る程盡して、秋の夜の哀れ一しほ、菊も霜枯に近き頃、一人の息女十一にして、琴の曲優れて好き給へば、母は是れに和はせて時勢を歌ひて餘念無く見え給ひぬ。此歌面白き半に女の聲して、けはしく板戸敲き明け、抱きたる子を差し出し、「暫し是れを爰に頼み奉る。只今御門前にて親の敵討」と申して、肌刀拔きて驅け出づる。民部、「其れは」と續きて出で給ふを、内儀押し止め、「こなたの御命は義理の預り物にあらずや。助太刀ならば女に女好し」と、長刀の鞘外して門に出で給へば、長月二十四日の宵、出で初むる月に微明く其の面影も見えわたりし。相手たくましき男三人、此方は纖弱き男に角前髮の若衆。彼の女切り結び、成程靜かに受けつ流しつ、一命爰に極めたる有樣なり。民部内儀、女に立ち添ひ、「是れに身どもが後詰め、心覺えの長刀なり」と、脇を拂はせ給ふ働き、塵利支天も恐れ給ふべし。此の騒聲後ろに鐵山の便りと成り、彼の女が手に掛けて進みし男の脇腹切り付け、弱るを疊み掛け、終に討ち伏せ、止め刺す時、高股我れと過まり、身を惱むを、内儀肩に掛けて内に入り給ひぬ。民部は塀越に見物して、「角前髮、裾を拂へ、拂へ」と下知し給ふに力附き、踏み込みて切り付け、飛び掛かつて首を討つ。此の勢ひに怯れて一人遁げ行くを、今一人の男追つ付け打ち止め、二人ながら淺手負ひて、「嬉しや敵は殘らず討つたぞ」と聲を掛け合ふ時、民部廣庭に入れて氣を鎭めさせて後、樣子を尋ね給ふに、兩人禮儀を述べて、「此度の首尾偏に御蔭ゆゑなり。殊更御内方樣のお働きにて、願ひのままに此女本望を遂げ、此の嬉しさ、御恩報じ難し」と何れも涙をこぼし、「是なるは信州松本にて高倉庄左衞門と申す者の娘。私儀は大野笹右衞門と申して、同じ家中にまかり在りしが、此の五ヶ年以前に庄左衞門壻と成り、此の女と語らひ申し、未だ十日も立たざる中に、岩谷喜平次と申す者、庄左衞門と口論、座にて討ち捨て、國本を立ち退きける。舅の事なれば、外に見られず、御暇申し請け、三年餘り流浪を致し、やうやう此程付け出だし、今宵の首尾。本國へ歸宅の土產には喜平次が首なり」と、言葉に悦びを含み、段段心底を殘さず語り、「是れなる若年者は私弟笹之介と申すなり。是れを追つ付け御禮に差し越し申すべし」と、互に武士の詰め開き、聞くに頼もしき事ぞかし。各夜明方に立ち行くを、民部門送りして、「此上ながら猶仕合好く御歸國を願ふなり。さて此度某が女さへ力を添へしに、我ながら助太刀用捨する事、全く身を引くにはあらず。此段は後日に知るる事ぞ」と、是れを暇乞の納めにして別れぬ。さて又佐渡が島に在りし綱島判右衞門、國に堪忍なり難く御暇申し請

け、十三に成る一子判之丞、同じく妻を召し連れ、急ぎ江戸に立ち越し、民部方へ尋ね、互に涙に沉み、されば武士の義理程是非無きものは無し。兩人が最期は何の遺恨も無く、世間の思はくばかり恥ぢて、身命捨つる夢路の友、今日を限りなれば、浮世の名殘酒心よく酌み交し、二人が妻も打交り、古里にては相見ぬ良を、思ひも寄らぬ爰に近づき、昔を語り今の歎き、一人の男子、一人の娘、此の行末を想ひ遣られて、今相果て給ふ人人の身の上より猶悲しきは女心に道理なり、民部内方申し出だされて、判右衞門殿一子の判之丞に、民部殿娘のお松を妻はせたき願ひ、歎きの中に喜びの抔事、跡の事家來に申し付け、兩方の内儀一度に髪を切り捨てて、未だ御命の中に出家姿と成り給ひぬ。何か世上に殘らぬ爲方、哀れを含み殊勝さ限り無かりき。民部、判右衞門、今はと思ひ定め、袴肩衣を華やかに死出立を改め、是れぞ佛の淨土寺を頼み、法の庭なる草むらに疊六帖敷き並べ、兩人座を占め、臨終を觀念して、左の手に手を組み合ひ、「南無」と云ふ聲を合圖に切り付け、露も殘らぬ心の魂、其のまま同じ煙と成しける。末の世の例ぞかし。大野笹右衞門此事は知らず、遙遙の信濃より一禮に來り、大方ならず是れを歎き、其跡さまざま佛事を爲して、四人を伴ひ生國に歸り、二人の比丘尼には善光寺の片山に草庵を結び勞り、判之丞は手前に庇まへ、成人の後御奉公に出だし、浪人分にて八百石下し置かれ、棒井主水とぞ申しける。

第四　火燵も歩りく四足の庭

大雪軒より高く、國は隔てながら目前の白山、水邊は離れて櫓の浮舟潸ぎ通ひて、たまたまの御出で、「是れは、是れは、此頃の氣色に鄰家を見失ひて、市中の山居と存ずる」など云ひ交したる朋友四五人、語るには夜の長きを重寶に、落し咄も耳馴れたるは早や言ひ盡して、「何と化物の出づる百物語とやらを始めては」と云へば、「是れ一興たるべし」と、行燈幽かに帷子を打掛け、火燵も取つて退け、各座を占め、「昔空屋敷に」と云ふ程の事恐ろしく、目に見ぬ鬼も俤に立ち、話の六七十も濟む比より、隙間漏る風も其れかと驚き、片隅に居たる男も次第に躍り出で、天井に鼠の噪ぐも雷の落ち掛かるかと疑はる。屋根を物めが歩りくやうに聞え、もはや九十七八に語り詰めたる時、皆皆面の色を違へて、五人一所に鼻を突き合はせ、今は話一つに極まりたるにぞ、目を見合はせ、手に汗を握り、身柱もとより何者やら抓み立てると、縛縁より爪の長き物這ひ出づる音頻りなるに、心魂も消え消えと成りながら、さすが悚みも果てず、刀取り廻して、一度に聲を掛けて、はらりと立ち、障子を明くるまでは叶はず、唾にて穴を明けて覗けば、最前自ら置ける火燵の櫓、縁より下に下りて、霜枯の菊畠に走り出でたるに、「いざ爲止め給はぬか」と云へば、「先づ此方に」、「いや御時宜に及びませぬ」と、云はれぬ所で禮儀を述べて、埒明かざるを、中にも亭主武邊人に勝れ、其のまま廊下に走り行くと、手槍提げて驅け出で、ぽつ詰めて突き止め、「仕留めたり」と呼ばはる聲に力を得て、各驅け著け、「先づは御手柄、是れを殿の御耳に達せん」と、早やとりどりなるに、亭主噪がず、「是れ人の疑ふ事なれば、何れも證據狀を書いて給はれ」と云へば、「心得たり」と、「天正三年十一月二十八日の夜、畠山の末孫友枝爲



右衛門重之、化生の物を仕留むる所實正明白なり。其の爲如件。花崎波右衛門、笹井和平、常磐瀧右衛門、戸島與四左衛門」と連判を据ゑて、「いざ正體見せ給へ」と蒲團をまくれば、日頃手飼の犬なり。宵の暖かなるに塒とせしが、夜更け寒ずるを厭ひて驅け出でたるにぞ有りける。是れに興覺めて大笑ひして歸りぬ。其後此の沙汰一ばいに成りて、「さても今は御代靜謐に治まり、血臭き事無きに由つて、此頃然る方にて、諸歴歴衆犬を突き留めたりとて證據狀を取り、是れを云ひ立てに外に知行望む由、向後人の首取る刀を止めて、犬を切るにはなまくら物好し」と、名を指さぬばかりに評判しけるを、右同座の戸島與四左衛門傳へ聞いて、「何とやら謂はれぬ所に爲右衛門が武邊して、諸士の物笑ひに成り、我我まで面目を失ひ、此の云ひ分け立たず」と、波右衛門に語り悔む所へ、爲右衛門も當番にて來掛かり、是れを聞きて、「拙者一人の迷惑に極まる。其れは誰誰の批判にて聞かれし」と云ふ時、篠原三九郎と云へる男不圖來り、何心も無く、「何れもは此頃の沙汰を聞き給はずや」と云ひしに、「其れは何事ならん」と云ふに、「犬を突き留めたる感狀の事」と、競ひ掛かりて話すを、「是れは幸ひの所へ御出で。即ち其の臆病者は拙者なるが、此事に付きて御一分立たぬ樣も此座に在り。其の申し分けに、誰人にても仰せらるるを相手に致すべきと存ずる所へ、御自分御出で。定めて申し出だしたる者は有るべけれども、とても仰せられまじ。とかく御不祥ながら我ら相手に此方を致す」と云ひ掛けられて、三九郎も引かれぬ所、二言と遲遲せず、是非無く詞を番ひ、「爰は御城内、番下り次第」と約束を極め、其の明の夕暮、中橋にて出で合ひ、目釘竹の飛ぶ程戰ふ由、右の四人も免れぬ所と驅け著けたる

に、三九郎方にも助太刀ありて、兩方三十二人切り合ひ、討たるる者十五人、爲右衞門は三九郎、同林八郎を討ちながら、數多手を負ひ、與四左衞門、瀧右衞門は卽座に切られ、和平、波右衞門以上三人、草履取り壹人召し連れ、其場より直ぐに立ち退きけり。其後三九郎子林八郎、弟三八、十二に成りしが、喧嘩の時節十死一生に煩ひありて、此事今知らせければ、自ら御暇の事、御前へ申し籠めたるに、「いさぎよし」と、三九郎甥芝村湖助に後見仰せ付けられ、兩人其の明の春より立ち出で、北國海道殘らず尋ね上り、京三條通信濃屋に宿取りて、或時は淸水の羣集に立ち交り、覘ひ歩りくに、終に廻り逢はず、爰に三ヶ月足を留め、旅より旅の假寢、物憂き夜半毎に、空也上人の流れを汲む鉢敲きの物哀れなる聲して、「生死無常の理を聞けど驚く人も無し」と、口說くにも、先立ち給ふ父の事を思ひ出だし、夢も結ばず聞き居しに、此者どもは皆其筋ありて、山城國に限りたるに、今宵の二人づれは訛り聲なるは不思議なりと、湖助氣を著けて、施物遣る次いでに火影に貌を好く見れば、和平、波右衞門なり。先づ是れを捕へけるに、三八、「さては敵よ」と刀拔き掛かるを、湖助、「暫し」と留めて、「各位は正しき相手に有らざれば討つに及ばず。さて爲右衞門は何方に忍び居申すや。若し是れを知らせ給はらずは、御兩人共に遣さぬ」と云ふ勢ひに、此者怯んながら、「士は互なり、我我も彼の者ゆゑにこそ流浪致せ。何をか裏まん、爲右衞門は今は西の京大將軍に戸川友元と云ふ醫者の庵に、身を隱して用心深く致せども、夜は粮求めん爲め太平記を素讀して、今宵も出づべし」と云ふに任せて、堀川に上へ上がれば、一條戻橋にて、言葉を掛けて討ち果せ、兩人の者は助けて歸りぬ。

武道傳來記　卷六

諸國敵討

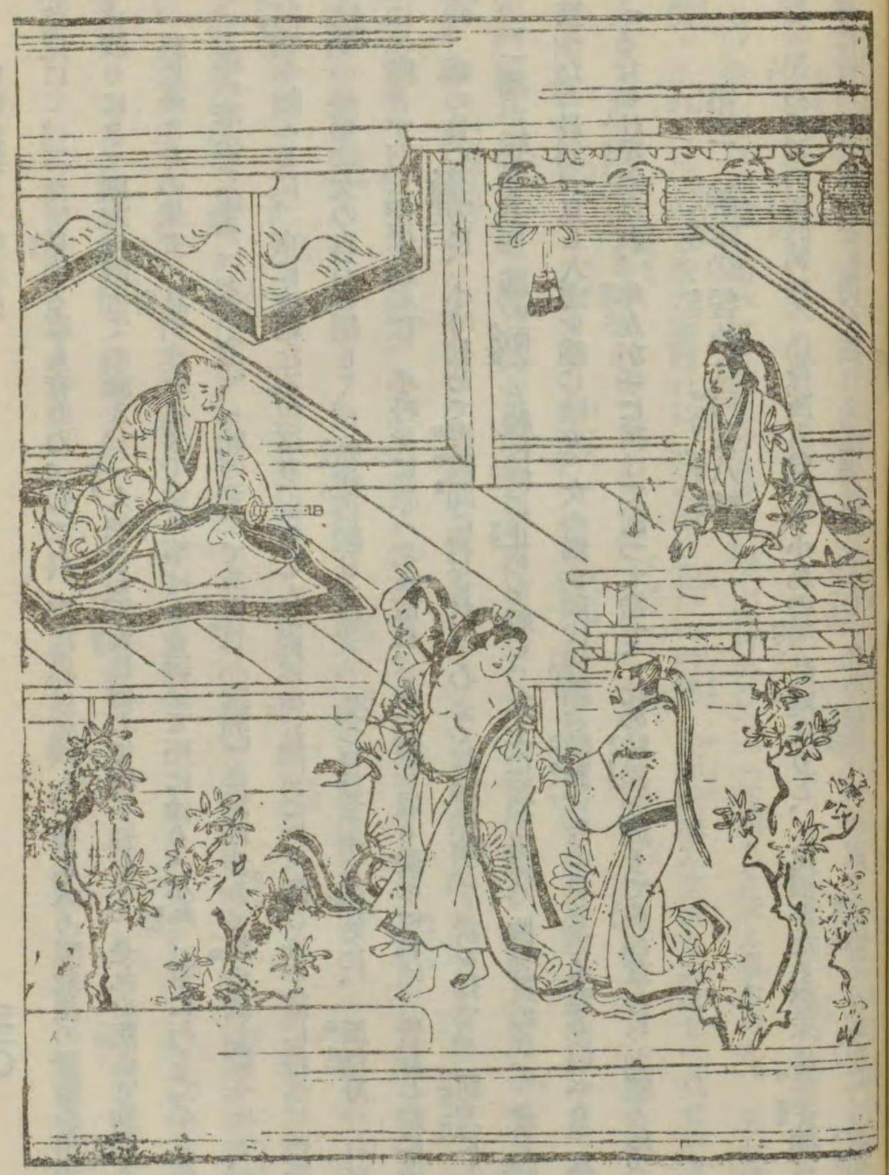
目錄

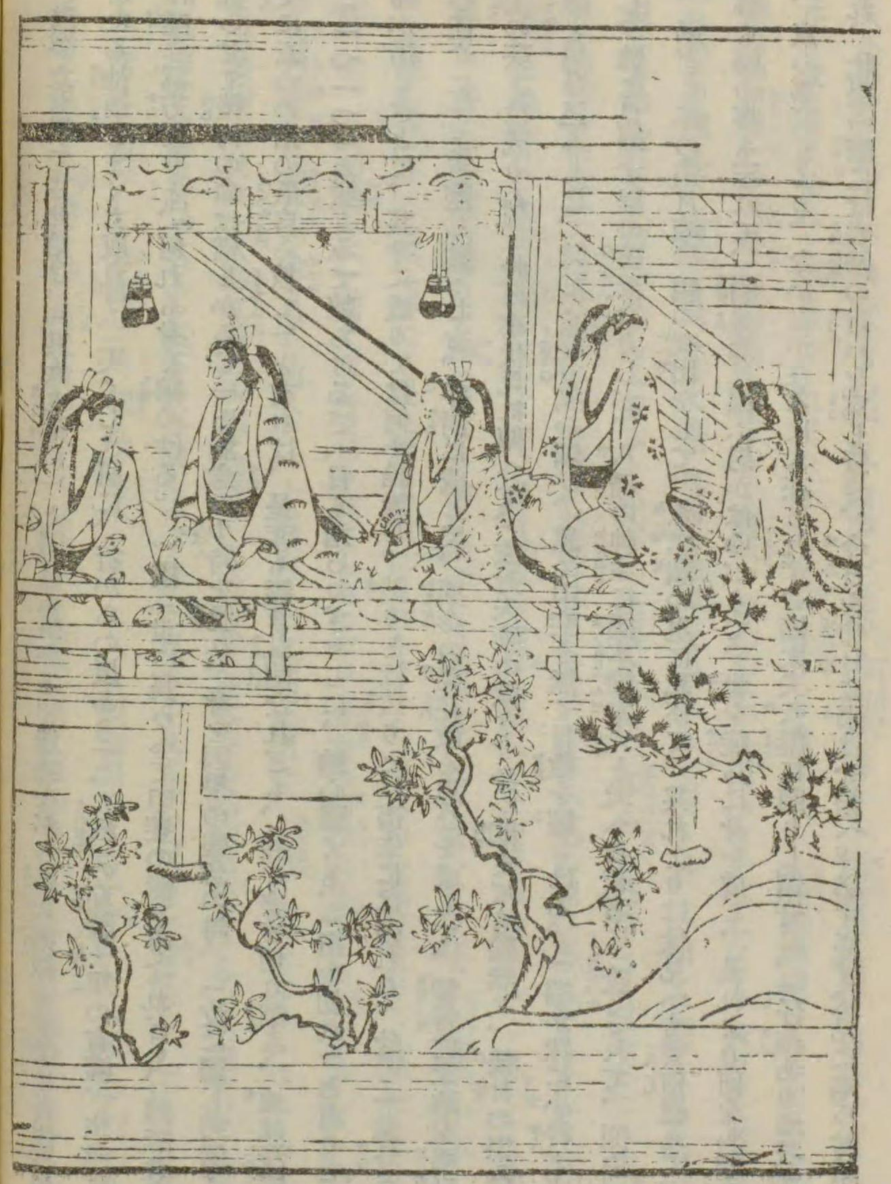
第一　女の作れる男文字
　姉より妹が奉公振の事
第二　神木の咎めは弓矢八幡
　同行三人若衆順禮の事
第三　毒酒を請太刀の身
　神鳴に月代差合の事
第四　碓引くべき埴生の琴
　鴛鴦の劔衾を通す事

第一　女の作れる男文字

咲くを嬉しからねば散るに歎き無し。東山の櫻は殘り、人は昔の春の事、都を見立て、岡崎の奥に樂隱居を構へ、泉川修理太夫吉連入道し給ひて隨夢と改め、弓馬の家久しき水越外記、德仙寺隼人、此の二人を兩の手の如く頼み、世間を是れに捌かせ、內證美を盡したる居間、廣間、華麗歡樂爰に極め、世の人の一年、一日に暮れて、銀燭の光る源氏の名を移し、須磨、宿り木、花散里、空蟬の夜の衣を飾らせ、あれにも是れにも手懸女は、いたづらの晝も蘭帳の中に房付枕ゆたかに、頭撫でさせ足摩らせ、夢見て覺めて、金杯甘露の醉ひの中に、世に有らざらん戯れのみ、華清宮も此んな事なるべし。其れは見ぬ唐の鳥の高う止りし梧の木も、玉琴と成りて連彈の爪音、御屋形の外に洩れて耳に響き渡れど、流石都人、稀にも是れに氣を移さず、松吹く風に聞き成し、斯かる殿作り、誰の屋敷と尋ぬる人も無かりき。此の隨夢の年の程七十古來稀なる御身にして、世を彌增しに恥ぢ給はず、由無き御無理を仰せられ、外記隼人が意見をも聞き入れさせ給はず、後には女藤の仲間にさへ疎み果てける。殊更此程頻りに御契りの深き方は一橋殿とて、此の親里は伏見の片蔭に佗住居して、佐脇玄丹と云へる目醫者の娘なりしが、艶女に生れ付き、見し人惱み深し。早や十七なれども緣付好まず、親の不自由を見かね、折節此の屋敷、美女尋ね給ひしを幸ひに、當分百兩請け取り、金子に身を捨て、御手懸者と云はれしも、父母の爲めなれば、是れ更に口惜しからず。唯だ御主の

お氣に入る事を忘れずして勤めける心から、隨夢又も無く御寵愛遊ばし、朝暮御寢間に召され、外の女中は徒なる花と成れども是れを嫉まず。如何にしてもお氣取苦しき旦那に、一橋御機嫌に入らせ給ふを悦び、各隙を浮世の思出に、百菊の長座敷に集まり、雙六、歌がるた、謎掛けてとけしなく、秋の夜の明方遲く晴れて殘れる月を恨み、薄雲と云へる女藺、旦那の御情の遠ざかるを悲しみ、一橋を見捨てさせ給へる「明治版ノ或本ニ給ふべきト訂正シタルハ原本ニ違ヘリ」難儀を巧み、女心の恐ろしく男文字にて、一橋に掛けしや思ひの深き所見えわたる折文を、此處に彼處に落し置きしに、初めの程は末の女も取り上げずして掃き捨て塵塚に埋みぬ。其後幾度か重なりて、或時隨夢の御目に掛かり、御詮議あるに、一橋方への通はせ文に紛れ無し。其の文章逢ひ馴れて後の思ひを書き續けし。隨夢殊の外に急かせられ、女藺頭の木幡に仰せ付けられ、一橋に尋ねけるに、「夢にも覺え無く、現にも知らず」と、曇らぬ心底を正しく、申し分けの段段木幡聞き屈けて、「人の嫉みにて斯く有るまじき事にもあらず。其方の御方より外への文ならば言ひ分けは成り難し。兎角美女は惡女の敵と申し傳へし」と大笑ひして御前に出で、一通り申し上げしに、なかなか存じの外なる御機嫌、「其女を八鹽紅葉の廣庭に廻せ」との仰せに任せ、女仲間の憂たてや、一橋を引き立て出づるより、如何なる憂き目やらんと色を失ひ涙ぐみ、人人の足もとも定めかね、身を慄はせけるに、一橋少しも騒ぎ無く、常より麗はしき容顏して、櫂れず裕かに坐して、旦那御出でを待つ中にも、「哀れ今年の憂き秋、色に染まれる紅葉も科無ければ枝は折られじ。其れにも心無き風には知らず」と、身に寄せて無常を觀する所へ、隨夢立ち出でさせ給ひ、「其女丸裸に」と御言葉掛かる。迷惑ながら金天鵝絨の後帶に各手を掛けて、色映えたる袖褄をまくり取れば、美くしき肌に、折からの嵐ありて、紅の恥隱一重の有樣、主命ながら然りとは酷き爲方なりと、何れも身を縮めける。一橋「世に長らへて甲斐の無き事なれども、罪無き身の程、人に知らせて後何の命は惜しからじ」と無念の少時を脫れ、身を因果の觀念の時、「汝に隱し男無くば、諸神誓文に五つの指の爪自ら放て」と有れば、是非も無き紀明なれども、其のまま切り刻み、血は深紅の絲を亂し、「一つ一つ」と數よみて放ちけるさへ目も遣られざりしに、猶心强くも、「指を切れ」と有りし時、「如何に命が惜しきとて、其身に成りては何か詮無し。然りとは然りとは畜生には劣れり。此の一念外へは行かじ。心任せに」と首差し延べしを、手討に成して、面影の美花散る思ひを成して、皆皆亡き跡を弔ひ、軀は鳥部山の灰とは成りぬ。此の事伏見に傳へて、玄丹夫妻の歎き、身を悶えても詮無く、後日の恨みを含み、娘の敵と思ひ込みしに、時節と筋骨痛む煩ひ、思ふ甲斐ぞ無く日數を經りける。一橋が妹に小吟とて十六に成りし。姉に見增す程の美形なりしが、八幡の神主に橋本權太夫と云へる若者に嫁されて、面白づくの緣の道、過ぎし年の霜月頃、親の家出をして、水無瀨の里に忍びて、其れよりは伏見へも音信絶えて、久しく親の事も姉の事も忘れて、明暮連れ添ふ男かはゆがりて、世を徒らに身を成し、是れより何をか樂みと思ふ折節、京の事聞くより、なかなか在るにも在られず、權太夫八幡に歸りし留守に、「仔細ありて我が事今生の別れ、此程の情には姿繪の自らを寫し置き、今日を命日に弔はせ給へ。必ず必ず伏見に知らせ給ふまじ。





自然の首尾にて、二たび見ゆる事も有りぬべし」と、筆に思ひを殘し、夜に入りて此里の屋敷を出でて、行方知らず成りにき。權太夫歸りての歎き、一人使ひし下女に尋ねて樣子知れず。是れを焦れて胸迫り、次第に衰へ、終に憂き身の果て、息引き取るまで女の事ばかり云ひて死にけり。小吟、京に行きて少しのゆかりを尋ね、「都の奉公を望み」と云へば、「此の姿にてあら世〔荒瀨〕に流れ歩りく銀に成し給へ」と、彼方此方の肝煎宿を頼みしに、京にも稀なる色盛り、見る人是れを焦れけるに、願ひある故に外へは行かず、やうやう隨夢の屋形に女の入るを嬉しく、給銀の願ひも無く、先づ目見え申しけるに、風情好ければ、其日より宿には歸さず召し使はれしに、小吟身に望みある故に、人の氣を取り勸めければ、皆好しなに申し成して、或時、雨の日の暮方に、小吟初めて御寢間に召され、心よく打解け給ひし折を得て、肌刀にして胸刺し通し、「一橋が妹なるぞ、姉の敵」と續け樣に止めを刺し、其上に腰を掛け、胸を貫ぬき、身を固め、嬉しげに笑みたる最期、見し人志を感じけり。女の働き前代例無き敵討、今の世までも語り傳へり。是れ皆薄雲と云へる女の仕業露はれ、隼人が手に掛けて討つて捨て、此の跡程と成りて蕁の草むらと變りぬ。

第二　神木の咎めは弓矢八幡

昔但馬なる出石の里の何時の春、山は茂り合ひ、小鳥の塒此處なりと、風溫かなる野末に茅花摘み捨て、差竿手毎に持たせ、友とせし男を語らふ。頃は同じ人心、此の森陰に行き返り逍遙あるが中に、葉田與七郎と云へる若侍、半弓の自慢して、目に掛かる程の翼あまた射落しけるを、同道の小伴新四郎是れを止めて、「是れは宮地なれば、神は木の葉さへ惜み給ふ。況んや殺生をや。是れより朝木山の麓にて思ふままに狩すべし。此の所は遠慮し給へ」と勸めければ、與七郎打笑ひて、「何祟りと云ふ事あらん。其れは近頃生溫き穿鑿。あれに見えたる松の葉隱れに、殘る雪に紛ひの白鷺、矢坪御望み次第に射落して見せ申さん」と、引きしぼりて放つ矢眞つ只中を射拔いて、「先づは手柄」と、讃めし詞の下に、餘り矢、向ひの尾に遊びし大石半九郎が右の肩骨より心もとまで篦深に、忽ち絕入して倒れ、所惡しければ早や事切れける。同道の久志小左衞門驚き、四邊見廻す時、與七郎は是れを夢にも知らず、新四郎に向ひ、「何と此の拳にて、自然の御馬前にての、星兜違ふべきものにあらず」と胸を叩いて、半弓小者に擔げさせて立ち出づるを、小左衞門、「さては此男、如何なる意趣か有りての事。爲方も有るべきものを」と、身繕ひして追つ驅けしが、若し又人違ひもやと聊爾に詞を掛けず。先づ僕が持てる弟矢と一手に紛れ無き證據に、立ち歸りて、立つたる矢を引き拔きて、是れに比べての上に、「是れ暫し、同道あるを御存知無きか」と云ふに驚き、後ろを見返りて、段段聞けば聞く程、「此方に少しも覺え無しとは云ひながら是非無き過ち。如何樣とも御料簡に隨ひ申さん」と云へば、小左衞門も、「承り屈けたり。尤も意趣ありての事にあらざれば、いよいよ是非に及ばぬ事ながら、半九郎死骸を闇闇と持ちて歸り、彼の者兄弟緣類に向ひ、何とも私の一分立ち難し。互に不祥の事ながら、討ち果さねばならぬ首尾」と云ふに、引かれぬ梓弓、忽ち神罰の顯はれ、最前諫言したる新

四郎も遁れぬ所と覺悟して、二人切り結ぶを側らに眺めて居る時、與七郎早や切り殺されし。「助太刀心得たり」と切り結び、終に小左衞門を討つて、直ぐに同國二見の浦より舟に乘り、丹後の成相の里に知るべありて、五日影を隱し、其れより大和國初瀨の里に由緣の者を賴みて、爰に居を晦めける。其時の首尾に小者二人は忽ちに相果て、誰れ知れる者無かりしに、小左衞門が草履取數多手は負ひながら、其里の者ども板に乘せて小左衞門屋敷に送り、樣子を問ふに深手なれば、返答も分明ならず、息の下より、「旦那を討ち給ひしは小伴新四郎殿にて有りし」とばかりを最期に果てければ、「さては敵は一人に極まりたり」と云ふ所へ、大石半九郎子息半三郎、樣子如何がと驅け付くる。與七郎は未だ妻無かりしが、弟分松淵時之助も來り、小左衞門一子澤之助と三人一所に寄り擧りて、「とかく我我敵は新四郎に紛ひ無し」と、御暇申し上げて立ち出でける。何れも同じ十六七、一樣に姿變へて西國順禮、五畿七道より順逆構はず打つ札の、「敵に逢はせ給へ」と誓願空しからじと、末を心に觀念して、四國、西國の津に至るまで、二年に餘る憂き旅路、夢も結ばず、今は河內國藤井寺に差し掛かりける。爰に新四郎が妻此事を思ひ焦れて、其の翌の年果てしに、猶また一人の娘の殘りて不便を留めたる由、傍輩の中、好み深かりし梅垣平藏方より、文細細と書き送りたるに、新四郎もつらき憂き住居に、歎きに哀れを重ね、せめては忘れ形見の娘をなりとも、行末知らぬ身の行方、今一度見まほしく、忍びやかに呼び越したき願ひの返り事するに、平藏も尤もの事に思ひて、竊かに乘物に乘せて遣はしける。此の三人の者、藤井寺より大和の壺坂を志して行くに、立田越に掛かる時、麓の茶屋に暫し休らふ處に、此の乘物も同じく立ち休みけるに、茶汲む女香煎を酌みて乘物の側に行けば、戶をば明けずして內より簾を少し卷き上げたる氣はひの物ゆかしく、此の三人の血氣盛りに心移りて差し覗けば、其のあでやかなる美形、此の年月國國に彷徨ひ、目に掛かる程の女色、是れに並ぶべき無し。哀れ如何なる御方の花の姿、吉野は風に見劣り、此嶺の紅葉も時雨れ、塵の芥とは成りぬ。日頃の一念つい打忘れて、「誰か先に見初めたる」と私語きての爭論、寔に猛き武夫も聖の御國を傷らるる、此の惑ひの道に踏み迷ふ習ひ、思ひ遣られて然も有るべし。斯かりし程に、飲みたうも無い白湯を飲み、俄かに足を痛ませ、「此の乘物何時までも此所を動かずも有れかし」と、とても叶はぬ戀に氣を惱まして時を移しけるに、不思議や乘物の中より利根なる狆驅け出でけるを見れば、澤之助早く言葉掛けて、「あの犬は敵新四郎が日頃祕藏せしに少しも違はず」と云ふより、今まで思ひ籠めし戀心忽ち翻り、誠に氣を付くれば其れに違ふ事無し。「何とも心得ねば、いざ跡を慕うて見屆くべし」と、五六里の間を跡に成り先に成り、終に初瀨の里に附け屆けて、奧深き編戶締めし藁屋に舁き入るると、內より新四郎轉び出でて、「さても遙遙の憂き旅路、よくこそ」と悅ぶ體を柴垣の隙より見屆け、「さてこそ新四郎なれ」と、我れ先に走り入るを、澤之助大人しく推し止め、「もはや敵は掌の中に在り、周章つる處にあらず。さて各一所の敵なれば一度にも討つべき事ながら、先太刀は拙者賜はるべし」と云へば、半三郎、「此方も親の敵」と詮議終らざる間に、時之助堪りかねて、「跡より續き給へ」と內に入れば、「後れたり」と、三人同音に名乘り掛け、拔き連れて掛かれば、新四郎騷がぬ

體にて、天卷して刀を提げて立ち出で、「暫く待ち給へ。此の仔細は段段の首尾あり、先づ聞き給ふべし」と、半九郎、與七郎に討たれし事を語る詞の下より、半三郎顏色變つて、今まで思ひしに違ひて、時之助も同じく見合はせて切り結ぶを、澤之助も肝潰れて眺め居し時、「其の助太刀の仔細、御自分と拙者斯樣なり」と云ふと、また拔き合はせて戰ふに、早や時之助と半三郎は互に深手負ひながら、兩方共に疲れ倒れて、寢ながら、「今は協はず」と刺し違へて果てける。澤之助も思ひ籠めたる一念の太刀に、新四郎が右の腕を切り落し、「南無三寶」と差添拔く間に、新四郎娘長刀を小脇に搔い込みて走り出で、澤之助を水車に切り臥せ、立ち歸りて見れば、新四郎も深手一つに有らず苦しみて、卽時に息絕えぬ。此の娘の歎き一方ならず、旅の疲れも憂き思ひ、二年の內の難儀語りも果てざるに、此の有樣目も當てられず。賴む木の下に雨も淚も堪らぬ所に、「逆緣ながら」と道明寺の側らに庵トめ、妙理比丘尼と名を改めて、此の七人の菩提を弔ひける。

第三　毒酒を請太刀の身

驛州に有りし事語り傳へて、其時の太守森脇主稅之助病死あつて、若殿市丸殿遺跡を繼ぎ給ひ、代代の家絕えず、國の成敗を執り行ひ給へり。或時家老祝山中務に仰せ出ださるるは、「御慰み旁、家中の若き者ども、其れ其れに武藝嗜める品、時ならず御覽あるべし。其中先づ人人勝れたる藝書附を上ぐべき」由、畏まつて相心得、何れも其の頭頭に觸れて差し上ぐるに、「何の某は疋田流の兵法、馬は大雀が印可、居合は片山伯耆流、弓は當流、鑓は大島流、誰れは鐵砲、彼れは何何」と、何れか一藝無きは無かりき。其日廣間の當番には、外山白右衞門、坂野用助、乙見龍之進、一所に並び居て、白右衞門云ひけるは、「何と今の書附の披露の中、能井五助が武藝の品品多きこそ合點ゆかず。其の仔細は、あの靑男常常の有樣から生溫く、殊更終に弓を手に取りたるを見たる者無し。鑓などは念も無い事及ぶまじきを、人竝に書附を差し上ぐる事、是れ程の謔は吐かれう物にあらず」と大笑ひしけるを、次の間に五助從弟白橋元左衞門是れを聞いて堪りかね、其の番より歸り樣に、五助が許に立ち寄り、「今日誰誰打寄りて此の沙汰ありし」と知らせければ、「よくぞ聞かせ給はれ。是れには分別する事あり」と、其の翌日家老中務まで申し込みけるは、此度書き上げたる武藝の品品、御前にて仕りたき願ひ、中務取次いで伺ひければ、幸ひ御機嫌宜しく、今日御覽あるべき由仰せ出だされ、五助忝しと支度して、櫻の庭の廣緣に立ち出づれば、殿にも御出座ありて皆皆相詰め、先づ弓を初めて三寸の的を掛けしに、三手の矢五本中り、殊更手前見事なるに列座驚き入る。次に竹刀、其の入身には小石與四郎とて、家中若手の中の達者なるが出でたるに、三本ながら突き止め、其次に兵法、笠田卜立が一の弟子數枝友平立合ひけるに、竹刀叩き落し、重ねての時には打ち合はせるまでも無く勝負を見せければ、「是れまでにて措くべし」と仰せ付けられ、若殿の御感甚だしく其外の諸役人に至るまで舌を卷いて、「人は侮られぬものかな」と、今まで可笑しがりし者どもも興を覺しけり。暫く有りて五助、御前に呼び出だされ、御褒美として加增百石下され、當座の面目、外聞かたがた有り難く退出すれば、家中に其の聞

え隠れ無く、其れより三日過ぎて、右の三人の方へ狀を付けけるは、「拙者事先日御評判の武藝の儀、今月二十五日櫻の庭に於いて、上覽に入れたる通り僞り無きは、定めて各も見物あるべし。然る上は御取沙汰一分堪忍ならず、伺候致すべきや、此方へ申し入るべきか」と、讀みも切らず驚きて、其のまま用介、瀧之進を呼び寄せ、「何と返事をせん」と云へば、兩人同じく色を違へ、「是れは先づ誰れが云ひ初めて、此のやうなる淒まじき事を爲出して、氣遣ひする事ぞ。總じて人の噂をせぬが善い。今からも有るべき事、何れもたしなむべし」と云へば、「今其れを云うて埒の明く事か。　とかく此の返事の爲やうは」と頭を割らして、用介、「やうやう分別出でたり」と云ふに、「何」と問へば、「先づ如何やうに思案しても死ぬる事は好かぬに由つて、爰は陳じて遣るには如かず。其の返事に、仰せ下さるるの取沙汰、此方三人の者は貴公樣の事微塵陰にても日向にても悪しく申したること無し。萬一脇に憎しむ者あつて、我我に迷惑させん爲めに申したるにぞ有るべし。それは御不祥ながら堪忍遊ばして給はれ」と、小野流の震ひ筆を留めて遣はせば、五助つくづく段段の斷りを見て、「此上に何とも云ひ遣るべきやう無し。先づ思案すべし」と、其日は暮れけり。瀧之進、用介は白右衞門方に取り籠り、「何と五助は堪忍してくれうか。　心もとなきは、あれ程の襲を隱して居る者ぢやに由つて、そこが濟まぬ事なり」と、一所に額を合はせ、手に汗を握り、噂「物申」あれば、「すはや其れか」と肝を冷し、又談合して、「昨日の御返事を遣はさるべしと、慇懃に云うて取りて參れ」と、家來を白眼み付けて又五助方に遣れば、五助分別して、沙汰せざる事に此方より狀を付くるは却つて無調法なり。されども云はぬと云ふを是非とも相手にすべしと云ふも、道理知らずに成るに似たり。但し元左衞門が聞き違へなるも覺束なし。若し實に云ひたるにしても、狀付けられての上に申さめと云ふ程の腰拔けなれば、相手にして面白からずと思ひ返して、「御斷りを承り屆くる上は、互に意趣含み申さず」との返事を見て、三人の者ども二三度押し戴き、「さても大事の命を拾ひたり」と祝ひ、酒など飲んで喜び、先づ其通りにて濟みけり。　其後途中にて逢ふ度毎に何とやら氣味悪ろく、其上、此事誰れ云ふとも無く、「果し狀付けられて詫言したり」との取沙汰隱れ無く、彼れ是れ心よからず、三人寄り合ふ毎に是れを苦にして、「此頃の取沙汰聞きて無益しき事」と云へば、「我我も左樣に思ふ。何とぞして五助を殺す分別は有るまじきか」と云へば、「あれ程の手者なれば、先づ太刀打はとても協はじ」、とやかく案じ入りて、白右衞門小聲に成つて云ひけるは、「先日の意趣互に少しも殘らぬ中直りに、無案の振舞に是非呼び請け、食類に交へて一服さすれば、骨折らずして、ころりと遣るが」と云へば、「是れに過ぎたる方便無し」と、日限を定め、御茶進じ度き由、五助方へ云ひ遣れば、さして進まざれども、行かねば先度の意趣殘るやうなりと心得、「忝し、參るべし」と返事するに、其日何れも相伴にて、馳走樣樣なる體にもてなし、後段濟むと心持例ならず、宿に歸ると、五體血筋引きて身を悶え、半時ばかり惱み、血を吐いて息絶えぬ。前廉より醫者も其れとは見ながら、大事の事なれば聊爾に云ひ出ださず、「不思議なる病」とばかり評判して、其れなりけりに野邊の送り、人は煙の種、一子五七郎幼少なれば、本知半分にて跡目立ちて濟みぬ。彼の者どもは爲濟ましたりと喜び、

此の内證は誰も知らず過ぎ行く春は夏に更り、此の三人の者は平生兄弟同然に語り、たとひ如何なる事ありても引くまじき語らひ成しぬ。其日は白右衞門方に集まりて雜談する次いでに、「明くれば端午の節句、月代を剃るべし。幸ひ其方家來關内、髮月代よく致す由、頼むべし」と云へば、云ひ付けて剃らせけるに、折節の夕立頻りに降りて、雷耳の邊りに轟きわたり、早や落ち掛かるかと覺えし時、龍之進日頃雷を怖がる事人に勝れたれば、此の響に動顛して、「關内先づ待ちてくれよ」と、半分頭剃り掛けしを、慌てて立ち騷ぎ、「天井の板の厚き所は無いか」と逃げ廻り、脱ぎ捨てし單羽織の有る程引き被り、「桑原、桑原」と身を縮め、片隅に倒れ伏したる可笑しさ、白右衞門、用助大笑ひして、「さても結構なる御侍。それそれ又光りたるわ」と威し掛けて興がりけるに、程無く空晴れて後、龍之進這ひ出でしを、「其の頭つきは何處の去荷物を持たれしぞ。さても臆病千萬なり」と謔けたるを、龍之進蟲に障り、「最前も笑ひ物にするのみならず、卑怯なる侍など云はれ、其れさへ心に掛かる。人には物の云ひやう有り。雷は武邊の外、好きと云ふ者無し。若し卑怯の穿鑿ならば、其方達こそ侍畜生とは何ぞ」と、皃色を變へて云へば、座興に思ひし兩人も此の一言に堪忍ならず、「侍畜生なり」と、刀を取り廻す時、「されば過ぎし年、熊井五助と太刀打は成らずとて、何ぞや女童の巧む毒藥を以て殺す。勿論我は同心に有らざれども、其れを改むれば傍輩の因みを空しくすると思ふばかりに默りぬ。何と其の爲方が侍の云ひ出す事か」と、同じく刀を取り廻すに、兩人目を見合はせ、「南無三寶、内輪破れして大事の事を人に洩らす惡人」と、二人して切り伏せ、先づ門を打たせ、心靜かに支度し、路金まで才覺し、直ぐに勢州長島に知れる者ありて立ち退きける。此事意趣は確かならずして國中に隱れ無し。爰に龍之進が一子角之丞御暇申し上げて敵覘ひに立ち出で、諸國尋ね廻り、此度は東海道に掛かり、其れとも知らず此の長島に入りて一日逗留するに、彼の二人の者は蘆屋町針立の賢意と云へる者を頼みて居しが、今は粮皆に成し、亭主は元より貧しければ、詮方無くて門謠、編笠深く被り、連節に小濱町を通るを、角之丞見付けて詞を掛け、敵二人を薄手をも負はず物の見事に討ち果せ、「此首國の土産に」と下人に持たせて、夜を日に繼いで屋敷に歸り、母に對面して斯樣斯樣と語る詞を押し止め、「其れは聞くまでも無し。先づ聲を高くするな。さても父龍之進を初め、白右衞門、用助、先年五助に遺恨ありて毒殺したる由露顯あり。子息五七郎親の敵は其方並びに白右衞門、用助と、一昨日討ちに出でたり。暫くも爰には溜られず。我も諸共に何處へも退くべし」と、其夜の九つ過ぎに又密かに家久しき下人一人召し連れ、親子伴ひて立ち出で、江州醒井の宿に知るべを頼みて、世の憂き住居を留めける。さて又五七郎は三人を覘ひて、國國殘らず姿をやつして廻り、今は勢州鳥羽に著きて旅籠する宿に一夜を明すに、障子のあなた、旅人の物語するを聞けば、さても先月十八日長島にて敵打の段段聞く程、角之丞が有樣なり。「此上は早や三人の敵二人は相果てたり。殘り多き事ながら力無き仕合。定めて角之丞は本國に歸るらん」と、其れより引返して又本國に急ぎ行けば、醒井の宿何心無く打過ぐるに、頃は極月十三日、家家煤拂とて、諸道具大道に積み重ねしを取り入るるに、古簾を吊れる貧家に似合はざる鐺、長刀、葛籠の上に提灯括

り付け、其袋の紋井筒の中に若松、是れは敵の乙見が定紋なると氣を付けて、其鄰なる家に立ち寄り、「粗忽ながら此の北鄰の御亭主は何人にて候」と云へば、「されば主は終に見たる事無し。伊勢の浪人衆とやら聞き及びたり」と云ふに、いよいよ覺束なく、其れより辻堂に行きて、小者に持たせし著籠取り出だし、身拵へする中に、小者に、「汝は旅人の體して見聞して參れ」と云ひ付けしに、走り行き、「鶏籠を借りたし」と云ふ調子にはひりて、樣體見屆けて歸り、「成程角之丞殿に紛ひ無し」と云ふに、踏み込んで名乘り掛けし時、角之丞は水風呂に入りながら此體を見て言葉を合はせ、母親に、「刀賜はれ」と云へるに、五七郎是れを見るより其の體をば討たず、「心靜かに支度致さるべし」と云ひ捨てて表へ出づれば、母親浴衣を打著せ、「潔くすべし」と勇めて、簾の内に見物して、互に汗水に成つて戰ふ中に、五七郎刀の目釘走りて落ちたるに、「弓矢八幡、運命盡きたり」と、差添拔かんとせし隙間を疊み掛けて討つを、母親是れを見て、「角之丞暫し」と止め、「其方は道を知らぬ男かな。最前此方湯上がりの支度を待ち給はずや。其の心底を顧みず心無き仕方」と恥かしめ、「隨分心靜かに目釘を留め給へ」と其間を待たせて、又打ち合ひけるが、角之丞深入して指三本落されて、攪む所に踏み込んで大袈裟に討ち止め、「あら嬉しや、年來の本望遂げたり」と息を次ぐ所へ、母親驅け出で、「さても遊ばしたり」と、角之丞が死骸をつくづく眺めながら涙をば流さず、「誠に我子ながらも心の剛なる事は御自分に劣る者にあらず。されども父瀧之進、武士の本意に背きたる冥理の程、弓矢神にも見放されし、天罰免れずして角之丞に報いて、只今御手に掛かりたり。討つも討たるも武士の習ひ、天晴神妙なる御働き、御父五助殿草葉の蔭にても嬉しと思召さん」爰にてほろりと涙ぐみ、「我身は賴み無き者なれば、思ふに任せぬ憂きに憂きを重ぬる事の行方こそ定め無けれ。角之丞が跡をば善きに弔ひて給はれ」と云ひ捨てて内に入り、黑羽二重の羽織を取り出だし、「是れは角之丞に著せんと思ひしばかりにて、未だ手を通さず。是れを道すがらの風厭ひに遊ばせ」と持ちて出でし。「此の御心底忝し」と暇乞して、本國に歸るを懇ろに見送り、其れより濃州關の藤川と云ふ里の側らに草の庵を結びて、行ひ澄ませし心の水の哀れを留めけり。

第四　碓引くべき埴生の琴

過ぎし頃、越の國の太守に增倉治部太夫と聞えし、同じく家老德澤刑部、或時大小姓役勤めし赤西專八、廣間に傍輩二三人相詰めて居しを呼び立て、「ちと申したき事あり」と、御居間の前栽の片蔭まで連れ行き、「別儀にあらず、只今殿の仰せ付けられしは、思召す仔細あるの條、出崎新五平を討つて來るべき器量選びて遣はすべしとの事なり。大切なる御意なるに、誰と指圖すべき者、御自分ならで外に是れ無し」と述べられけるに、專八承り屆けながら、「其れは如何やうなる越度あつての事にて、此の仰せ付けにて候」と云ふ時、刑部、「されば拙者も御心入れ量り難し」と云へば、專八、「尤も御自分の御詞を疑ひ申すにはあらざれども、とてもの事に直に御意を承りたし」と云ふに、「如何にも良き御念なり。さらば御前へ御出で有れ」と伴ひ。

此由申し上ぐれば、專八召し出だされ、「刑部申し付けたる一儀首尾致せ」との由、畏まり入りて私宅に歸り、「其の咎は知らねども、武士の習ひ程世に定め無き物無し。今までは互に傍輩の好み深かりし甲斐無く、我身に思はぬ御意を受けて討つこそ本意無けれ」と呟きながら、新五平所に入りて一つ二つ物語して、「御意なり」と云ふ詞の下に討ち濟まして出づるを、家來立ち騒ぐに、「是れは上意なり。全く當座の喧嘩にあらず」と云ひ聞かせ、直ぐに屋敷も取り上げられける。移り變る世の習ひとは云ひながら、知れぬは人の行末、哀れなるは此の内室、親里は鄰國の片陰に日陰の浪人の娘なりしが、新五平親と古傍輩の好みにて、其身死すべき前の秋より外聞宜しく取りはやして、婚禮の儀式して、世に頼む方無くおはしけるに、思ひ寄らぬ此の次第に驚きながら爲ん方無く、「此のまま同じ道にも果つべき」と思ひ詰めしに、其身尋常ならぬ忘れ形見のなかなかに、一たび是れを見えたく心引かれて、袖は涙の塞きかねしより、奈呉の海を跡に出でながら、誰を頼むとも無く、頃は卯花山を眺め過ぎ、里の垣根に色こぼす雪の高濱遙遙と見え渡り、越の船路も焦れ焦れし旅の空、定め無き短夜、有明の嶺の麓にやうやう由縁を尋ねけるに、其里の侘しき憂き住居譬へがたなく、今日と暮し、明日の命も頼み無き疎屋に心地例ならずして二日惱み、取揚婆と云ふ者も無くて、つい生れけるは、殊更男子にて、「猶果報拙き身の果て」と、恨みて甲斐無く月日を送りぬ。此の處には物縫ふ女も稀れなるに、雇はれて憂き世を暮す種として、此子成人して今は十四歳、育ち賤しげながら、生れ付きさすが其れと見えて、爪はづれの尋常、俤の艶しきに付けても、有りし世を思ひ比べて、母の歎き大方ならず。されども國を出でさまに、親より賜はりし新羅琴、跡付に長國、國宗の大小放さず、長き夜の折折の手ずさみに組の唱歌を歌ひて、諸共に慰めて、住まひせし哀れは限りも無かりしが、世は不定の習ひにて、赤西專八少しの過まりに御前を仕損じ、浪人と成りて四五年さまよひ、漸う此里近き城下に又身體濟みけれども、此の人人の事は夢にも知らざりける。或日傍輩鳥山九郎八にいざなはれ、野がけの慰みに出でて、此の山陰に百舌を落して歸る細道に、琴の音幽かに音づるるを、松吹く風と聞き捨てて行くに、猶爪音近く氣高くて、「數ならぬ思ひは無くて有れかし」と、聲の嵐につどひ來しに、「是れは合點の行かぬ。山里に斯かる音信のする事は」と、各立ち止まりて耳を傾け、其方を見れば、怪しの竹の編戸の内なり。「如何なる者ぞ」と覺束なく立ち寄りて覗けば、らうたげなる女も三十五年には麗はしき姿して、東の母屋に倚り掛かりたる有樣、世を恨み佗びたる顏容ながら、調べしは世の常ならず。側らに庄之介、母の手跡の假名文寫して、何と無き粧ひ。此の美形に惚れて、「是れは不思議なる者ども。とても事に尋ねて見るべし」と、「御免」と云ひて内に入りて、莫唐飲み散らして立ち出で、「世には樣樣の成れの果ても有るものかな」と、何心無く歸りて、專八、庄之介に深く泥み、誰れ知らず行き通ひ、何時と無く執心掛け、其後は念若の誓約堅く、庄之介を城下に伴ひ、母にも扶持を合力し、「行末は如何やうとも」申し上げて、庄之介をも身體有り付くべき心から、他事無く思ひ交して、一年餘りも過ぎて、母專八をつくづく眺めて、「あの男は確かに御意蒙りて、新五平殿を討ちたる男に紛ひ無し」と、餘所ながら先祖を問へば、何年の事ども語

るにいよいよ遁はず。或時庄之介を近づけ、「何時は語らんと思ひしが、其方が父新五平殿、尤も上意討とは云ひながら、専八手に掛けたれば、汝が親の敵に紛れ無し。潔く討つて孝養にすべし」と云ふに驚き、「さては其れとも知らず過ごしぬる事こそ無念なれ。併しながら自らの遺恨にあらず、主の仰せなれば専八も是非に及ばぬ所なり。若し敵討つべきならば、治部太夫殿にこそ候へ。殊に此の年月の厚恩、須臾よりも高し。彼れ是れ私の敵とて討つべき義理にあらず。爰は分別して御覽あれ」と云ひも果てぬに、母顔色變りて、「とても其方はえ討つまじ。前方より斯くと知らば、たとへば干死にするとても、彼れが合力受くべきにあらず。其方假りの兄弟の契約したればとて、誠の親に思ひ更ふる事が侍の道か。よしよし、我が夫の敵、其方が手には掛けまじ」と、守刀を懐に押し込み飄け出で給ふを縋り付き、「其れ程に思召すならば、私手に掛けて本望遂し申さん」と宥め置きて、其の支度するに付けても、假初の事ながら、此の二年の契り深く、交せし詞の松に誓ひしも皆偽りと成り、いとほしと思ふ兄分を手に掛くべきか、是れを裏みて討つべきにあらずと、何時に變りて専八を呼び請け、恨めしき顔容、専八見咎めて、「何とやら異な有様、心に掛かる事ありや」と問ふに、思ひの増さりて涙は袖に餘りたるに、猶心得ず、「如何なる思ひにか、語り給へ」と云へば、「さても是非無き次第。拙者は出崎新五平が倅、御自分に覺え有るべし。然れば勿論上意とは云ひながら、承るに勘忍ならず」と、其時は胎内に宿りゐし事段段語りて、「さて只今まで御懇意なかなか詞に盡されず」と、云ひ切りもやらず打萎れたるに、専八横手を打ちて、「さても人間の行方は知れざるもの。成程手に掛けし事紛ひ無し。いざ討ちて本望遂げ給へ」と、大小投げ出して首を差し延べたるにぞ、庄之介が思ひ一方ならざる至極の所、「其の有様を何しに討たるべき。御自分にも太刀取り上げて給はれ」と云ふに、哀れ深く見えし時、母次の間に佇み、此體を見て庄之介を呼び立て、「潔き心底殘る處無し。今宵限りの事なれば、今までの好しみに暇乞の杯したかるべし」と、母の計らひを語りて、土器を取り出だし、自ら持ち出でて、常の如く夜更くるまで語るに時移り、母も次の間に轉寐の夢見明して、朝の五つに成れども起きず。差覗きて見れば二人枕を交して臥したるを、「油斷者」と聲掛くれども音無く、不思議に思ひて立ち寄りても驚かぬに、夜著を取りて見れば、専八が心もとより我が脊中まで貫きて死したり。母二目とも見ず、同じ枕に是れも自害して果てしを、聞くさへ哀れは盡きず。

武道傳來記　卷七

諸國敵討

目錄

第一　我が命の早使
　灸居ゑても身の熱きを知らぬ事
第二　若衆盛りは宮城野の花
　義理に身捨つるは褒め草の事
第三　新田原藤太
　百足枕神に立つ事
第四　愁への中へ樽肴
　敵討たで横手を打つ事

第一　我が命の早使

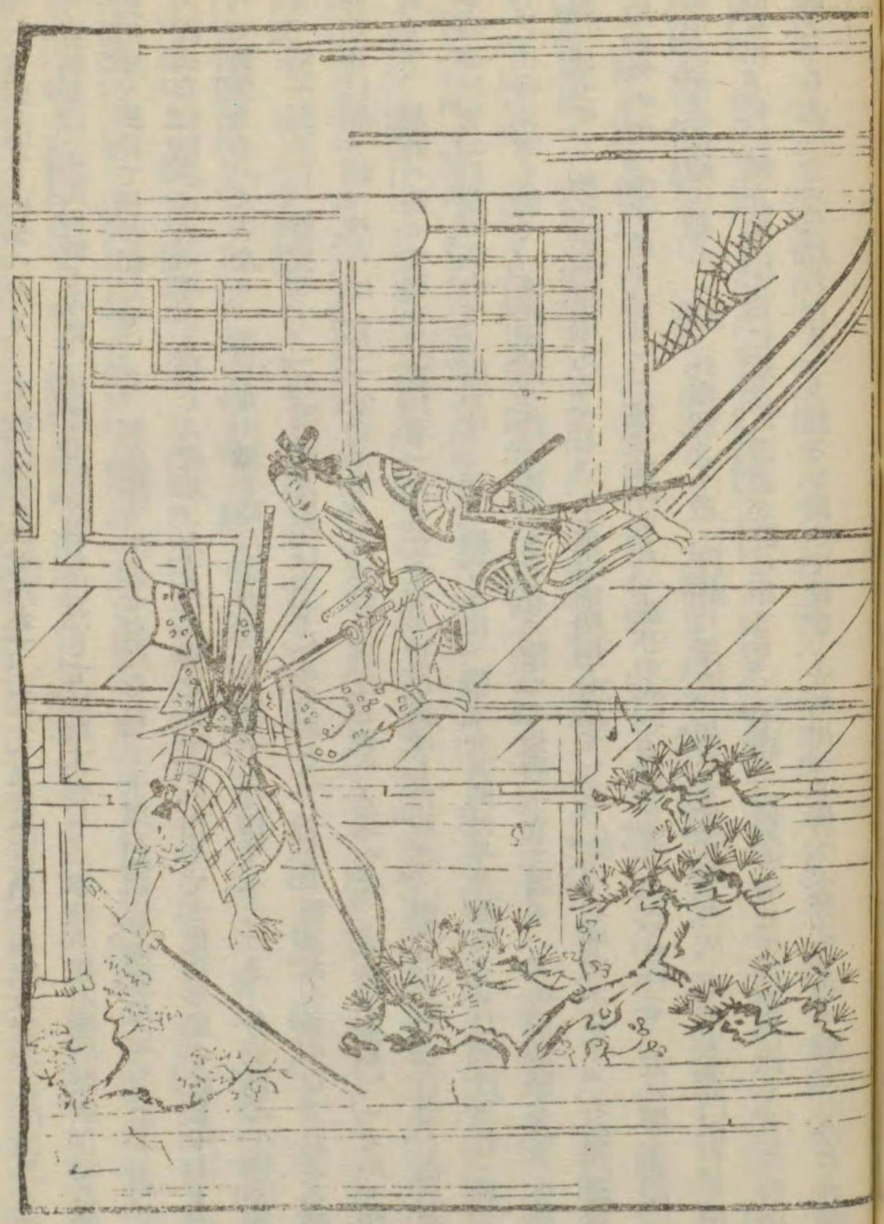
月は變らぬ昔の空、日に向ふ國の守に仕へし磯邊頼母とて、勇に色深く、春秋の花紅葉、紅閨長へに、未だ妻女は定めず、幾人か甄び、酒淫日日に長じて、勤めも自らに缺けぬ。或時己が家老塚林權之右衞門を呼びて、「公用の事に付いて急用有レ之レの間、伯父春川主計殿へ此の書簡早早持參致すべし」と、周章しく云ひ付けられ、問ひ返すに及ばず支度して、參州吉田に急ぎぬ。程無く著きて主計に對面し、「仔細は御書中に御座あるべし」と差し上げける。「何事やらん」と封切つて披見あり。文の半過ぎて驚ける氣色にて、其のまま懷に收め、權之右衞門が面を打眺め、「何と、國に變つた事は無きか」と云へば、畏まつて、「先づ殿樣には御機嫌好く御座なされまし、三俣修理助殿の跡目の儀、甥の內匠殿へ仰せ付けられて、先づ家中まで悅び、さては城下の町はづれに、童ども集まりて土遊び致しけるに、丈五寸ばかりの朽木を掘り出だし捨て置きたるを、極樂寺の長老是れを見付け給ひ、行基の御作の觀音にて、寺の傍らに假堂の奉加を進めてしつらひ、是れへの參詣、國中群集仕る事なかなか夥しく、此頃喧嘩是れ有りけれども、其れは鎭まり、又旅芝居二三間下り、水茶屋、八幡の前より立ち竝び、京大坂の如く御國の賑ひ申すばかり無し」と、何心無く語れば、主計、一圓合點の行かぬ貌して、「いや餘所の事は聞きたう無し。頼母が屋敷に變りたる事は無きか」と尋ねしに、「されば御當代に成りて諸國御簡略に付き、御自分樣七年以前に御越しの時あり

し泉水も、内證船遊山の聞え宜しからじと、其れをも潰し、跡には蘇鐵山を致し、其外の榮耀道具皆減少致し、只今は結句大檀那の時の借金まで相濟まし、世間、御勝手、共に善く罷り成り、拙者まで大慶に存ずる」と云へば、主計重ねて、「別儀にあらず。頼母若き者にて、さぞ其方が世話に成らん。京より美女呼び寄せし事、此頃江戸參觀の衆の物語にて聞きし。親は早く果て、誰あつて諫言すべき者其方より外に無し」と云ふ時、權之右衞門、「御意返し申せば慮外がましく存ずれども、尤も檀那、年若ながら勤めの缺けたる事無く、交はりも御家中に於ては何れに劣り給はん。されども御祝言未だ是れ無きに由つて、私計らひとして、此頃京より女呼び下し置きぬ。其上の御氣遣ひは私まかり在るから少しも遊ばされまじ」と、何心無く語りし時、主計氣色變り、膝立て直し、「其方は近頃利口に物云ふ大膽者、是れ是れ此狀を見よ」と、拋げ出だしけるを取り上げて見れば、「何何、此者重罪ありと云へども、當地にて手打致せば世間事やかましく罷りなるに付き、其元へ遣はす事。早早御成敗遊ばし給はれ」の由、はつと驚きたるを、主計、「何と其れは屋敷に別儀無き體か、其の段段委細に白狀すべし」と、刀に手を掛けて白眼み付けし時、權之右衞門少しも騷がず、「御紙面の通り眺め奉り、覺悟仕る上は、如何樣とも御計らひに任すべし。殊更御手討に預らば本望の至り、別に仔細申し上ぐる事曾て是れ無し」と、差し俯きて居るを、主計重ねて、「樣子無きを討てとは申し越すまじ。必定其方に越度あるに紛ひ無し。仔細を云はずば只今討つが」と云へば、「成程御討ち遊ばせ。元より一命を差し上げての勤めなれば、何しに前後を顧みるべし」と、潔き氣色、主計暫し分別して、「よしよし、右より誠に討つべきと思へば、此狀見するまでも無し。其方年來の奮功、何の過りか有るべし」と云へるに、權之右衞門涙を流し、「誠に磯部の御家久しく打續き、私不肖なれども、代代執權役相勤めしに、もはや此度御家の滅亡なり。此の御心入れと存じたらば、御手討に逢ふまでも無く鎖めやう有りしものを、口惜しや」と男泣き。主計見て、「然ぞ有らん。最前より思ひしに違はず。四邊に人も無し、仔細語るべし」と御尋ね、「なかなか申し上ぐるも御恥かしく、憚り多く存ずれども、私女房友澤七郎平娘、去年御存知の通り祝言致す處に、當八月の中旬より頻りに暇を乞ひし謂れを、たつて承るに、勿體なくも檀那、此女に御心を移され、『貞女の道を守らんとすれば主命に背く此の辛さ』と、さめざめと申せしを、『何んぞ主命を夫に換ふべしや。如何やうとも御意に從ふべし』と、一先づ宥め置きぬ。必定是れを思召し詰められて、私を無實の科に落し給はんとの御謀り事。此上は人非畜生を主とも存ぜず、猶又二君に仕ふべき心底にもあらず。早く首打つて給はれ」と、前後思ひ比べし心の中、主計も横手を打ち、やうやうに宥めて、長屋の一間なるに勞り入れて置きぬ。其の明の日呼び出だされしに、權之右衞門、大小羽織のみ殘して、何處へか行方知らず成りける由申し上げければ、主計呆れて、尤も不便千萬なる事に思はれ、「頼母が心底、憎き爲方、此上は己がままにさせて思ひ知らすべし」と、權之右衞門が大小並びに羽織を持たせて使者を遣はし、「申し越さるる通り成敗したる證なり」とて贈りければ、頼母悦ぶこと限り無く、されども屋敷中には是れを隱し置き、其の夕權之右衞門が妻に、灸なされたき由にて、度度の使來れども、再三に及

び辭退するに協はず、奥深く召され、口說き掛かり給ふに、「右より合點せざれば、幾度仰せられても此段は御免なさるべし。殊に權之右衞門が留守の内、暫くも人の思はくあり」と、立ち歸る所を引き留め、「さては權之右衞門に貞女の道を缺くまじきばかりならば、祕むに餘る思ひより、伯父主計方にて早く成敗して、其の證は是れ見よ」と、大小羽織を取り散らしければ、此女、氣も魂も消え消えと、繋がぬ玉の涙は塞きかねながら、此の心を祕みて、「さては心に掛かる雲も無し。如何やうとも御意には洩れず。然らば私御心に協ふ上は、向後御本妻を祝き給ふ事は、御止まり遊ばすか」と云へば、「其れは、其れは、世上の思はく顧みるやうな淺き事にあらず。其方さへ變らずば」と、打寛ぐ所を、賴母に飛び掛かり、「夫の敵免すべきや」と、脇差拔く所を、取つて伏せても、男のきたなさは、「今の一言に似合はぬ爲方、只今刺し殺すが承引せまじきや」と、入らざる所に念を入れて問ひ返すに、女房しらしらと打笑ひ、「やれ侍畜生め、たとひ身はづたづたに成るとても、其方に身を任すべきや。口惜しくも、やみやみと御手前が手に掛かりて、夫婦共に殺さるる事の無念や」と、聲を立てて泣くこそ道理なれ。賴母猶猶立腹して、「此のまま殺すも有興しからず」と、庭前の櫻に縛り付け、手槍引つ提げて弄り殺し、目も當てられぬ有樣なるを、未だ息の通ふ中に、内庭の片隅に掘り埋められし。姿の花は根に返り、あたら朽木と成りぬ。隱すより顯はるるは無く、此事親里友澤七郎平も傳へ聞きしかど、其頃不慮の越度ありて、改易に逢ひて、備前國に立退きけれども、其の妹娘を修理殿の中小姓增井兵藏に妻せ置きしが、此事を聞いて、頻りにまた兵藏に暇を乞ひし謂はれ、如何なると咎められて、此の段段語りて、女ながら姉の敵を討たん願ひ、兵藏聞くよりも賴もしく、「少しも氣遣ひするな。其方に代つて討つべし」と、俄かに御暇を貰ひ、浪人して折を窺ひて覘ひ寄る。其日は賴母當番にて歸るは夜の四つ半、外堀に夫婦待ち掛けて、先に持たせし提灯切り落せば、文目も知らぬ五月闇、此の太刀風に周章てて若黨三人總堀へ轉び落ちけるに、賴母驚き、「是れは何者ぞ」と聲掛けし時、「汝が手に掛けし女の敵を知らぬか」と云ふに、「物物しや、槍おこせ」と取り延べるを、踏み込んで二尺餘り切り落され、刀に手を掛くるを、馬より引きずり下ろし、胴骨を蹈み付け、「やれ女ども來つて敵を討て」と、手を持ち添へて首打つて、「さあ本望は遂げたり」と云ふ所へ、最前堀に落下りし若黨這ひ上がり、「逃さじ」と一つに固まり、兩人を中に取り籠めて戰ふに、兵藏は早や數多手負ひ、疲れて立ちかぬるを、駒寄せに取り附かせて、「女なりとも己れら」と、男二人に立ち向ひて切り合ふ時、兵藏聲として、「南無阿彌陀佛」と打倒れたるを聞いて、今は是れまでと思ひ定め切死にして、兩人共に爰にて果てぬる心の中こそは哀れなれ。さて權之右衞門が行方は見えざりつるが、一たび故郷を顧みず、今は小田原の片山陰に發心して行ひ澄ましし、たまたま城下に出でて托鉢せし時、此の沙汰傳へ聞きて墨の袖を絞り、いよいよ三人の菩提を弔らひける。世の道理切めて悲しき物語にこそ。

第二　若衆盛りは宮城野の萩

古歌に聞えし、御侍宮城野の萩山勝五右衛門と云へる男、久しく浪人にて此里に塒の鳥の尾羽打枯らし、此身の果ての成れる二人の中に勝之介とて、流石は我子程ありけるよと、姿の花を思出に眺め暮しつ。殊更諸禮の家として指南に遑あらず。同じ世を侘びし浪人田越辨左衛門と懇ろに昔の全盛を語り合ひしに、勝五右衛門衰老して自ら弱り、はかなくも臨終の折から、勝之介を辨左衛門にくれぐれ頼み置ける一言忘れず、幸ひ千海右衛門殿家老屋島十郎右衛門に日頃出入りければ、勝之介器量勝れたるを言ひ立て、檀那へ、「御草履取なりとも」と願ひしに、右衛門本より小姓御好きなれば、好き次いでを以て其の筋目正しき美形なる由申し上ぐるに、早速召し出だされ、御寵愛限り無く、晝夜御側を離れず勤めしに、傍輩葉田川九郎治、勝之介目見えの初めより戀ひ惱み、度度文通にかき口説きぬれど、勝之介御目鏡を守り、「御心底は忝し」と、さまざま云ひ宥め遣はしけるを肯かず、「太刀先にて本望遂せん」と云ひ越したる明の日、御膳上がりて勝之介雉の間を通る襖の陰より、九郎治立ち出で、「仔細は覺え有るべし」と切り付けしを、抜き合はせ、二打三打受け流して、九郎治を水も溜らず泡と成しぬ。手ばしかく仕舞ひ、直ぐに辨左衛門宿に歸り、斯樣斯樣と段段語りければ、「我が息の通ふ中は少しも氣遣ひなる事無し」と、先づ奥の一間に影を黑めし所へ、十郎右衛門早や驅け著け、「勝之介は是れへ參りたるが、定めて仔細は聞き給ふべし。元我が恥次の者なれば、隨分贔屓致す心底なれども、他所へ退くべきにあらずと穿鑿極まりて我れ來れり。いよいよ勝之介は行方知れざる分に申し置かん。云ふに及ばざれども、御勞り頼み申す」と云ひ捨てて歸り、辨左



衞門へも歸らざる由云へども、右衞門殿合點せられず、「尤も九郎治兄弟すら無き者なれば誰ありて敵討つべき者無し。主從の好しみに、天地の間を尋ね出だして成敗すべし。幸ひ十郎右衞門取次ぎたる者なり、急度追手を掛けて搦め出だせ」と、氣色變りて仰せ付けられ、十郎右衞門分別爰に定めかねしが、「旦那此の內證御存知無きゆゑに斯かる憎しみ深し。なまなか勝之介を伴ひ出でて九郎治不義の體を申し上げなば、却つて褒美あるべき者なり。若し承引無き時は是非無し、諸共に切腹すべし」と、分別極めて辨左衞門方に行き、樣子云ふに、合點せず、「勿論御心底疑ひ申すにあらねど、若し旦那其れを承引なされざる時は、勝之介が命は無き物、然らば私一分立たず。爰は御分別なされ」と云へば、十郎右衞門、「とかく此分にては濟まず、屋敷へ歸りて何を以て拙者一分も立たず。貴ひ掛けしは我れ、賜はらぬは御自分、討ち果さねば濟まぬ事」と云ひ掛けられて、退かず、切り結びしに、勝之介其時は早や緣ある寺に預けられ、誰ありて助太刀に出合ふ者も無く、老體力無き辨左衞門を心易く擊つて屋敷へ立ち歸り、其の段段語るに、今は勝之介事脇に成りて、「辨左衞門兄弟あるべし。十郎右衞門用心致せ」と、家中心地安からず。右衞門殿重ねて、「領地の外の濱へ急ぎ退くべし」と仰せ付けられ、忍びやかに有樣を寶し送られける。爰に辨左衞門弟辨藏、同家中三形式部殿に勤めしが、此事聞きも敢へず宿に歸り、覘ひ支度する處に、十郎右衞門が召し使ひの下女暇を出され、辨左衞門が宿に近き人置婆が許に集まり、下臈の筋無き者にて內證沙汰し、「外の濱の其處其處とやらんへ立ち忍ばれたる」と語るを聞きて悅び、立ち出づる所へ、勝之介傳へ聞き、今は身顯はれて走り來り、「固より我身免れず、御供申さん」と云ふ所へ、又辨藏日頃目掛けし浪人宇野彥之丞、正木宅平、篠井門藏、林折右衞門、三栖江右衞門各驅け付け、「此度の御事」と支度して十三人、外の濱に急ぎ、聞きし所に著きて樣體見るに、嚴しく要害して、大藪なる總堀の內に門門固めて、番の者數十人、內より假初に出入りする者も撿め、そこそこに氣を付けたる有樣、容易く討たるべきとは見えず。先づ側らの家を借り、皆皆身拵へ、長旅の疲勞暫し骨を休め、「今宵の四時半時、南の門より取り掛くべし」と相談を極め、心を一つにして、空行く月に古里を眺め遣り、「哀れや知らぬ命」など口ずさみて竝み居たる時、庭の枯垣の下に人の呻く聲頻りなるに驚き、「何事」と立ち出でて見れば、勝之介自ら草葉を朱の血潮に成して伏しぬ。「是れは如何に」と見るに一通を殘し置きぬ。「始め辨左衞門殿の御恩滄海より深く、十郎右衞門殿の一言高山より高し。然れば何れに向つて弓を引かん。されども深き方に恩を謝せん心ざしにて、此れまでは御供致し、憤りを表はすのみなり。各首尾好く本望を遂げ給へ。心底紙上に盡し難し」と、書き留めし心の內皆皆感涙流して、あたら姿の花を土に返しぬ。「早時分好し」と云ふ程こそ有れ、手毎に松明を振り立て、門前により擧つて聲掛けしに、今は脫れぬ所と尋常に門を開かせけるに、早や軒端に提灯數を並べ、其身は著籠に天卷し、牀几に腰打掛け、長刀を右手に衝き、家の子それぞれの覺悟姿、兩方に取り廻し、木陰木陰に篝火を焚き立て、恰も白晝の如し。辨藏も今は十二人心靜かに門に入り、雙方互に立ち別れ、門を締めさせ、神妙に名乘り合ひて切り結ぶと、土煙を立てて、以上四十五人相鬪ふ太刀音、近所の者ども驚き

出で、鄰郷の者は此の鑄火雲に映ろひ火事と心得、驅け付けける程に、百姓數百人此堀を十重百の重に取り卷き、其れには有らめ見物と立ち重なりて、膽を冷して目を駭かす。既に擊たるる者二十七人、其外も半死半生に血迷ひける所に、辨藏小高き所に上がり、「早や敵は討ち果せたり」と云ふ時、「門を開きて鎖めよ」と、大勢登り梯を持つて分けける。未聞の敵討なりと語り傳へて夥し。

第三　新田原藤太

昔日薩摩國鹿兒島にて、諸役人宿番を勤められし御茶屋の、藤書院と云ふ所を四人して御番せられしに、浮橋太左衞門、卷田新九郎、此の兩人は宵から夜半まで休みて、其れより明くるまで勤むる番繰なり。沖浪大助、中辻久四郎、此の二人は行燈の光を受けて獨辨を開き、小者に煎茶など運ばせて、寂しきを紛らかし、夜半の時計待ちかね、殊更春の習ひの長雨、止めげ間も無く降り出だし、蛙の諸聲耳に響きて目覺しの友と成りぬ。折節天井板に音ありて黑き物落ち掛かる處を、大助脇指を拔打に、何かは知らず少し手應へせしに、燈火寄せて見れば、其の長一尺四五寸ばかりの百足を二つに切り放ち、未だ動くを取り集めて塵塚に捨てさせける。久四郎横手を打ちて、「さても早業、古の田原藤太が勢田の橋は磯なり。沖浪殿の今宵の御手柄眼前に、是れは、是れは」と譽めければ、大助も興に乘じ、「天晴此の男古今居合の名人なり。早い所を御目に掛けた」と、さつと笑うて濟ましける。其後大助内用ありて町筋に出でしに、南江主膳と云ふ

出來出頭に出合ひけるに、大助を見掛け、「是れ藤太殿、何方への御越しなるぞ」と申されし。「某は大助と申すなり。藤太と官位は致さめ」と申す。主膳重ねて、「此程の百足の首尾、家中に隱れも無き是沙汰、田原藤太殿」と云ひ捨てて通られける。大助宿に歸り、覺悟して、相番の中辻久四郎方へ行きて、「前夜の儀は當座の一興にして、武士の高名に成るべき事にはあらず。其の通りの儀を方方取沙汰せらるる段、日頃別して語りたる甲斐無し。今日途中にて主膳、藤太と申されし事心外なり。是れ皆貴殿の披露なるべ。此の儀堪忍ならず」と、果し眼にて腹立、久四郎少しも駭く氣色無く、「拙者の申し分一通り聞き給ひて後、成程御相手に命は惜まじ。申し掛けらるるからは覺悟なり。併し此儀に於いて日本の神ぞ他言は申さず。外にも兩人同番あり。此の樣中、寢間にて樣子を聞きて、自然沙汰せられし事存ぜず。此の久四郎は申さぬなれども、其夜一所に在りしが不祥なり。いざ心底に任せ給へ」と、身拵へして立ちけるを、大助引き止め、「只今の理至極仕る。此段は免し給へ」と、其れより直ちに主膳屋形に仕掛け案内申せば、奥座敷にて鼓の音、山姥の曲舞半なれば、暫し返事は無かりき。大助、玄關前に立ちながら其の謠に連れて諷ひしまひぬれば、主膳立ち出で、「御見舞珍らし。さあさあ座敷へ御通り」と申さる。大助走り掛かり、「藤太が太刀先覺えたか」と、一文字に切り付くれば、「白鷺是れは」と拔き合せ戰ふ所に、主膳弟善八槍の鞘を外して掛かるを、引つ外して蹈ん込み切り折れば、脇差拔かんとする隙を飛び掛かりて擊てば、主膳後ろより疊み掛けて擊つを、其の槍を取り直して突き倒し、兄弟ながら止めまで刺しける時、家來四五人拔き連れて打つて掛

かるを、二人突き伏せ、一人大袈裟に成るを見て、此の勢ひに皆皆逃げ去り、太刀押し拭ひ、心靜かに立ち退きける。此の事大守聞召され、「如何なる意趣」と穿鑿半なる處へ、久四郎登城して、此度主膳事、段段斯樣斯樣の次第と、初めの通り申し上げ、「其れに付き拙者快からず、切腹仰せ付けられ下されば」と心底言上すれば、「主膳が爲方、侍の道に缺けたる惡口なれば、跡目を潰せ」との御意にて、「其方が申し分近頃神妙なる憤り、少しも憚る事無く、いよいよ恙無く相勤むべし」と、御褒美の御詞數數、久四郎面目身に餘り宿に歸りぬ。さて主膳屋敷は思ひ寄らぬ事に取り上げられ、子息善太郎當年六歳に成りし、母親諸共、家來筋目なる者の里に立ち退きし哀れ。年月累なりて今は十六歳に成れば、「是非親の敵を討つべし」と、いさぎよく立ち出で、國國尋ね廻れど、四五年徒に立ち、此度は四國に渡り、阿波の磯崎に著きて、萬景眺め盡されぬ景色、眞に其の昔、西行も爰に心を留めたる由緣とし、其の具足の物今に殘れる由、旅の疲れの憂きを忘れがてら立ち寄りて見るべしと、其の庵に尋ね行き、住持に逢ひて靈寶拜みたき願ひ、「然らば其れへ入り給へ」と、仔細らしき貞つきして、「あれなる松は御存じの磯崎の名本、是れが西行の近江菅笠、此の煙管筒が富士を眺めに行かれし時のなり。あれに掛かりし友禪繪の布呂敷、古けれども破れぬが不思議なり」信しやかに語りぬ。秋の日の習ひ、程無く暮れて直ぐに其の假葺に一夜の袖枕、夢とも無く現ともの有らず、其の長十丈ばかりの百足、血亂なるが、夜光の玉を耀かし、善太郎が枕元に佇み、「我は汝が生國棒の津の片山陰に住むものなり。其方が覘ふ敵は攝津國古曾根と云ふところに在り在り」と御告げ、御

形消ゆるが如く見え給はず。其夜の明くるを待ちて船を求め、津の國に急ぎて窺ふに、先づ其村の小家に立ち寄り、「若し西國方より爰に居住する者は無きか」と尋ねしに、「あれに見えたる主こそ西の果てよりおはせし浪人なる由」と云ふに任せて立寄り、樣子聞くに、人音せず、怪しやと立ち入りて見れば、年頃四十餘りの女、火燵の櫓に腰を掛け、天卷し、さても勢無や、聲を立つる力も無く、絶え入るばかりなる體、空より下ろせし繩に取り付きたるは、產をする有樣、誰が是れを介抱する者一人も無し。何かは知らず不便に連れて座敷に上がり、腰を抱へて遣れば、詞掛くるまでは無く手を合せて、「さても忝し」と云ふ聲の下より產みけるに、氣力勝りて甲斐甲斐しく、「勿體なく御手に掛けんや」と、自ら早や湯を浴びせながら、「どなた樣も存ぜず、只今の御志の有り難きに付けても、我が良人は由ある西國の人なりしが、不慮の事ありてより此國に下り給ひ、憂き住居の中にも、總領の子出來たるを樂みにせし甲斐無く、親仁は早や七月前に果てられ、有りたきままに日を送り、此の忘れ形見の出來るは己が妹にあらずや。其れをも構はず、不孝を顧みず、剩へ親の百ヶ日たたぬ中より、芥川へ殺生のみに日を暮し、罰當りめが」と語るに、さては大助は果てて其子なると知れり。重ねて、「幾歳ばかり」と云ふに、「もはや十九、器量人に負けず、親仁の名を片取りて大七と申す。今日も此の寒きに襦袢一枚に成りて、親の祕藏の百足丸と云ふ大脇差を差して川狩に」と、問はねど仔細を語りける嬉しさ。今生れしは女子なれば、先づは敵の種は盡きぬ。暇乞して出づれば、數數禮を云ひて送り出でける。知らざる事は力無し。其れより芥川に急ぎけるに、天神の森にて名乘

り掛け、大七を見事に討ちて歸りける。

第四　愁への中へ樽肴

往古參州に小見山惣左衞門とて物頭役を勤め、萬づに理窟がましく、武を高く振ひ、附屆けを第一に覺えたる男、傍輩深谷彌惣子息祝言の祝儀として、珍らしからぬ鯛、柳樽、若黨與四兵衞に口上云ひ付けて遣はし、「其の戻り足に岩平德内へ御娘子御死去の悔み申し入れ、御返事に及ばず歸るべし」と、使請取りて行くに、聞き違へて、彌惣所にて弔ひの悔み云ひ捨てにして走り出で、其れより德内方に行きて、樽肴を持つて、「めでたし」と云ふに、家來合點せず、「是れは門違ひにて有るべし」と云へば、無調法千萬に、「成程斯樣に承りたる」と、たつて斷るに付けて、檀那に斯くと云ひ上ぐるに、「其れならば先づ留め置け」と、使を返しぬ。さてまた彌惣所にては、祝儀半に忌忌しき使、亭主氣に掛けて、直に惣左衞門方に行きて、「最前は各別の御使、如何なる御思召そ」と苦苦しく云ひ出だせば、惣左衞門横手を打ちて、「近頃迷惑」、德内方への使の通りを云ひ分けたるに、彌惣却つて氣の毒に思ひ、「此の類のこと多し。必ず使の者は御免を蒙る」と云ひて歸りけれども、また德内思はく、彼れ是れ憎き奴と、與四兵衞呼び付けて手打にせぬばかりに呵られけるを、もはや首をも討たるるかと、脇差ひねくり廻し、慮外面に顯はれたるに、堪りかねて拔打にするを、丁と受けて切り結び、惣左衞門が小鬢にしたたか手を負ほせながら、協はじと逃げ出で、其の鄰屋敷、里鐘鄕左衞門長屋に驅け込み、仔細語りて賴みけるに、此由鄕左衞門に云へば、「隨分いたはりて匿まふべし」と、疵をば内緣ある外科に掛けて養生させける。惣左衞門も門まで追つ掛け、正しく爰に驅け込みしかども、家來を他の屋敷へ切り散らす事を遠慮して、先づ内に歸れば、頭の疵怪しからず痛み、是れを惱みて公儀を憚めて居しを、家中の取沙汰善からず、「家來に斬られたる、淺まし」と云ひはやらすを、壁に耳ありて是れを惣左衞門に告げたるに、「此上は諸士に面を合はすべきにあらず。畢竟彼の者を貰うて討つべし」と使を遣るに、鄕左衞門一圓肯けず。再三の使に、「是れは各別の驅け込み者の事なれば、何時までも料簡賴む」由云ひたるに、「天地は動くとも渡すまじき」と返事し切るに、此のままにて止めば猶猶恥辱重なり、今は是非に叶はず、押付けて貰ふべしと、先立つて狀を付け、追つ續いて若黨三人召し連れ、死裝束して玄關に入ると、かねて覺悟の者ども立ち合ひ、鄕左衞門家來四人討たれし時、自身手槍の鞘外して二人突き倒す働きの中に、早や與四兵衞を引き出だし、首を打つを見るより、惣左衞門を突き伏せ、即座に切腹して、あたら侍二人相果てけるに、鄕左衞門が一子彌七、無分別に此場より行方知れず立ち退きしが、越前敦賀に父鄕左衞門が兄在るに行きて年月を送りぬ。然るに惣左衞門果てし七月ありて生れたる子專太郎、成人して諸國を覘ひに出でし仔細は、互に親と親相果てたる上は意趣無しと云へども、彌七立ち退きたるに、是れを敵と脇より取り囃すに、自ら敵を討ちに出でざれば一分立たず、方方尋ね廻り、其れとも知らず敦賀に來り、聞けば里鐘の同名あるを不思議に、樣子窺はん爲め此の屋敷に忍び入り、濡緣より簀

子の下に隠れ、一閑なる下に一夜を明す合點して身を縮めて窺ひぬ。爰に彌七從弟娘に美女ありしが、緣遠く、十九の秋まで獨り丸寢の出來心して、彌七に度度文を通はせども、曾て是れを取り上げざるを恨みて、「今や命を捨つべし」と云ふに、不便は增さりながら、其れとは無しに宥めんと思ひ、「今宵密かに忍び給へ」と呟くに、悅びて來り、「此頃の物思ひ、さりとては心强し」など戯れけるに、彌七兎角の返事無く、「こなたの思召の通りに隨ひたくは有れども、我に思ふ仔細あり。是れを語らん爲めに招きたるなり。是れを聞き分けて賜はるべし。我もと少時も爰に居る者にもあらざりしに、過ぎし年、此の段段の首尾ありて、苦しからぬ所を何の思案無く立ち退き、意趣殘らぬ事に敵と成り、彼の者の一子我を覘ひに出でたる由。然れば明日にも相果てし時は、末も固かぬ事に憂き目見給はんも由無し。若し又此のまま存命ふるとても、一度敵に逢はざる中は、枕を交す事せまじと誓願を立てたり。奥の首尾も如何が、早や歸り給へ」と諫めける心の中潔しと思ふ時、娘涙を流して、「とても承引なされぬ上は分別極めたり」と、懷より剃刀取り出して危きを、止めて立ち噪ぐ時、專太郎此の心入れを感じ、緣の下より、「彌七、彌七」と聲掛けたるに、興を覺し、「何者ぞ」と云へば、「惣左衞門が一子專太郎なり。對面すべし」と云ふに、疊を上げて覺悟すれば、先づ座敷へ上がらぬ先に下より大小を渡し、「其の心底にあらず。固より意趣無き事ながら、世間の手前に斯く身を碎いて覘ふと云へども、其方今宵の心根、是れ程の戀に、我に廻り合ふべきを大切にして、潔き振舞に、あはや遺恨殘らず、二度武士立つべきとも思はず。互に戀慕を晴れ給へ」と、其座にて髻切つて出でたるに、彌七も是れを感じ、一夜は比翼の契りを成して執心を晴れさせ、二念を次がず發心して、專太郎が閉ぢ籠りし嵯峨の片庵に尋ね行きて、諸共に父の菩提を弔ひける心こそ殊勝なれ。

武道傳來記　卷八

諸國敵討

目錄

第一　野机の煙競べ
身は一つを情は二つの事
第二　惜しや前髪箱根山嵐
涙の時雨に木綿合羽の事
第三　播州の浦浪皆歸り討
雪の夜鷄思ひも寄らぬ命の事
第四　行水で知るる人の身の程
伊賀の上野にて打治めたる刀箱の事

第一　野机の煙競べ

石火電光、秋こそ物憂き初めなれ。嵐に脆き梢の一葉散りて、丹波の峰分るる横雲の朝、無常野に白布の幕打たせ、御駕籠物靜かに火屋に入れ奉り、何れも無紋の袴裄れて、儀式に燒香ありし時、三十餘りの美男兩人、一度に立ちて香箱の蓋を開け、前後を爭ひけるは、歷歷の侍、外より見苦しかりけり。一人は國見求馬、今一人は猪谷久四郎とて、此の二人は大殿の御物上がりにて、祿も同じく千石の光を顯はし、世に榮えける。此度の御死去に兩人共に御供申す志、御遺言に堅く止るべきとの御事なれば、思ひ極めし命を長らへ、若殿樣へ一命を捧げて、御奉公を相勤むる心底卑しからざる者どもなりしが、人には意地と云ふ事ありて、年頃互に武を爭ひける。殊更此度の首尾、兩人共に大人しからずと、年寄中の指圖にて、香爐二つ出だして、求馬、久四郎、前後無く御燒香を濟ましぬ。此上に何の仔細も無かりしに、久四郎立ちさまに袴の裾を踏みて、晴れがましき所にして轉びけるこそ由無けれ。求馬家來何とやら笑ひぬる有樣に見えければ、久四郎急き心より、又最前の燒香の遺恨に心を成し、三昧離れて福智山の入口にて求馬を討つて、直ぐに何國を知れず立ち退きぬ。折節惡く、此事宜しからぬ沙汰して、久四郎を惡みける。求馬子供は龍之助とて十一歲、其次を虎之助七歲に成りて、童心にも親の敵を心掛けける。其れより三年過ぎて、兄弟御暇を申し請け、母親にも涙の別れして、家久しき下人に大木角右衞門、今津文吉、此の二人附き添ひ、旅の初めの

國廻り、何時會ふべきも定め無く、年月重ね尋ねけるに、昨日今日の心に暮れて、其れよりは九年の憂き事を明し、龍之助は二十六歳、虎之助は十九の冬の末に、敵の久四郎事、出羽の庄内に親しみありて身を隱すの由、微かに知らせける者ありて、又都より打立ち、其の城内は憚り有つて、領境の里に人知れず借宿して、角右衛門は計り鹽を賣れば、文吉は葉莨賣りぬ。龍之助は蟲嚙歯の妙藥を賣り、弟虎之助は小間物賣の負箱に編笠被り、屋形町を廻り、忍び忍びに敵の在所を聞けども、今に知れぬ事を歎き、或時寂しき町はづれに差し掛かり、夕暮急ぐ春の名殘に、心も無き雨降りて、軒傳ひに歸るに、花山の酒機嫌なる奴、薄色櫻を荒けなく手折り、手にかざして歸る醉ひの臭つき、春の木の間の入日の如く照りて、眼に角を入れて往來に鞘當てをして噪ぎ來る。是れかや春の物狂ひと、人皆恐れを成して、蔀門口を鎖してけり。虎之助も斯かる所に來合せ、さながら男の逃げられもせず、望みある身の由無き所にゐるも難儀と思ひしに、下見世上げて簾の内より二十あまりの女房優しく、「さりとては危なし、此方へはひり給へ」と、戸ざし明くるを嬉しく、内に入りて此の難を免れ、暫く爰に休みて内證を見しに、草深き宿ながら火燵に紬の紫蒲團を掛けて眞綿引き、矢筈の下に伽羅割の鉈などの有りしに、何とやら此の女奥ゆかしく心を付けしに、三吉野染の著物に前結びの帶の惡さ、只者とは思はれず。立ち別ること惜しく、幾度草鞋の緒を締めて隙入りけるに、六十ばかりの老女煎じ茶沸かして差し出だし賜はるこそ嬉しけれ。少し亂れて可笑しき事云ふべき口付見て、彼の女、「姥さま」と云ひて差合を云はせざりし。此の利發猶又かはゆらしき面影を見初め、明の日、昨日の禮にもてなして、色含みし匂ひ袋を參らせける。其後は自ら親しく成りて毎日音づれけるに、姥御の留守の事も有りて、好き物語して歸り、いよいよ分けも無く心を通はせ、何時と無く老女の見るも恥ぢず、面白づくの念比を重ね、或時女戯れて、「獨り笑ひの人形あるべし、慰みに見せ給へ」と云ふ。「有らば何惜しからじ。其れは持たぬ」と云へば、「小間物賣の持たぬとは、我が取り出だす」と箱を開くれば何も無く、大脇差をこしを見付け、「其方樣を最前から世の常の商人とは見請けず。如何なる事ぞかし。女の無用なる尋ね事ながら、假初ながら契を籠めて、仔細を聞かでは置かれじ。先づ自らが命は貴樣へ參らせ置くからは」と、義理詰まり至極の所、此上は包み難く、「生國は丹波の者にて猪谷久四郎と云へる者、此の所に隱れゐるの由、其れ尋ぬる」と語りも果てぬに、「其れこそ私存じたる事あり。此國の家老衆柳田長五左衛門と申す方に忍びて匿まへ置かれ、出崎と云ふ所に下屋敷ありけるが、なかなか用心嚴しく、外門、二重、三重、番所假初には出入成り難し。私是れを存じたるは、此秋の出替に置くべき由にて參りけれども、何とや怖ろしく思はれ、慾捨てて浪人して其方樣に不思議の緣を結びぬ。命を參らすべしと云ふ一言は違へじ。今に人置我を忍べば、行く先の三月五日より其處へ奉公に出で、自ら手引をして心任せに討たせ申すべし。只今は名を夢樂と申す」由、段段語れば、虎之助涙をこぼし、「未だ馴染も無き中に、身に替へての心ざし、二世までも忘れ置かじ」と、猶猶情を掛け合ひける。其れより兄龍之助、兩人の家來にも樣子を語り聞かせ、商ひの見せ掛けもそこそこにして、其時を待ちけるに、程無く春の出替り頃に成りて、

人置の許へ行きて、「日外の方へ銀さへ善くば宿下りをせず、婢ばかりを遣はし、御奉公に參らう」と云へば、人置喜び、夢樂の御方へ申して一年ぎりに、其身と使ひ女と二人を、仕著の外、銀百五十目に極め、表向の女郎分に出でしに、思ひの外なる事に成りて、夢樂御内證に引き込まれて、心にもあらぬ枕物語、是非も無き事ながら、是れ皆虎之助樣と申し交せし爲めなれば、とても身は捨物にして御機嫌に入りける。此事少しも包まず有りのままに小さく文したためて、下女に善く善く申し含め、島田髷の髮の中へ彼の文を入れて、袋に扶持方米のはね入れさせ、御門を出だしけるに、仔細の有る屋形なれば、身を振はせ、萬事を撿めて出だしけるに、髮は思ひも寄らず、度度虎之助と狀取り交しける。首尾心掛けぬるに、女の身は是非も無く終に懷胎して、物思ふ中に月重なりて男子を安產しけるに、憂き中にも子と云ふ者不便にて、此女捨て難く成りて、「今日よりは某が奥樣なり」と、あまたの女に言葉を直させ、さりとては御恩忘れ難き御仕方なれば、心も亂れ掛かりて、虎之助事を夢樂に語り、返討にさせんと女心のはかなき時、「さても口惜しや、一度虎之助殿と申し交し、今また榮花に思ひ換ふる事無かれ」と、心底を固めける折ふし、花の盛りに成りて、毎年三月十七日には父親の命日にして、光明院と云ふ山寺へ參詣するなり。されども人を忍ぶ事あれば、長持に入り、佛事道具と見せて參る事なり。「そなた跡より乘物にて參られ、此程の氣づまりを晴らし給へ」と有れば、是れ天の與へと喜び、此事書きしたため、宵に虎之助方へ申し遣はしければ、是れを待ち得たる嬉しさ。明くれば十七日に、以上四人身拵へして、其寺の道筋に待ちければ、約束に違はず塗長持、上に寒天、干大根など置きて、荷ひ來る後前より切り立て、三人の仲間殘らず打つて捨て、さて長持の棒を拔き、「武運の盡きの久四郎。求馬が兄弟の倅龍之助、虎之助なるぞ。此のまま打つも餘り酷し。せめて立ち出で、太刀打せよ」と、蓋を開くれど足立たず、時刻移れば是非無く首を討ち、體ばかり長持を兩人家來其寺に荷ひ行けば、住持立ち出で、「其れは是れへ」と法師數多に舁かせ、「去年の今日は雨にて散散、今日の日和の仕合」と、物語しながら蓋を開けて、「是れは」と驚き噪ぐ所へ、彼の女來りて歎く事を歎かず、初めの段段を語り、「此子も我が腹は貸し物」と、其のまま刺し殺し、其手にて自害して、目前の落花とは成りぬ。此の女爲方惜まぬ人は無かりき。龍之助は生國に歸り、父求馬の恥を雪ぎぬ。弟の虎之助は彼の女の事を思ひ遣りて、叡山に上り出家して其跡を弔ひけるとなり。

第二　惜しや前髮箱根山嵐

茂き小笹を分けて衆道の道に入り初むるは、出羽國の戀の山ばかりには有らず。近道に箱根を越えて、昔小田原の城下に、水際岸右衞門と云へる弓大將の一子岸之助、自然と美形に俤備はり、見し人是れを焦れ、餘所目の關守無くば思ひの峠に上り詰め、水海の底にも沉まんかし。同じ家中に出頭若盛りの男松枝清五郎、何時の程にか色ある兄弟分の契約、不斷妹脊の如く姿を二子山に並べ、愚かに命命鳥の宿り木に夜を籠め、晝も現の如く情の夢を辨へず、寢るにもあらず、目の覺るにも理無き誓ひの詞、耳無き括枕も後に

は笑ふなるべし。岸之助今年は早や十七歳の春秋、月花と眺め暮し、光陰の名殘自らに惜まれしも道理ぞかし。岸右衞門は次第に衰老の身となり、勤務去年よりは苦勞に成り行く年の程、一日も早く岸之助を男體させ、其身は朝夕寐覺心易き願ひより外は無かりき。或時岸之助を呼びて、「元服する支度すべし。御前へは早や御機嫌を以て申し上げたり」と云ひ付けられしに、此事清五郎に語れば、「念も無い事、吉野川流るる水に行く年の歸らぬ花をや」と合點せざるに、年の半も立つを岸右衞門以ての外の無興して、散散叱られし迷惑、浮世の習ひとして我身ながら我がままに成らず、此の内證を未だ知ろし召されざる親仁の昔を尋ねたし。家の宿老たる者に竊かに是れを語り、親父にまた傳へさせければ、そこにて漸う合點ゆかれ、「然らば相役の蔦尾與右衞門に樣子を語り、此の趣清五郎へ宜しく賴む由」、「心得たり」と、其れより當番の書院に上がりし處に、清五郎も宿番の由にて御廣間にて行き合ひしより、「わざわざ參りて申さんと存ずる折から、好くこそ御目に掛かれ、別儀にあらず、岸之助親岸右衞門、年罷り寄りたるに付き、勤め形の如く成り難く、其れに付き、岸之助に一日も早く元服させたき願ひ、是れ立身奉公の事なれば料簡あつて赦し給はれと、拙者に其方へ傳へ給はれとの事」、清五郎合點せず。與七右衞門打笑ひ、「勿論若き時の習ひ、某なども覺え無きにあらず。あつたら前髮脫カ」振を惜しきは常の人心、されども外の事と格別の儀、御耳にも達したる上の樣子も有り、身が賴まれし甲斐には清五郎殿聞かせられて給はれ。六十に餘りたる者が八幡賴みまする。幸ひ今日は日から好し、今晩元服致させる」と云ひ捨てて立ちけるを、清五郎、「いや是れ與七右衞門殿、拙者は合點致さぬ」と云へども、聞かぬ貞して、「御番御油斷無く御勤め申したる事は其の通りに仕る。さらば、さらば」と云ひながら歸り、直ぐに岸右衞門所に立ち寄り、「只今晝番勤めて歸ります。さて元服の事は拙者是非と申して參りたる上は別儀無し。御望みの如く御前首尾善かるべき瑞相卽ち今日元服日、最早清五郎殿には今宵宿番なれば歸らるまじ。めでたく初冠遊ばせ」と、何の仔細無く云ひて戻られける。跡にて風は剃刀の鋭く、柳髮をや吹き落すらん。明くれば清五郎番より下りて歸る道にて、增川槇右衞門、星村九郎八に逢ひ、「先づ以て御目に掛からず。變りたる話はとかく緩りと承るべし。御兩人ながら御入り遊ばせ」と伴ひて入り、一つ二つ大坂より參りたる落し話、次に二道の色噂に成りて、「云ふはくどけれども、御亭主の御仕合に及ぶ者は他國は知らず、岸之助殿の器量に增してまた有るべしとも覺えず。されども年月の流るるには柵も無く、人は一歳も闌けては眺めの薄くなる物ながら、いつまでも置きたきは前髮」と云へば、清五郎此詞耳に嬉しく留まり、「是れは好い所を仰せらるる。拙者も其れ一つを思入れにてゐる所に、氣の短き親仁にて此頃に是非元服させたき由、某聞き入れざるとて、相役與七右衞門を賴み、昨日もお城にて傳言なれども、一圓合點致さぬなりと云ひ切りたり」と云ふ所へ、「岸之助御見舞」と來りけるに、宿を出でさまに時雨のしたれば、雨羽織著ながら、頭巾を深く被り、「何れも御出で」と時宜はして、頭巾は取らず座に就くを、清五郎是れを咎めて、「若き者の今から頭寒がるさへ有るに、如何に御兩所ながら御心易きとて、無禮なる爲方」と白眼めば、くつくつ笑ひしに、槇右衞門氣を付けて、

「今の話の樣子にては無き」かと云ふに、清五郎、「心もとなし」と、無理に頭巾を取れば、「南無三寶、櫻に大風、花無き枯木男と成る姿、是れ程に變るものか」と云へば、兩人「いやいや、世間の盛りより吉野の春の暮に迷ふべし」と座興云へども、清五郎不機嫌に成りて、挨拶そこそこに白けたるに、首尾惡しと二人は歸りぬ。跡にて岸之助懷より前髪、袱紗物に包みて出だして、「其方へ渡します」と云ふを、取つて投げ付け、「其方は誰れに許されて元服したる」と、氣色變りたるに驚き、「はて昨日與七右殿に苦しからぬ程に元服せよとの、こなたと申し交し來られし」と云ふを、「無心底者」と引き寄せて刺し殺し、其れより與七右衞門所に行けば、折節宿に居合はせしに、「拙者聟とも合點致さめを元服させ給ひ、世間我ら一分立ち申さず」と拔打にするを、切り結び、與七右衞門老足踏み定め難く危き所へ、岸右衞門公用の事ありて來掛かりしが、我子の早や討たれたると云ふ事も知らず、此の有樣を見て、先づ相役の親しき方に牽かれて、「與七右助太刀致す」と、詞を掛けて清五郎に切つて掛かる。されども力甲斐なき老武者の打つ太刀、強い若い手に叩き付けられ、兩人共に切り倒し、止めを刺して退く處を、與七右衞門若黨鶴右衞門遁さじと切る太刀、清五郎大袈裟に分れて伏しぬ。下下ながら即座に主の敵のみか、三人の敵まで討ち止めける。

第三　播州浦浪皆歸り打

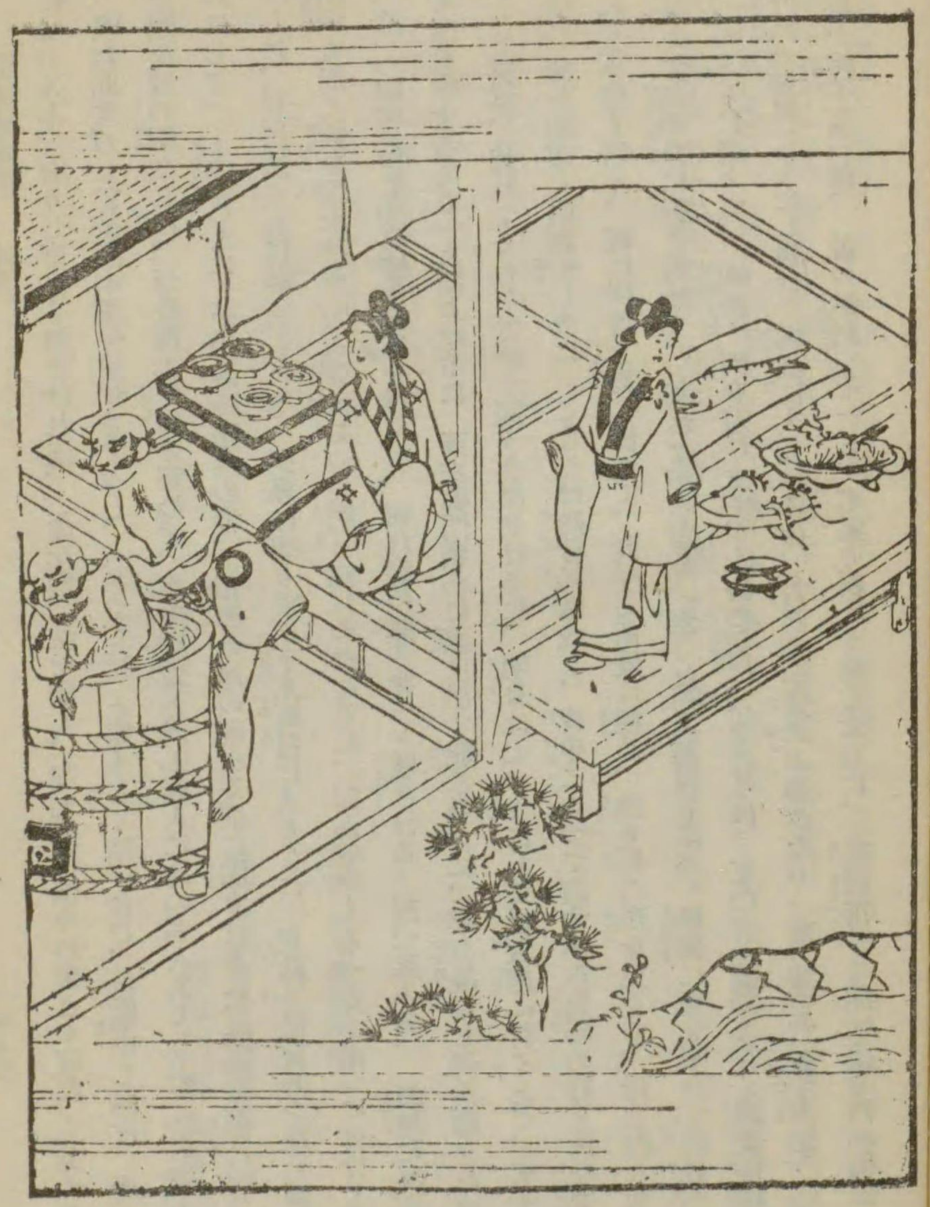
人は地道なるこそ善けれ、毎年信濃國桐原の里より賣馬引かせて、彌太夫と云ふ博勞、播州立野に立ち越えける。昔は武士の名馬を持つこと第一に嗜みぬ。此度の若馬は雲雀毛の太く逞しく、天晴名も高く龍山と申して、自慢する甲斐こそ有れ。其頃小湊井右衞門とて、家中一番の馬好き、先づ此の屋形に行きて見けるに、其の勢ひ耳〔身ノ誤刻カ〕に替へても欲しき心底現はれしに、彌太夫仕合此處と思ひの外に高ばり、「金三枚」と申し出だすを、拾貳兩より拾五兩まで望みしに、大方談合しまりて、代金は明朝相渡すにして、厩に繫がせ、彌太夫は宿に歸る時、道にて出來出頭の樗本彌に逢ひ、「其方が最前に引ける馬、代金に構はず此方へ取るべし」と云ふに慾心萠し、「其の御心底ならば只今引いて參るべし」、また井右衞門方へ行けば、折節公用ありて留守なり。少しの中借りたき由、若黨合點せず、「旦那の御前は我らに任せ給へ。未だ金取りたるにても無し」と、無理に引き出だし、樗彌方に行けば、悦ぶこと限り無く、「代金三枚に極め、即ち明朝渡すべし」と約束して歸りぬ。樗彌其の夕、梅の馬場にて輪乘までしたるを、見る者手を打つて、「是れ程の馬今では家中に恐らくは雙びあるまじ」と讃められて、猶自慢して私宅に歸りける。其中に富森久九郎と云へる男、其足より直ぐに井右衞門方に行き、「さても今朝御手前の厩にて見し雲雀毛を、樗彌求めしとて祕藏に乘りたり。あれ程の馬、何として買はれぬぞ」と云ふに、井右衞門驚き、「我が留守の內に引きて行くさへ憎きに、分別あり」と、急ぎ彌太夫を呼びに遣り、「段段不屈なる爲方、買ふとも買はずとも急度引いて參れ」と荒けなく呵られ、迷惑ながら又樗彌方へ行き、「暫しの中借りたき」と云ふ。仔細を聞けば、「始めに井右衞門殿契約、されども手形も致さず、所詮御留守の中に引いて參つた御腹立。此上は、

たとひ百兩にても賣りは致さねど、右の云ひ分けに、ちよつとお目に掛けて參らん間、如何やうとも御恩に著申すべし」と、たつて云ふに、「然らば馬は此方の馬なり」と、返す返す念を入れて貸しぬ。其れより井右衞門屋敷へ引けば、先づ廐に繫がせ、彌太夫を呼び出だし、金子拾五兩相渡し、「請取手形致せ」と云ふに、「是れは近頃迷惑」と云はせず、「爲めに於いては一寸も蹣らせぬが」と、刀に反を打てば、「如何にも仕るべし」とて、賣手形慥かに書きて、其足より直ぐに本國へ走りける。井右衞門は其夜の明くるを待ちかね、まだほのぼのより鞍鐙を改めて美美しく粧はせ、知れる方には云ふに及ばず、乘り歩りきて見せけるを、驛他仁介此事を李彌に語り、「昨日其方の乘られし馬をば、今朝井右衞門我が買うたる馬とて、自慢たらだらにて通りたり」と云ふに、李彌大きに不興し、彌太夫を呼びに遣れば、宿には早や夜脫して居らず。「既に我れ梅の馬場にて乘りたるを誰れ知らぬ者無し。然るを井右衞門に取られたりと評判に逢ひては一分立たず」と、「驛他仁介前を乘り通りたらば、定めて小松馬場にて賣むべし」と、狀したためて下人に持たせ遣りて渡せば、井右衞門頷き、「晩程此の松原へ竊かに立ち合ひ、此方も僕一人も連れず、互に一騎打」と其宮に立ち寄り、返事さらさらと書いて、使戻して宿に歸り、支度して兩人立ち出で、云ひし如くに只一人づつ見事なる爲方ぞかし。頃は極月の下旬、然かも其夜降る雪馬蹄三尺深く、袖打拂ふ暇無く戰ひけれども、李彌もとより一流の兵法、容易く討たるまじと思ひしより、井右衞門請太刀二つ三つ擊たれながら、「無念や」と、其處〔に脫カ〕倒れ伏して四五返、「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」と唱へ、「早く寄つて止めを刺せ」と云へば、李彌、「さては今擊ちし太刀手應せしと覺えしが、頭に深く切り込みたるよ」と嬉しく、近寄るに音無し。「さてこそ息絶えたり」と、留刀刺し掛かる處を、寢ながら横に拂へば、二つに成つて倒れしを、首尾好く仕舞ひ、幸ひ、是れより三町南に德山平八隱居して入入、此の庵に辿り行けば、折節雪中の夜梅と云ふ題を置いて、燭を秉りて遊ぶ所に、此の有樣を見て仔細二言に及ばず、先づ持佛壇の下に隱し、祕藏せし唐鷄を突き殺し、自身手に下げて、右の李彌が死骸の際より此血を絞りこぼし、其處より北の藪の堀端まで傳はせ、歸りに足跡を消して、樣樣心を盡して勞はる。武士の意氣地ぞかし。其の翌日此の沙汰、家中一倍〔一杯〕に成りけれども、血の引きたる樣子、西國海道に退きたりと見えしより、李彌子息孫七、同じく弟宇助、御暇を申し上げて出でける。爰に哀れなるは先年李彌、浪人の中、江戸にて娘を嫁がせ置きし夫は、身上輕き奉公人牛俣彌二郎と云へる男、然かも祿よりは內證貧しかりき。此事を孫七方より云ひ遣りしに、女取り分けて歎き、「如何に女子に生れたりとも、武は弟どもには負けじ」と、彌二郎に暇を乞ひし時、「其れ程に思はれなば、我が爲めには舅、親と同然なれば、遁るべきにあらず。併し彼の敵の在所何處とも知れざる中は、尋ぬるに路錢貯へずしては成り難し。其內隨分其方も外なる營みしてなりとも、路金溜まる分別。我も勤めの隙は油斷無く心掛くべし」と、終夜野に出で、親の境垣に輪穴掛けて犬を釣りて是れを賣り、女房は人目を忍び、絞煙草入を縫賃僅かを顧みず、心に此の思ひを含みて、朝夕胸に迫りて忘れず、半年は末を賴みに誰れ知らぬ賤の手業、男も雨の夜は怠り、月の夕も仕合に由りて、空しく露に

袖絞りて歸るのみ。世は心に任せぬ習ひなるに、思ひの外の事に身を寢しめるぞ賴もしき。されども金銀拂らず、女心の淺ましく、或時彌二郎に恨めしき色を見せ、「我れも男に生れなば、今まで斯くしても居らじ。是非覘ひて本望達せんと思へば、男子から成るまじき事にあらず。他人の身の念力薄きより何時か望みを達せん。侍は其の別ち無き義理の道立てるも立てざるも、心心の胴骨强き者の羨ましき時、殊更今なり」と、云ふ心底の程、彌二郎是れを耳に障へて、「斯く武士の道ならぬ事に殺生するも其の爲めならずや。尤も親の敵を討つべき思ひ大切なるより云へばとて、夫たるものを蔑にする惡口一度二度ならず」と、內證は調ほらず、心は急ぐ餘りに女房を刺し殺し、六歳に成りし女子をも、「長らへて憂き目見んより」と、同じ刀にて突き殺し、其身も自害して果てけり。さて孫七、宇助は西國殘らず尋ねしに逢はず、引き返して江戸に下り、尋ぬるには行方を知らず、無念ながら孫七裏棚借り、宇助は四谷熊之進殿へ小姓分に出だし、是れも若し敵の便宜とも成らんかと勤めし。或時小姓仲間四五人、次の間に集まり四方の話するに、宇助は壁にもたれ掛かり、「夜前の酒宴に草臥れたり」と云ひながら居眠り暫しとて、柱に當りて立て掛けの髮茶筅に成りぬ。目覺めて是れを不審して、「誰れか解きぬらん」と四邊見廻す所に、戸川浪之助、壺口仙六、興がる話を打笑ひて居たるを聞き、宇助、「さては髮損はしたるが可笑しきか」と、理不盡に切り付けしに、云ひ分けするに隙無く、二人して討ち止め、熊之進に此由云ひ上ぐるに、浪之助を不便がらるる最中にて、「宇助は手討」と沙汰させて置きぬ。さて孫七は杖柱と賴みつる一人の弟に後れ、今は力を失ひしが、從弟に樗北右衞門と云ふ浪人、是れを便りに心を合はせて覘ひしに、或夕、風の心地して牀に就き、三日發熱りて疱瘡出で、九日目に相果てけり。彼の井右衞門は八入に七十日庇陰はれ、西風烈しき夜密かに國を立ち忍び、當處に所緣の有るに、始めは影を隱しけれども、孫七兄弟は西の國に下りたると聞きて心を寬し、編笠深く被りて、久しく氣詰りを晴らさんと、寺社の景地を心ざして行くに、番町にて孫七是れを見付け、「小湊井右衞門遁さぬ」と詞を掛けし時、「狼狽者。人違ひ」と云ふに、「見損じたりや」と編笠覗く所を拔打に切り倒しける。以上四人の敵今は一人殘らず絕えて、井右衞門が手柄隱れ無し。世には斯かる例も有るものか。

第四　行水で知るる人の身の程

白妙に降り續きて、下野國黑髮山も夜の閒に姿の變りて老の首と見成しぬ。年を重ねて昔語に聞きしは、那須の某殿に勤めし菅田傳平、陰山宇藏、此の兩人申し出だして、今日の雪の面白きに、いざ追鳥狩を初め、酒の肴に雉子四五羽、手に取りたるやうに勸めければ、何れも飛び出づる若者ども、三十餘人誘ひ合せ、其身輕行に拵へ、手毎に棒乳切木、或は割竹にて敲き立て、驚く鳥のほろろ打ち、弱りしを捕へける。或人申せしは、「此原の殺生石に留まりし諸鳥忽ち落ちて、骨をも折らず掴み取りと」云へば、各、「是れは不思議」と、其石のほとりに行きて見しに、人の申せしに違はず、留まらんとすれば其儘轉け落ちて、鳥



鳶に限らず、殊更鷺は脆く、山鳥の己が命知らず、飛び掛かつて落つるを、皆皆取る事を論じて騙け付けしに、未だ片息にして騙け廻りしを、彼方此方に追つ付き、終に捕へて、其れより直ぐ鍋掛の里に行きて、鳥ども毛燒して萩柴折り燻べ、酒事に成して寒さを凌ぎけるに、菅田傳平申せしは、「彼の石に落ちたる鳥は必ず中る事なり。其れも人に寄るべし」と申せば、生溫き世の中、堪忍せざる若者、「命惜しからず」と、胴殼燒、頭まで餘さず暴食の中に、熊川茂七郎思案良して食はざりしに、是れを見て心ある人は何れも用捨して、酒ばかり飲み暮しけるに、高砂丹兵衞横手を打つて、「茂七郎殿の長生。鳥を參らぬ人人は五百八十年も生き殘りて見給へ」と、四五度も申しければ、茂七郎刀おつ取り立つ所を皆皆引き留め、仔細無く假宿を立ちて歸りさまに、人の透間を見て丹兵衞を待ち伏せして、「最前の事覺えたか」と、一文字に擊つて掛かれば、丹兵衞も怯れぬ男にて、暫く切り結ぶ中に、茂七郎遂盡きて棚橋に上がりしに、薄雪にて朽木の穴見えずして、太股まで是れに蹈ん込み、身の働き成り難く打ち止められける。其れより丹兵衞行方知らず退きける。茂七郎一子茂三郎七歳なれば、敵討つ事も果てし無く、母親歎きの中に育て上げて十六歳に成りぬ。されども丹兵衞見知らざりければ、たとひ廻り合ひても討つべき便り無く、又後見頼む方も無く、明暮無念を重ねける。やうやう思ひ出だして、「因幡なる伯父を頼みて丹兵衞を討たすべし。汝の父の爲めには兄なれども、樣子あつて挨拶惡しく、久久不通なりしが、此度立ち越え頼みなば、よもや外には見捨て給ふまじ」と、文細細と書き認め、茂三郎を爲立て、熊川茂左衞門殿方へ遣はしけるに、旅の日數を重ねて、因幡國に著きて

屋形に尋ね入り、有りし事ども語りければ、茂左衞門涙を流し、茂七郎に恨みの事ども忘れ、「其の丹兵衞惡し。我れ助太刀して是非本望を達せさすべし、心安かれ」と頼もしく請け合ひ、御暇申し請け、茂三郎を伴ひ諸國を尋ね廻りしに、丹兵衞も何國を定めず、森澤團齋と云ふ浪人に槍の名人ありしが、ひたすら是れを頼みにして、上下八人にして、或時奈良の都、猿澤の池の前なる宿に泊りけるに、時節と郷に茂三郎も一宿せしに、互に斯くとは知らざりし。夕暮に成りて下下水風呂に入りしに、互替りに後ろを流しけるに、脊中明所も無く灸を居ゑけるに、「今日あつて明日知れぬ身なるに、何か養生入るべし。萬づに付けて浮世」と云へば、「如何にも世に隱るる主を持ちて、何れ定め難き身」と呟きける。茂三郎小者、垣越に聞きて、「斯かる事を申す者あり」と語りけるに、茂左衞門密かに裏に出で覗き見しに、年月覗ひし丹兵衞なれば、躍り上がりて喜び、其れより心を付けて聞き合はせけるに、明日は七つ立にして伊賀越に行くとて、早や出立燒くなど、馬を約束し用意忙しきに、こなたは隨分沙汰成し、夜半に立つて道すがら足場の好き所を見繕ひしに、心よき所も無く、既に伊賀上野に成りて、詮する所爰に極め、曲り所の角を見立て、以上四人勇みて酒屋に入りて釣掛升に引き請けて、其れながら差しつ差されつ心祝ひして、緣側に腰を掛けて居並び、其日も八つの下りに成りて、乘掛二匹を追ひ立て、上野の宿に入りけるは、互に危き所なり。團齋得物の槍持、町外れの屋根にもたし掛けて雪隱に入りけるは、丹兵衞が武命の盡きなり。茂三郎馬の眞先に向ひ、「熊川茂七郎が倅子茂三郎、親の敵討つぞ」と、名乘り掛けて切る太刀に、高股落して開けば、丹兵衞拔き合せ、一命爰にして戰ひしは、天晴武士の働きなり。時に團齋飛び下り助太刀打つを、茂左衞門は横手薙ぎて、兩方手者なれば、暫しが程祕術を盡しける。されども茂三郎、茂左衞門、利の劍なれば、次第に强く討ち留めて止めを刺し、其身も深手なれば、死骸に腰を掛け、息を次ぎける內に、其國の守より大勢驅け著け、勇めて歸る。古今武士の鑑、刀は鞘に納め、御代長久、松の風靜かなり。

貞享四年卯初夏

武道傳來記　卷八

江戸日本橋靑物町
萬屋清兵衞
大坂吳服町眞齋橋筋角
岡田三郎右衞門

5
1

昭和二年十二月二十日印刷
昭和二年十二月二十五日發行

〔非賣品〕

日本古典全集第二回
西鶴全集
第七

編纂者　與謝野寛
同　正宗敦夫
同　與謝野晶子
裝幀圖案者　廣川松五郎
發行者　東京府北豐島郡長崎町一六二　長島豐太郎
印刷所　東京府北豐島郡長崎町一六二　新樹製版印刷所
印刷者　高瀨清吉

發行所　東京府北豐島郡長崎町一六二
日本古典全集刊行會
振替口座東京七三〇三二
電話番號大塚二〇九六

（荒井印刷所印刷）

5
1

550
176

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black